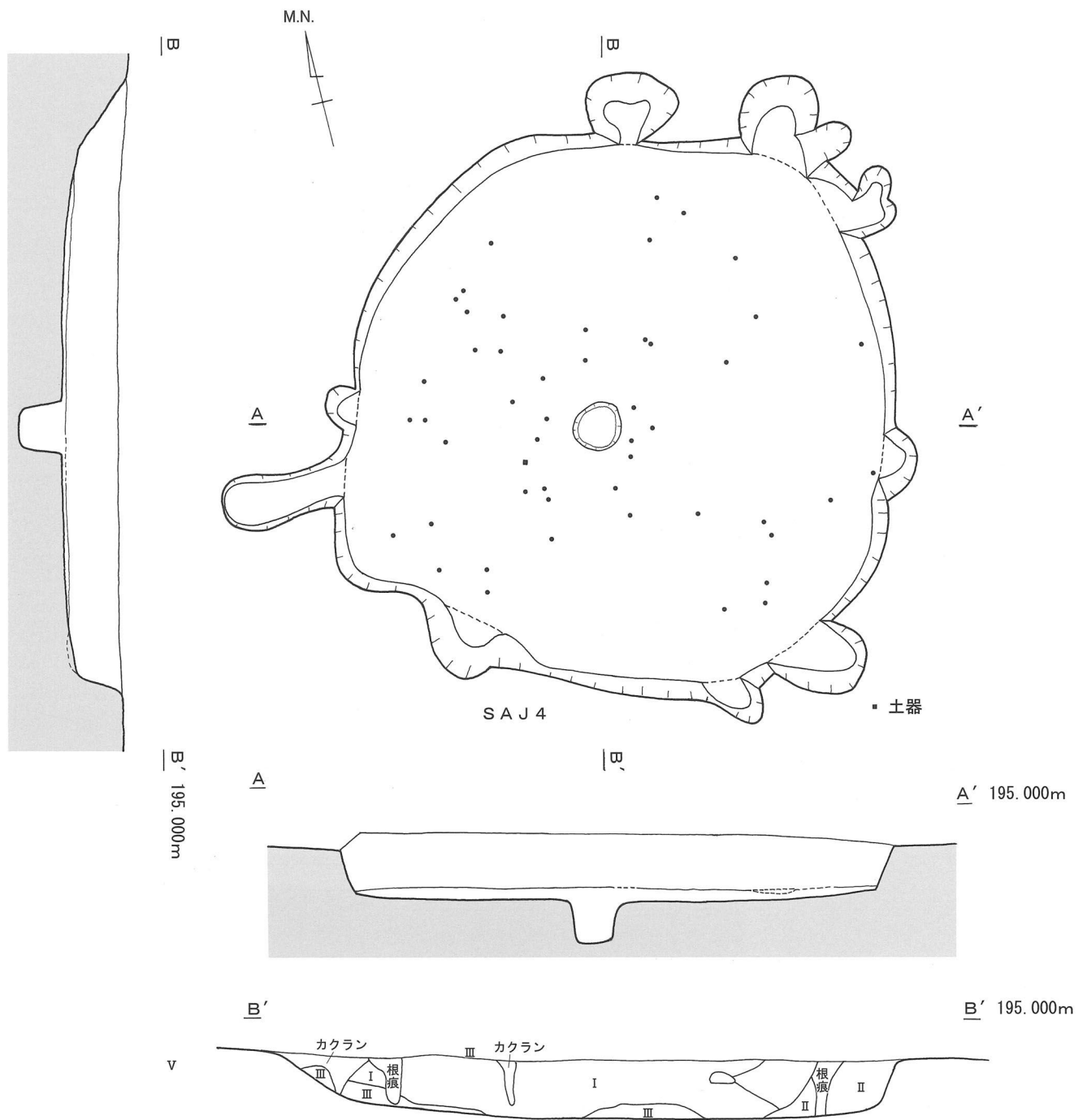


【土層注記】 SAJ3

- I 黒褐色 (7.5YR 3/1) 御池ボラを微量に含む。ややしまっている。
- II 暗褐色 (7.5YR 3/1) 直径2~3mmの御池ボラが多く混在する。ややしまっている。
- III 暗褐色 (7.5YR 4/3) 直径5mmの御池ボラを少し含む。しまりが弱く、粘性あり。
- IV 褐色 (7.5YR 4/3) 直径1~3mmの御池ボラを多量に含む。しまりが弱く、粘性あり。
- V 褐色 (7.5YR 4/4) 直径1~5mmの御池ボラを多量に含む。ややしまり、粘性がある。
- VI 褐色 (7.5YR 4/6) 御池ボラを多量に含む。
- VII にぶい褐色 (7.5YR 7/4) 御池ボラを少量含む。ややしまりがある。

0 1m

第6図 野添遺跡 3号竪穴住居跡実測図 (SAJ3 : 1/30)

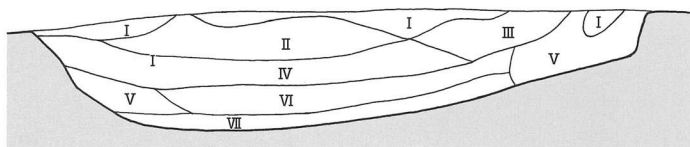
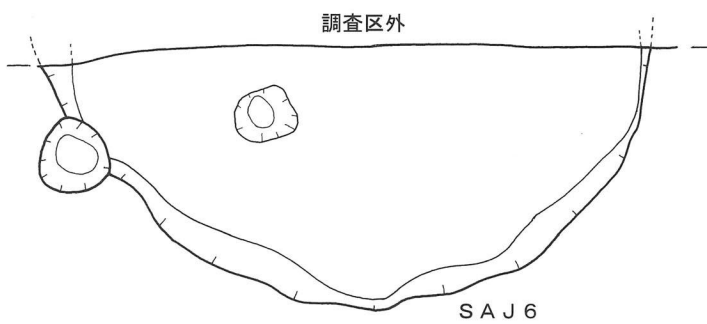
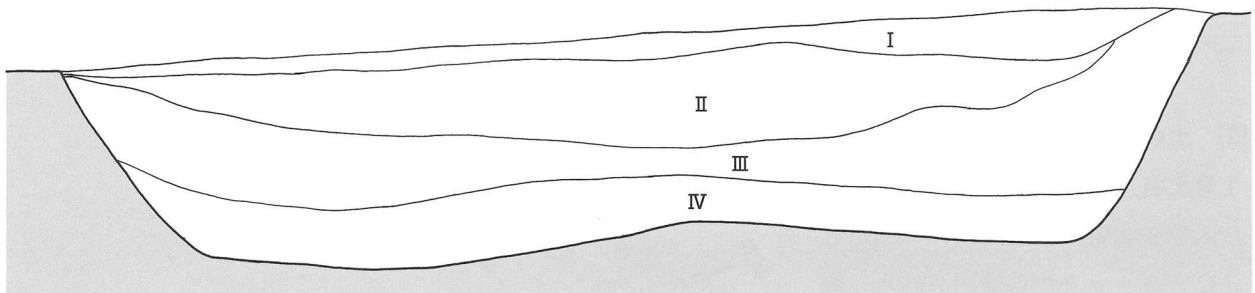
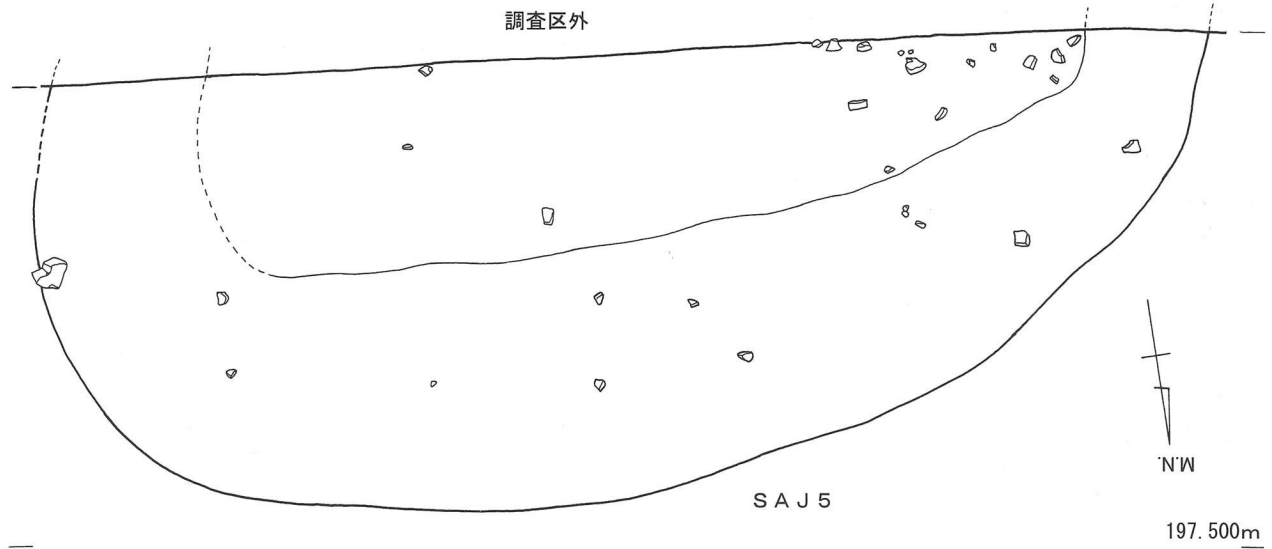


【土層注記】 SAJ 4

- I 暗褐色 (7.5YR 3/4) 御池ボラ (黄橙粒子10YR 7/8) が混入し、炭化物を含む。
- II 褐色 (7.5YR 4/6) 御池ボラ (黄橙粒子10YR 7/8) が混入し、炭化物を含む。I より若干硬め。
- III 暗褐色 (7.5YR 3/4) 黄褐色 (10YR 5/6) ブロック、御池ボラ粒子を多く含む。

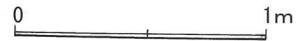
0 1m

第7図 野添遺跡 4号竪穴住居跡実測図 (SAJ 4 : 1/30)



【土層注記】 SAJ 5

- I 黒色 (10YR 2/1) 御池ボラ (黄橙色粒子) を少量含む。しまりがなく、粘性ややあり。
- II 褐色 (10YR 4/4) 御池ボラ (黄橙色粒子) を少量含む。しまりがあり、粘性強い。
- III 暗褐色 (10YR 2/3) 御池ボラ (黄橙色粒子) を多量に含む。しまりがあり、粘性強い。
- IV 暗褐色 (10YR 3/4) 御池ボラ (黄橙色粒子) を多量に含む。粒子も大きく (1~20mm) しまりがあり、粘性強い。



【土層注記】 SAJ 6

- I にぶい褐色 (10YR 5/4) 御池ボラ (黄橙色粒子) 直径1~2mmを30%程度含む。しまりがあり、粘性ややあり。
- II 褐色 (10YR 4/6) 御池ボラ (黄橙色粒子) 直径1~5mmを5%程度含む。しまりがあり、粘性弱い。
- III 褐色 (10YR 4/4) 御池ボラ (黄橙色粒子) 直径1~2mmを5%程度含む。しまりがあり、粘性弱い。
- IV 褐色 (10YR 4/6) 御池ボラ (黄橙色粒子) 直径1~15mmを多量に含む。しまりがあり、粘性弱い。
- V 暗褐色 (10YR 3/4) 御池ボラ (黄橙色粒子) 直径1~15mmを多量に含む。しまりがあり、粘性弱い。
- VI 暗褐色 (10YR 3/3) 御池ボラ (黄橙色粒子) 直径1~15mmを多量に含む。しまりがあり、粘性弱い。
- VII 黄橙色 (10YR 6/8) 1~10mmの黄橙色粒子 (御池ボラ) のみで構成。しまりがあり、粘性なし。

第8図 野添遺跡 5号・6号竪穴住居跡実測図 (SAJ 5・SAJ 6 : 1/60)

7号竪穴住居跡（SAJ7：第10図）

B区の北寄りの御池ボラ上面で、C5グリッドから検出された。円形プランの住居跡でSAK2とSDK1に切られている。SAK2と同時代のSAK3となる可能性も考えられたが、断面の土層観察によって切り合い関係が確認できたので、別遺構と認定した。南北方向約4m、東西方向約4.2mと推測され、検出面からの深さ6～15cmを測る。なお明らかな支柱穴は検出できなかったが、床面南側に径18～22cm、深さ22～57cmのピット5基を配する。床面中央から南側に向けては、長軸137cm、短軸125cm、深さ約30cmの土坑状の落ち込みが検出された。覆土は黒色土と御池ボラ粒を含む暗褐色土でその構造から炉跡と推定されたが、炭化物・焼土等は見られなかった。住居の埋土は、御池ボラ粒を含む黒褐色土や暗褐色土が堆積する。床面には硬化面や焼土等は確認できなかった。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で出土した。

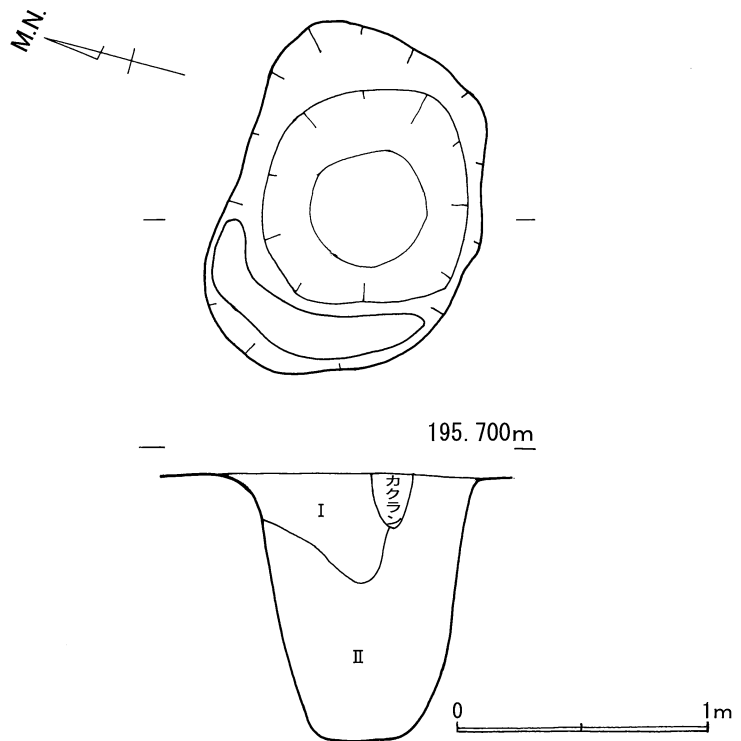
出土遺物は第19図に示している。この住居に伴う遺物は（65～68）は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、65・67は、口縁部がやや外反する粗製の深鉢で、口縁部に幅広の粘土帯を貼付け、断面は三角形に近い状態になる。内外面とも横方向のナデである。66は口縁肥厚部に2条の浅い凹線文を施す深鉢で、風化が著しいが内外面とも横方向のナデである。68は組織痕土器の胴部片である。内面はナデ調整である。

(2) 土坑

1号土坑（SCJ1：第9図）

B区やや北寄りの標高約195.50m付近、C5グリッドから検出された。周辺には東約1mに6号竪穴住居跡が存在し、南東約1.5mには5号竪穴住居跡が存在する。規模は長径約140cm、短径約102cmを測り、平面形態はやや不整の楕円形で断面形態は壙状を呈する。埋土は基本土層II・IV層を主体とし、炭化物粒子を微量に含む。出土遺物は題19図に示している。

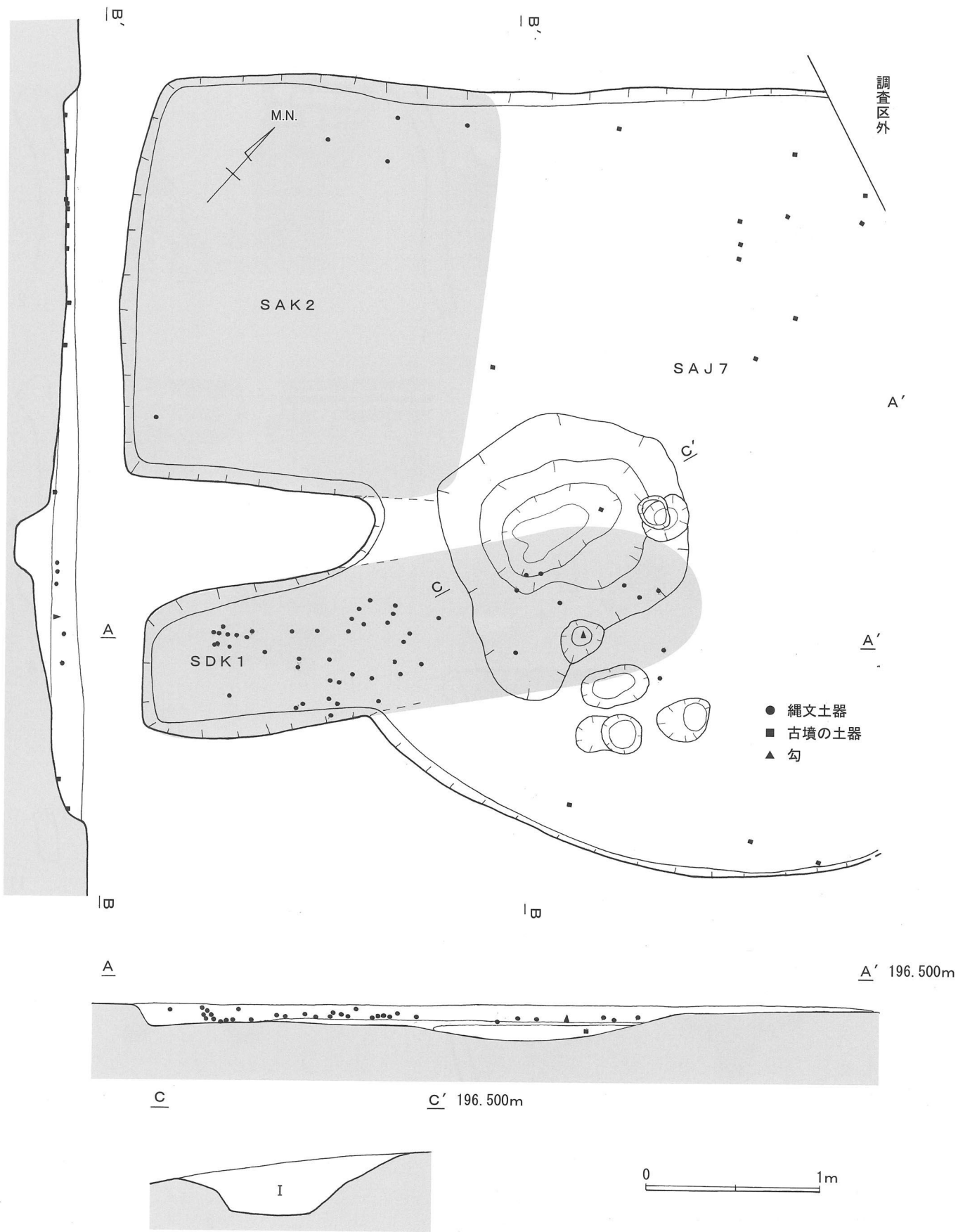
69は無文の深鉢の胴部片である。器面調整は外面はミガキを施し、一部指おさえがみられる。内面はミガキ、ナデが施され、一部指おさえ、黒斑がみられる。



【土層注記】SCJ1

- I 暗褐色（10YR3/4）御池ボラ（黄橙色粒子）直径1～2mmを含む。炭化物混入。しまりがあり、粘性やや有り。
- II 暗褐色（10YR3/4）御池ボラ（黄橙色粒子）直径1～5mmを含む。硬質で、炭化物が混入する。

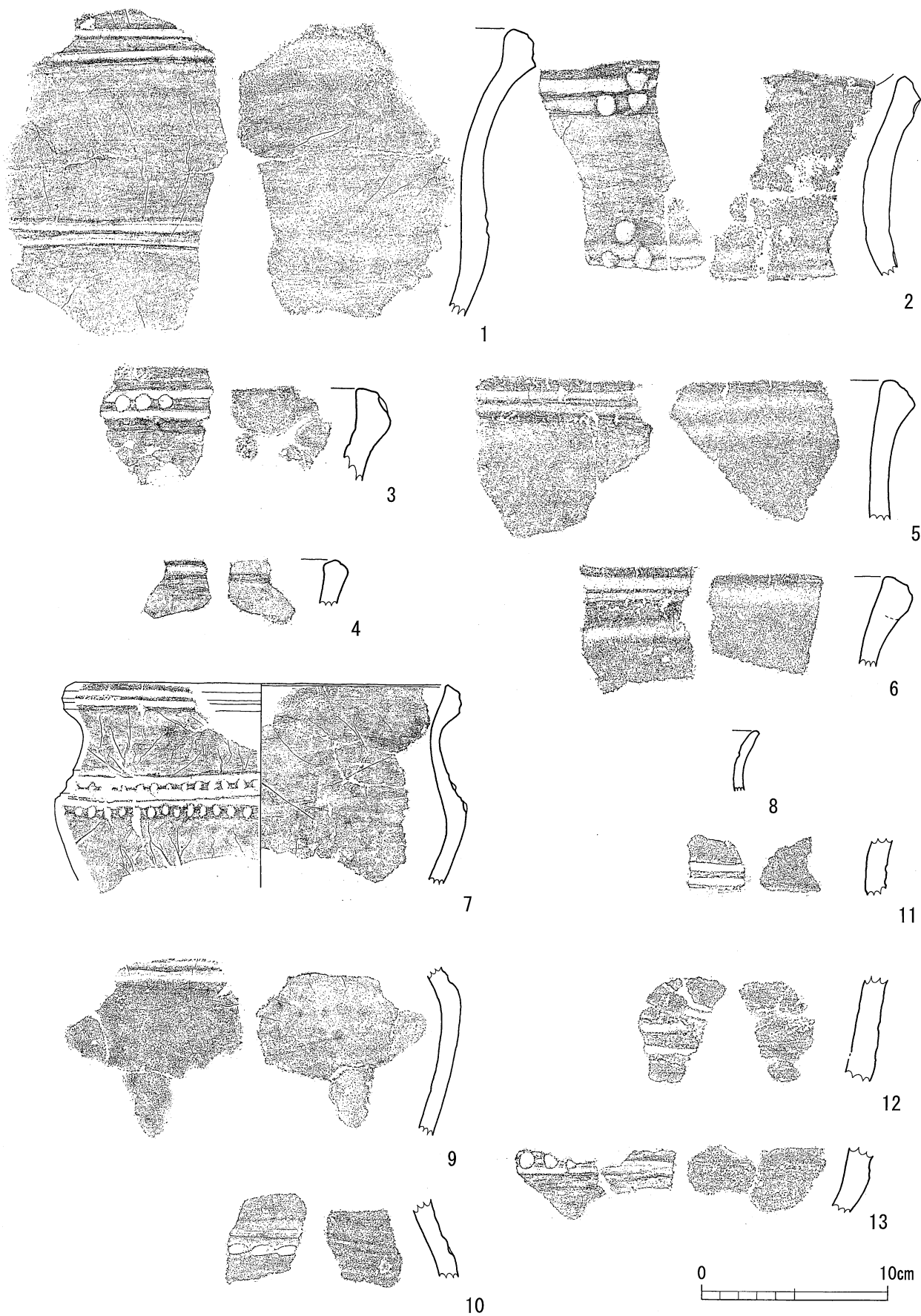
第9図 野添遺跡 J1号土坑実測図（1/30）



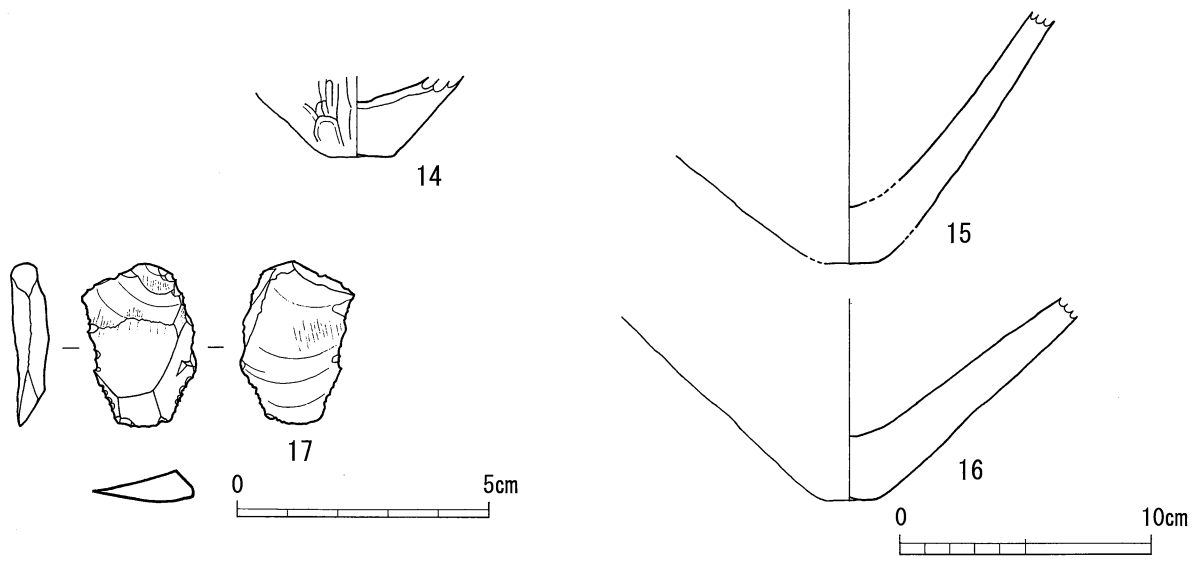
【土層注記】

I 暗褐色 (7.5YR 3/4) 黒色土と黄橙色粒子が混在する。

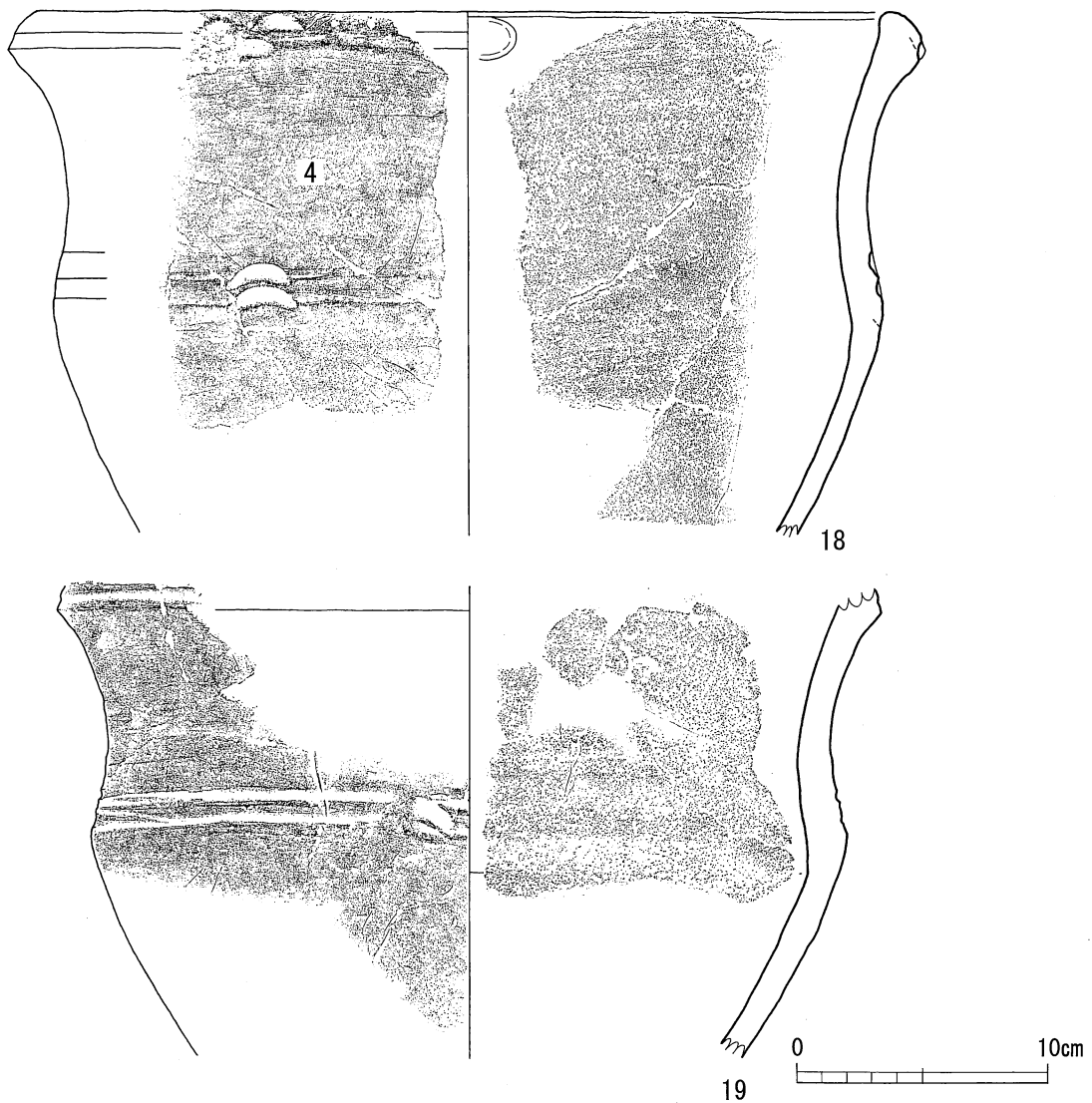
第10図 野添遺跡 J 7号竪穴住居跡・K 2号竪穴住居跡・K 1号土壇墓実測図 (1/60)



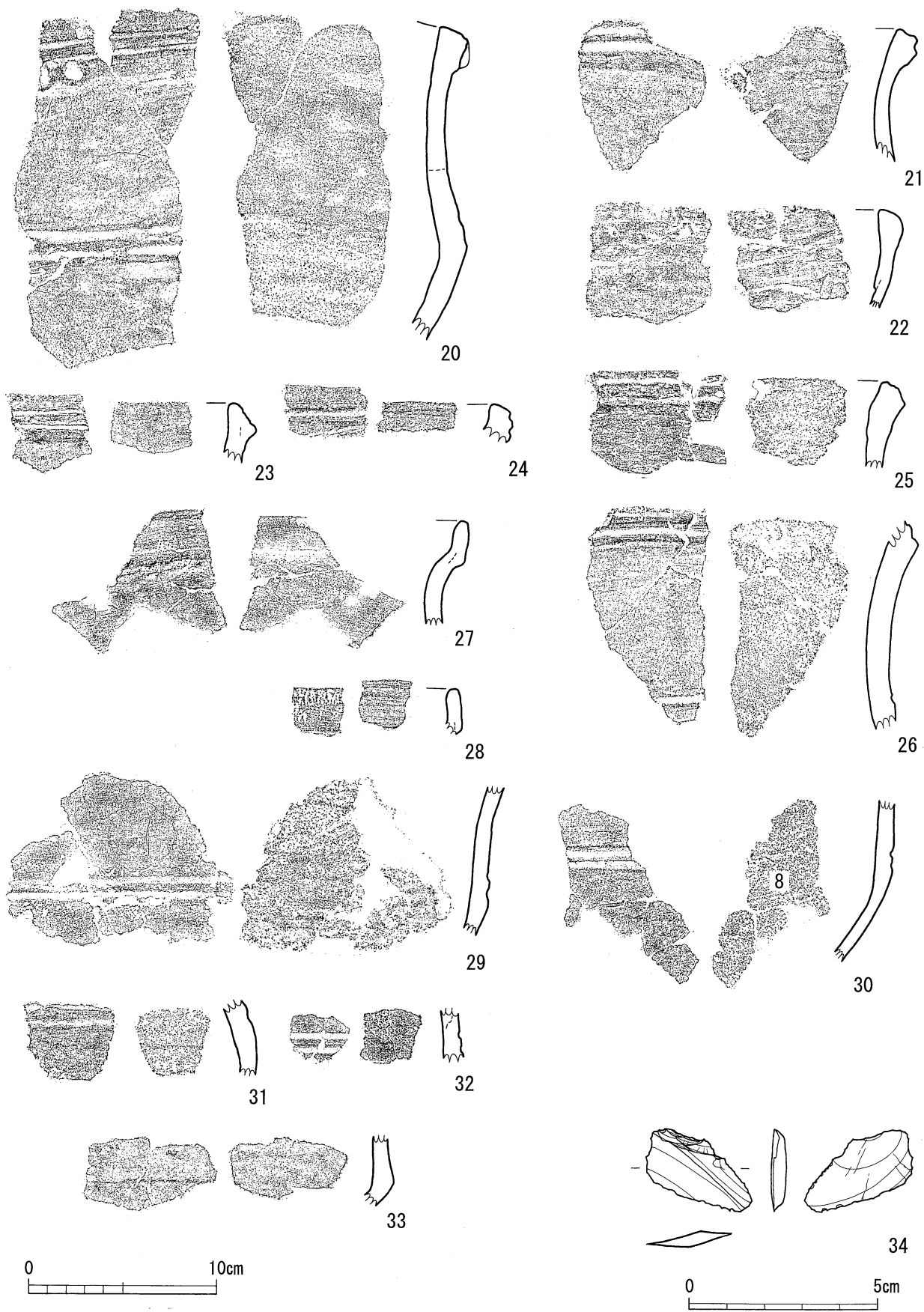
第11图 野添遺跡 J 1号竖穴住居跡出土遺物実測図(1) (1/3)



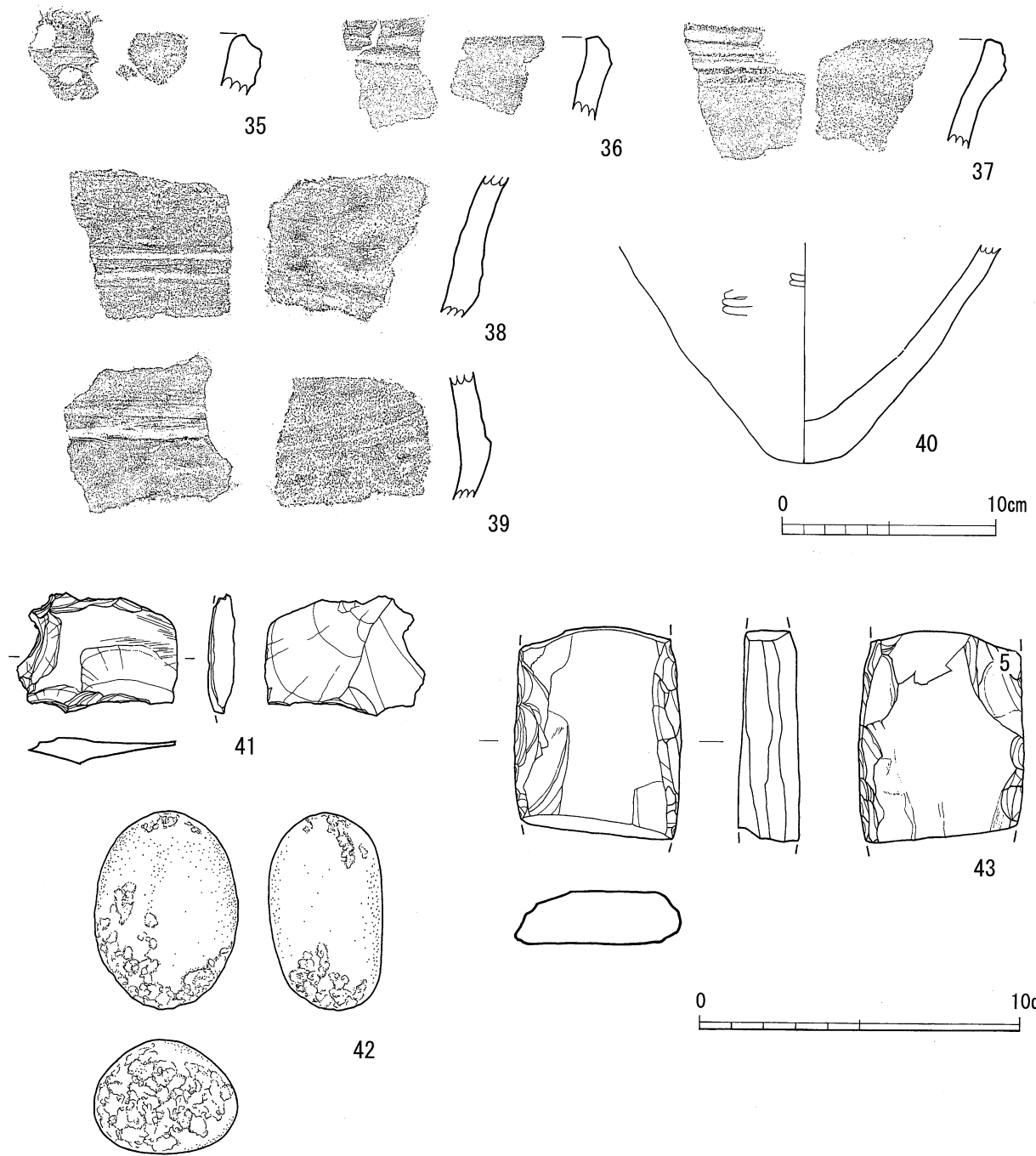
第12図 野添遺跡 J 1号竪穴住居跡出土遺物実測図(2) (1 / 3) (17... 1 / 2)



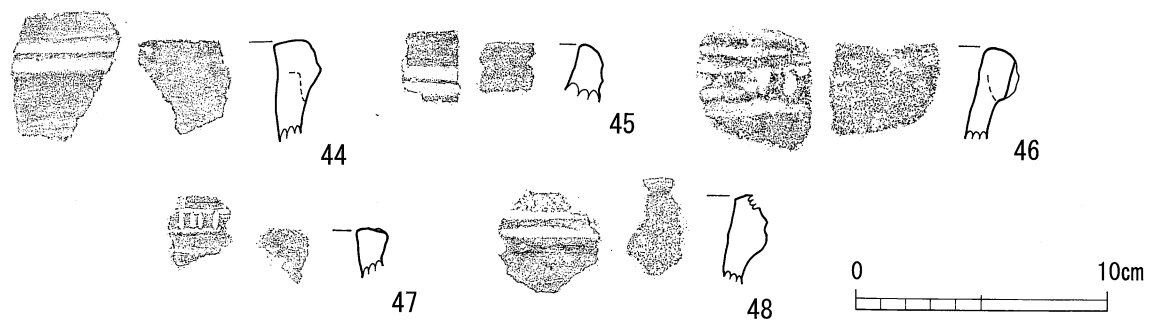
第13図 野添遺跡 J 2号竪穴住居跡出土遺物実測図(1) (1 / 3)



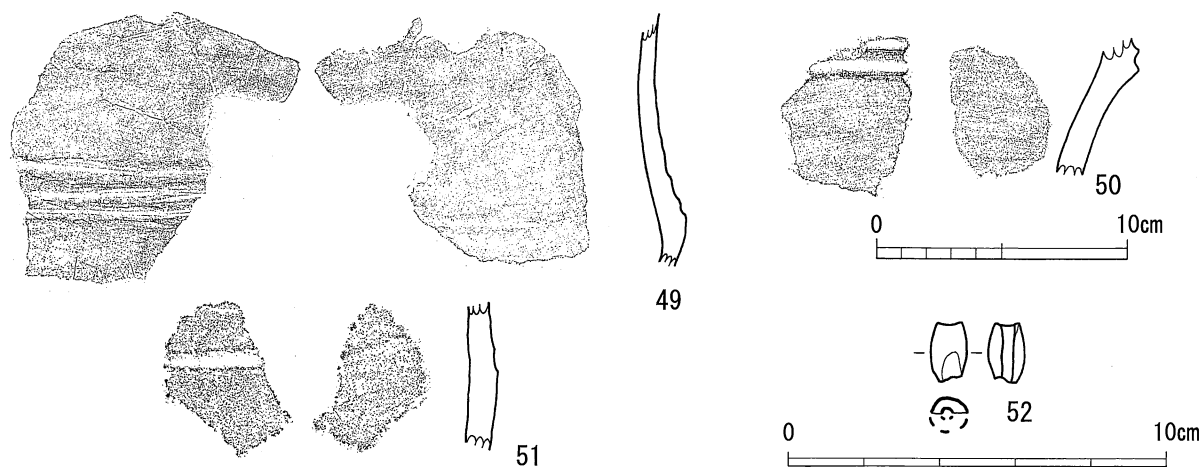
第14図 野添遺跡 J 2号竖穴住居跡出土遺物実測図(2) (1/3) (34…1/2)



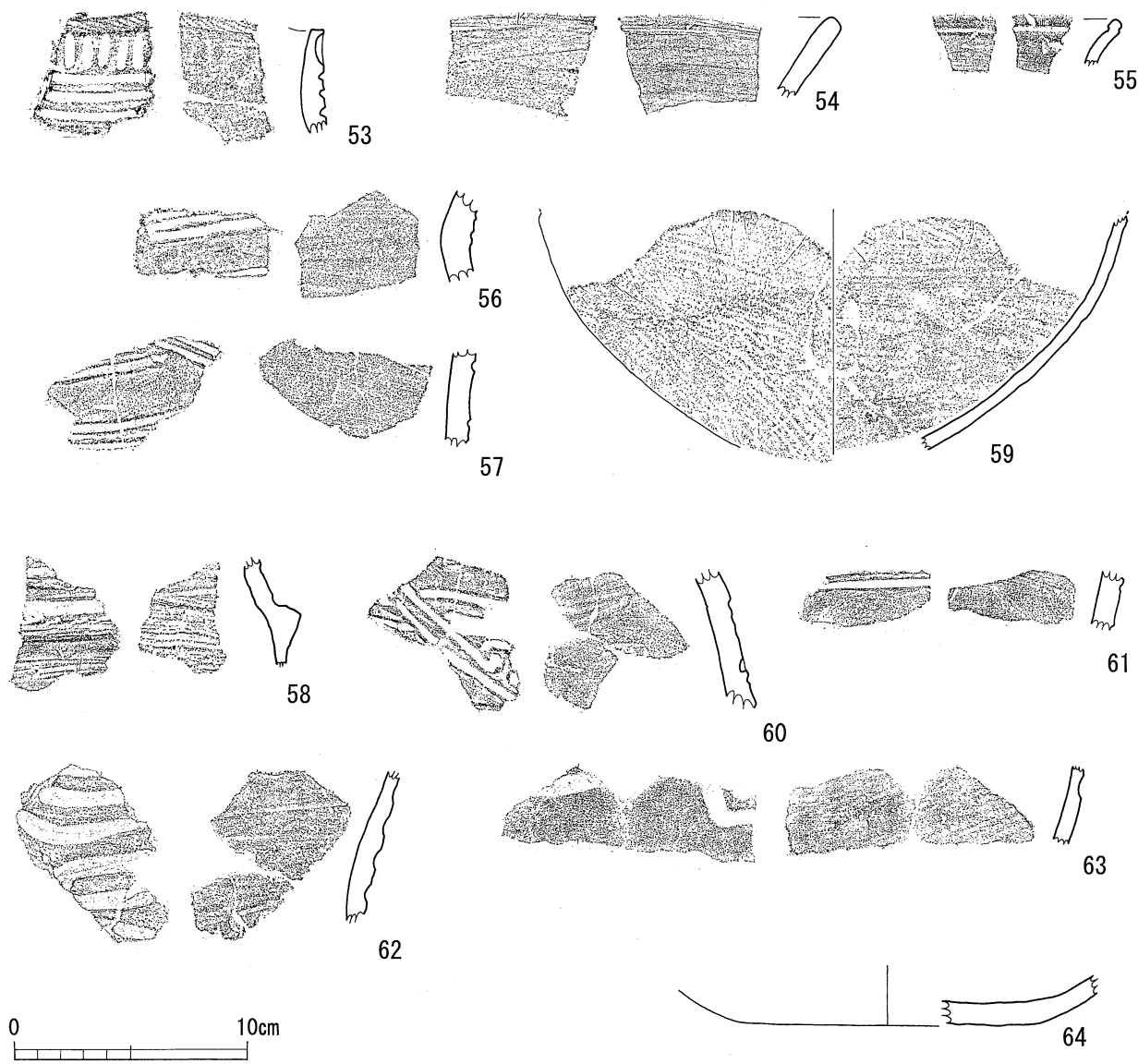
第15图 野添遺跡 J 3号竖穴住居跡出土遺物実測図(1/3) (41~43…1/2)



第16图 野添遺跡 J 4号竖穴住居跡出土遺物実測図(1) (1/3)



第17图 野添遺跡 J 4号竖穴住居跡出土遺物実測図(2) (1 / 3) (52…1 / 2)



第18图 野添遺跡 J 5号竖穴住居跡出土遺物実測図 (1 / 3)



第19図 野添遺跡 J7号竪穴住居跡・J1号土坑出土遺物実測図(1/3)

(3) 包含層出土の遺物

縄文時代の土器の遺物包含層はB区・C区の第IV層である。この第IVからは縄文後期・晩期の土器が全体的に集中した出土状況であった。個々の遺物についての詳細は観察表に記載している。出土遺物は第20図～第21図に示している。70は口縁部がやや外反する深鉢で、口縁端部を肥厚させ、その波頂部には棒状工具による3本の押圧刻み、上下2段の刺突文を施す。口縁形態は波状口縁が認められ、頸部には連続刺突文と端部を鉤状に曲げた2条の沈線文を組み合わせた文様が施される。外面は横方向のナデ、内面は不定方向の貝殻条痕文を施している。71は70と同じく口縁部が外反する深鉢で、波状口縁を呈する。波頂部には棒状工具により3本の押圧刻みを施す。頸部には連続刺突文はないが、70同様2条の直線文と斜線文の一部が見られる。外面は粗いナデで、内面はナデである。72は口縁部が緩やかに外反する深鉢で、先端が欠損している。口縁端部は肥厚し凹線を2条と3個の凹点文が施されている。内外面ともナデ調整で、内面には指頭痕がみられる。73も同様の器形で、口縁部を肥厚させ2条の凹線文と上段に1個、下段に3個の凹点文あるいは押圧刻みを施している。内外面ともナデ調整である。74は口縁部が外反する深鉢形土器で端部に貝殻腹縁による縦位の連続刺突文を巡らし、その下に凹線文による2条の直線文と一部曲線文が施されている。内外面とも横方向のナデである。75は胴部は張り出す小型の深鉢で、口縁部に浅い凹線文を1条、波頂部に凹点文を1個、同じく胴部屈曲部に2条の凹線文と上下2段の凹点文を施している。外面はナデ、内面もナデである。76は胴部があまり張らずにそのまま緩やかに外反する深鉢と考えられ、断面三角形に肥厚する口縁部に1条の波線文を施している。内外面ともナデ調整である。77～81は75同様の器形を有すると考えられる深鉢で、凹線文を口縁部に81は1条、77～80は2条巡らせている。内外面ともナデ調整である。82は口縁部が外反しながら立ち上がり肥厚する深鉢で、肥厚部は無文である。外面はナデ、内面はミガキである。83は外反する口縁部に斜位の貝殻腹縁による連続刺突文とその下に端部に刺突のある2条の太めの沈線文、その間に横位の貝殻腹縁刺突文が施されている。調整は内外面とも貝殻条痕文である。84は口縁部が大きく外反する深鉢で、口縁部直下に太い沈線文を2条施している。器面はナデ調整が認められる。85は鉢形土器、86は深鉢形土器で口縁部はやや内湾している。85は外面は板状工具による粗いナデでススが付着し、内面は板状工具によるナデの後、粗いミガキと思われる。86は外面はナデ後対面する2～4条の斜位の沈線文を施し、内面は



第20图 野添遺跡 包含層出土土器実測図(1) (1 / 3)

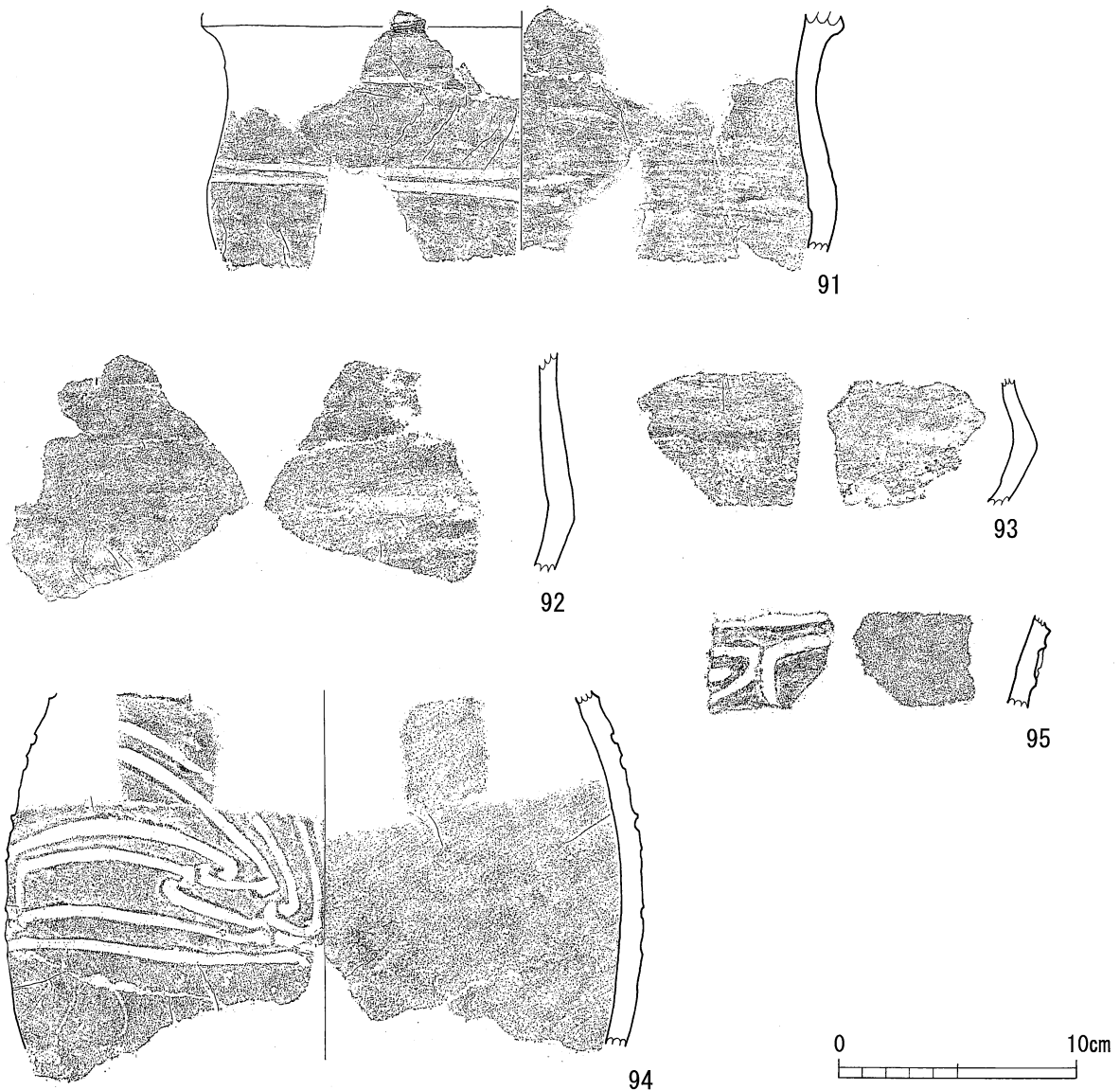


第21図 野添遺跡 包含層出土土器実測図(2) (1/3)

ナデ調整である。沈線は半截竹管状の工具によるものと考えられる。

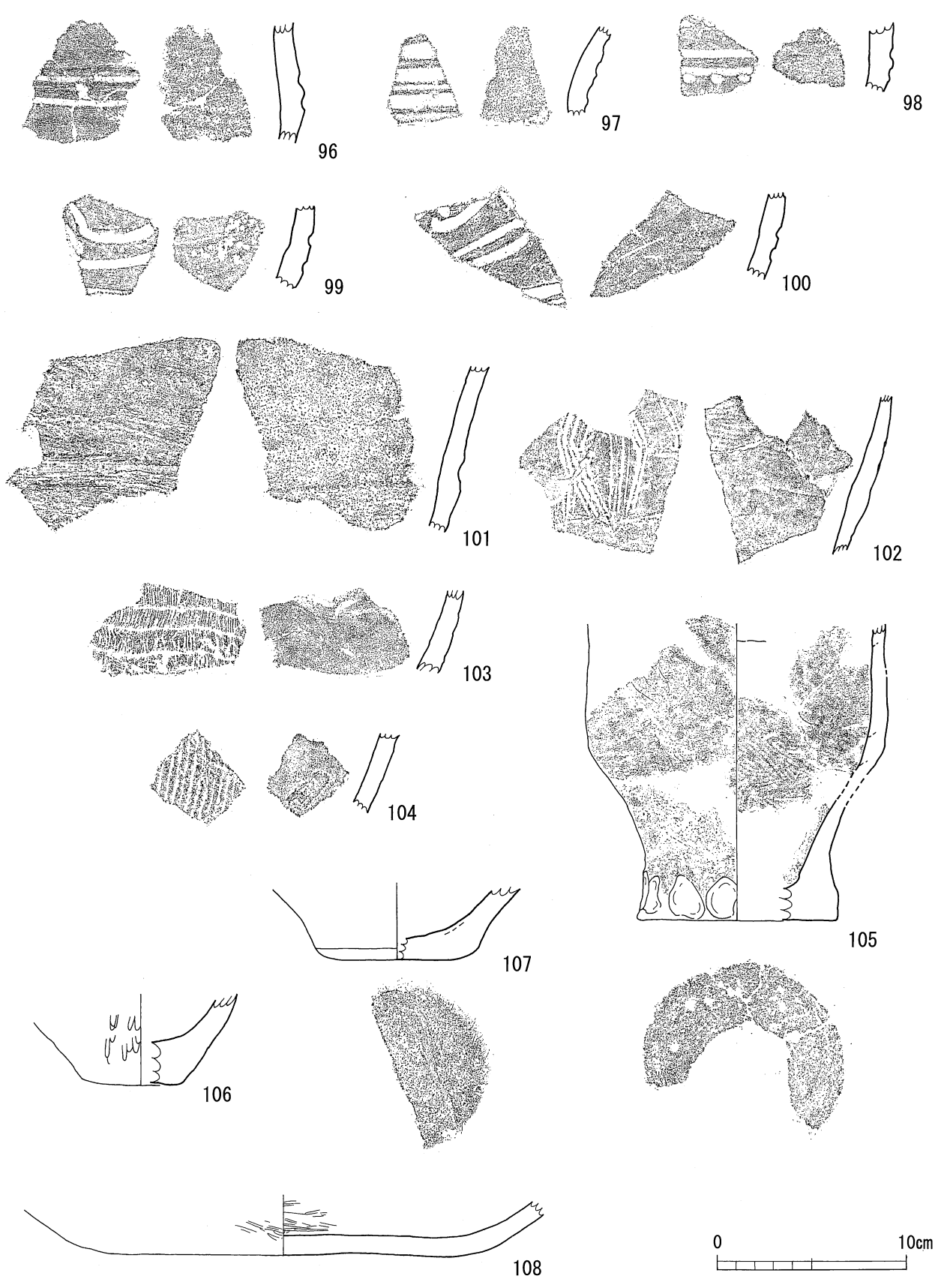
87は口縁端部外面に粘土帯を貼付け、無文の口縁帯を有する粗製鉢形土器である。外面は粗いナデでススが付着している。内面はナデ調整である。88は粗製鉢形の組織痕土器である。外面はナデで、一部ススが付着している。内面はヘラミガキを施している。胴下半部に編布の圧痕が見られる。89は、87と同一個体と考えられる口縁部片である。90も87同様口縁端部外面に粘土帯を貼付け無文の口縁帯を有する。外面はナデ、内面は粗いナデ後丁寧なナデも見られるため85同様鉢形土器であろう。90は一部ススが付着している。

91～104は深鉢の胴部である。91は胴部は張り、口縁部が外反しながら立ち上がる深鉢で、胴部上部に凹線文が2条、口縁部に凹線文が1条巡らされている。内外面ともナデ後粗いミガキ調整である。内面に一部炭化物が付着している。92・93は胴部が屈曲して張り出す深鉢である。92は外面ミガキ、内面は粗いナデを施している。93内外面ともナデ調整である。94は胴部が膨らみ、口縁部が外反すると思われる深鉢で、頸部から胴上半部にかけて入組文を交えながら2条の平行沈線を施す指宿式土器である。内外面ともナデ調整である。95は太めの沈線文による直線文や曲線文を施す。内外面ともナデである。96・98は胴部があまり張らず、肩部に2条の凹線文を巡らせており、98には凹線文の下に押圧による列点文が見られる。内外面ともナデ調整である。97は、外反する口縁部付近に4条以上の横走凹線文が施される。ナデ調整である。99・100は太めの2平行の沈線文が施されている。内外面ともナデである。101は口縁部が外傾しながら直口すると思われる深鉢で肩部に凹線状の段を有する。外面は条痕の後粗



第22図 野添遺跡 包含層出土土器実測図(3) (1/3)

いナデを施し、内面はナデを施している。外面に一部ススが付着している。102はわずかに肥厚する口縁帯と考えられる部分に半截竹管状の工具で2平行沈線文による縦位の鋸歯状文を施す土器と考えられる。口縁部端部は恐らく86が同一個体と思われることから内湾気味の直口口縁になると考えられる。いわゆる大平式土器の文様に類似するが、径が小さく残存部位も少ないため不明である。器面調整は全面にナデを施し、丁寧に仕上げている。103・104は組織痕がみられる鉢の胴部片である。器形は底部付近で屈曲し、口縁部に向かって開きぎみに立ち上がるものや内湾しながら直立または開きぎみに立ち上がるもので、底部が丸底もしくは丸底ぎみになるのが一般的である。圧痕は屈曲下や胴下半にみられ、103・104ともに編布圧痕が認められる。内面は丁寧なナデもしくはミガキ調整である。104は内面に一部ススが付着している。105～108は底部である。105は底部が厚底を呈し、胴下半部がやや開きながら胴部中位で直線的に立ち上がる深鉢で、器面調整は内外面ともナデである。内面の一部に貝殻状痕文が残る。106は底部から外傾する胴部が直接立ち上がる深鉢で、外面は粗いミガキを施し、内面は風化しているがミガキと思われる単位が見られる。107は底部から外反しながら開く深鉢で、外面は風化しているがミガキで、内面は風化が著しく調整不明である。108は鉢形土器の底部で、広く大きな底部から口縁部が大きく開く鉢形土器になると思われる。内外面ともミガキを施している。



第23図 野添遺跡 包含層出土土器実測図(4) (1/3)

第1表 野添遺跡 出土土器表(1)

遺物 番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	縄文土器	SAJ1	深鉢	口縁部				ナデ、沈線、一部スス付着	ナデ	暗赤褐	にぶい赤褐	2mm以下の灰白色、茶褐色の砂粒、1mm以下の黒色の光沢粒	一部風化
2	縄文土器	SAJ1	深鉢	口縁部 ～胴部				横方向のミガキ、凹点文、波状口縁	横方向のミガキ	褐黒褐	黒褐 灰黄褐	微細な乳白色の粒、1mm以下の透明な粒	風化
3	縄文土器	SAJ1	深鉢	口縁部				ミガキ、凹点文	横方向のミガキ	褐黒褐	にぶい褐	1mm以下の乳白色、透明な光る粒	風化
4	縄文土器	SAJ1	深鉢	口縁部				ミガキ、工具による細沈線、スス付着	ミガキ	灰褐	灰褐	3mm以下の褐色の粒、1.5mm以下の灰色の粒	
5	縄文土器	SAJ1	深鉢	口縁部				ナデ、凹線文	ナデ、黒変	橙にぶい橙	橙黒褐	2mm以下の灰色の粒、1.5mm以下の無色透明で柱状の粒、褐色の粒	
6	縄文土器	SAJ1	深鉢	口縁部				ナデ、凹線文、粘土のつなぎ目	ナデ	橙	にぶい橙	5mm以下の褐色の粒、2mm以下の無色透明で光沢のある粒	
7	縄文土器	SAJ1	深鉢	口縁部 ～胴部				ミガキ跡ナデ、横方向のナデ後連続刺突文、横方向の2条の沈線文	ミガキ後ナデ	明赤褐	明赤褐 黄褐	2mm以下の乳白色、褐色、黒色の粒1mm以下の黒色、無色透明の光沢粒	
8	縄文土器	SAJ1	壺	口縁部				横方向のナデ、スス付着	横方向のナデ	黄灰 黒	浅黄橙 褐灰	3mm前後の茶褐色の粒	
9	縄文土器	SAJ1	深鉢	胴部				ナデ、凹線文、工具痕、スス付着	ナデ	にぶい赤褐 灰黄褐	にぶい赤褐 灰黄褐	2.5mm以下の灰色の粒、2mm以下の黒色の粒	
10	縄文土器	SAJ1	深鉢	胴部				ナデ、凹線文、凹線文列	ナデ	にぶい赤褐 灰黄褐	にぶい赤褐 灰黄褐	7mm以下の褐色の粒、1.5mm以下の灰色半透明の粒、1mm以下の白色の粒微細な黒色の粒	
11	縄文土器	SAJ1	深鉢	胴部				ナデ、沈線文	ナデ	褐灰	黄褐	2mm以下の灰色、淡橙、灰褐色、黒色光沢、透明光沢の砂粒	
12	縄文土器	SAJ1	深鉢	胴部				ミガキ、沈線文	ナデ	褐灰	褐灰	3mm以下の橙、淡黄、灰白色、透明光沢の砂粒	
13	縄文土器	SAJ1	深鉢	胴部				ミガキ、凹点文、沈線	ナデ	黒褐	にぶい黄褐	3mm以下の赤褐、灰、灰白色、黒色の粒	
14	縄文土器	SAJ1	深鉢	底部				ミガキ	ナデ、粘土のつなぎ目	浅黄	にぶい黄橙	2mm以下の黒褐色、茶褐色、乳白色の粒、透明な光沢粒	
15	縄文土器	SAJ1	深鉢	底部				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 黒褐	1mm以下の白い光沢粒	風化気味
16	縄文土器	SAJ1	深鉢	胴部～ 底部				工具によるナデ	ナデ、スス付着	にぶい黄橙	浅黄 黒褐	1mm～3mmの白い粒、光る粒	
18	縄文土器	SAJ2	深鉢	口縁部 ～胴部				ミガキ、二段の短凹線 短凹線	ナデ、指圧痕	にぶい黄橙 褐	黒褐 褐	1mm以下の光沢のある透明な粒、白い粒	風化気味
19	縄文土器	SAJ2	深鉢	頸部～ 胴部				ミガキ、二段の短凹線 沈線文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	微細～3mm大の無色透明な粒、1mm大の黒色鋭光沢で角柱状の粒、0.5mm～3mm大の石	
20	縄文土器	SAJ2	深鉢	口縁部 ～胴部				ミガキ後ナデ、凹線文 粘土のつなぎ目、スス付着	ナデ、剥離	灰黄褐	褐灰 にぶい橙	3mm以下の褐色、柱状で黒色光沢の粒、2mm以下の無色透明の粒	
21	縄文土器	SAJ2	深鉢	口縁部				ミガキ後ナデ、横方向の 沈線文、凹線文	ミガキ後ナデ	暗灰黄 黒褐	褐 暗灰黄	2mm以下の白色、褐色、黒色の粒1mm以下の無色透明光沢粒	風化気味
22	縄文土器	SAJ2	深鉢	口縁部				粗いナデ、指頭痕、横 方向のナデ	横方向のナデ、粘土の つなぎ目	にぶい褐 褐	褐 黒褐	3mm以下の淡黄色、白色、褐色の粒1mm以下の無色透明光沢粒	
23	縄文土器	SAJ2	深鉢	口縁部				ミガキ、沈線	ミガキ	橙	にぶい橙	2mm以下の白、褐、黒色、透明光沢の砂粒	
24	縄文土器	SAJ2	深鉢	口縁部				沈線	ミガキ	橙	にぶい赤褐	2.5mm以下の灰黄褐、黄橙、黒褐色黒色光沢、透明光沢の砂粒	
25	縄文土器	SAJ2	深鉢	口縁部				ミガキ	ミガキ	褐灰	にぶい赤褐	2mm以下の赤褐、浅黄、灰白、黒色透明光沢の砂粒	風化気味
26	縄文土器	SAJ2	深鉢	口縁部				横方向のナデ、横方向の 沈線文	ナデ	オリーブ黒	にぶい褐 にぶい黄褐	3mm以下の淡黄色、黒色、白色の粒6mm位の黒褐色の粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒、無色透明光沢粒	
27	縄文土器	SAJ2	鉢	口縁部 ～胴部				ミガキ、ナデ、スス付着	ミガキ	にぶい橙	黄褐	2.5mm以下の黄橙、灰白、橙色の砂粒微細な透明光沢粒	
28	縄文土器	SAJ2	鉢	口縁部				縦方向のキズ状の条痕 ナデ	ミガキ	黒褐 暗オリーブ	黄灰	1.5mm以下の浅黄、褐色、透明光沢の砂粒	
29	縄文土器	SAJ2	深鉢	胴部				ナデ、沈線文	ナデ	黒褐	褐	3mm以下の淡黄の粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒	
30	縄文土器	SAJ2	深鉢	胴部				ナデ、凹線文	ナデ	黒褐	にぶい黄褐	2mm以下の淡黄の粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒、2mm以下の半透明の粒	
31	縄文土器	SAJ2	深鉢	胴部				ナデ、凹線文	ナデ	褐灰	にぶい黄褐 灰黄褐	2.5mm以下の白色の粒、1.5mm以下の灰色半透明の粒、微細な黒色の粒	
32	縄文土器	SAJ2	深鉢	胴部				ナデ、凹線文	ナデ	灰褐	にぶい黄褐 黒褐	2mm以下の白色の粒、1mm以下の無色透明の粒、1.5mm以下の黒色の粒	
33	縄文土器	SAJ2	深鉢	胴部				ナデ、スス付着	ナデ	にぶい褐 灰褐	黄褐 暗灰黄	1mm以下の白色の粒、2mm以下の赤褐色の粒、1mm以下の灰色半透明の粒	
35	縄文土器	SAJ3	深鉢	口縁部				ナデ、凹横点文、凹線文	ナデ	にぶい褐	褐	2.5mm以下の褐色の粒、2mm以下の柱状で黒色光沢粒、1mm以下の無色透明の粒	
36	縄文土器	SAJ3	深鉢	口縁部				ナデ、凹線文、スス付着	ナデ	褐	褐灰	2.5mm以下の褐色の粒、1.5mm以下の無色透明の粒、1.5mm以下の無色透明で光沢のある粒	
37	縄文土器	SAJ3	深鉢	口縁部				ミガキ後ナデ、工具による 沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい橙 橙	2.5mm以下の黄褐色、赤褐色の粒	
38	縄文土器	SAJ3	深鉢	胴部				ナデ、浅い沈線	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	2.5mm以下の灰白、茶褐色の砂粒、無色透明の光沢粒	一部風化
39	縄文土器	SAJ3	深鉢	胴部				ナデ、ミガキ後ナデ	ナデ、工具痕	明赤褐	明赤褐	2mm以下の灰白、灰褐、茶褐色の砂粒	

第2表 野添遺跡 出土土器察表(2)

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm)			手法・調整		文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外	内	外	内	外	内		
40	縄文土器	SAJ3	深鉢	胴部～底部				指ナデ後工具ナデ・ミガキ、スス附着	ナデ、スス附着		赤褐にぶい褐	灰	2mm以下の灰白、白、透明光沢粒		
44	縄文土器	SAJ4	深鉢	口縁部				丁寧なナデ	丁寧なナデ		明褐	明褐明黄褐	キラキラ光る黒・白の微細粒		
45	縄文土器	SAJ4	深鉢	口縁部				ナデ、凹点文	ナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の透明の光る粒	風化	
46	縄文土器	SAJ4	深鉢	口縁部				横方向のナデ、2本の凹線文	ナデ		にぶい黄橙	にぶい褐	白い微細粒		
47	縄文土器	SAJ4	深鉢	口縁部				横方向のナデ、工具による刻み目	横方向のナデ		にぶい赤褐	にぶい赤褐	1mm以下の褐色、灰白色の粒、1mm以下の柱状黒色光沢粒		
48	縄文土器	SAJ4	深鉢	口縁部				横方向のナデ、沈線文	ナデ		黄灰	褐	2mm以下の褐色、乳白色、黒色の粒、1mm以下の柱状黒色光沢粒	風化気味	
49	縄文土器	SAJ4	深鉢	胴部				ミガキ。凹線文、スス附着	ミガキ		黒	黒	2mm以下の乳白色の粒、微細な光沢粒		
50	縄文土器	SAJ4	深鉢	胴部				ナデ、凹線文、スス附着	ナデ		にぶい褐黒褐	褐灰にぶい褐	2mm以下の無色透明の粒、1.5mm以下の柱状で黒色光沢粒、1mm以下の黄褐色の粒		
51	縄文土器	SAJ4	深鉢	胴部				ミガキ後ナデ、凹線文	粗いナデ		にぶい黄橙黄橙	橙	3mm以下の乳白色の粒、2.5mm以下の無色透明の粒、微細なガラス質の光沢のある粒		
53	縄文土器	SAJ5	深鉢	口縁部				ナデ、棒状工具による凹点文列文、沈文、斜方向の貝殻条痕文	ナデ		にぶい褐橙	にぶい黄橙にぶい橙	2mm以下の灰色、黄褐色の粒、1.5mm以下の透明光沢の粒		
54	縄文土器	SAJ5	深鉢	口縁部				ナデ	横方向のミガキ		灰黄黄灰	灰黄黄灰	1.5mm以下の灰色の粒		
55	縄文土器	SAJ5	深鉢	口縁部				横方向のミガキ、細沈線文	横方向のミガキ、沈線文		灰黄褐褐灰	にぶい黄橙褐灰	2mm以下の灰色の粒		
56	縄文土器	SAJ5	深鉢	頸部				ナデ、沈線文、スス附着	ナデ		にぶい褐	にぶい褐灰黄褐	1mm以下の褐色の粒、無色透明の細片		
57	縄文土器	SAJ5	深鉢	頸部				ナデ、沈線文	ナデ		にぶい赤褐灰褐	にぶい褐灰黄褐	2.5mm以下の灰色の粒、無色透明の細片		
58	縄文土器	SAJ5	深鉢	胴部				貝殻条痕後ナデ、貝殻復線による連続刺突文沈線文	貝殻条痕文		明赤褐にぶい褐	明赤褐	1mm以下の灰色の粒、1mm以下の透明な光沢粒		
59	縄文土器	SAJ5	深鉢	胴部				縦・斜方向の貝殻条痕文、一部条痕文後ナデ、横方向の貝殻条痕後ナデ、スス附着	横方向の条痕文後ナデ		明褐明黄褐	明黄褐にぶい黄橙	3mm以下の淡黄色の粒、微細白半透明な粒		
60	縄文土器	SAJ5	深鉢	胴部				ナデ、棒状工具による凹点文列文、沈線文	ナデ、貝殻条痕文後ナデ		明褐黒	明褐黒	0.2mm以下の淡黄色の粒、0.1mm以下の黒色の粒		
61	縄文土器	SAJ5	深鉢	胴部				ナデ、横方向の沈線文刺突文	不定方向のナデ		にぶい褐	にぶい褐	1mm以下の淡黄色、黒色、乳白色の粒、微細な光沢粒		
62	縄文土器	SAJ5	深鉢	胴部				ナデ、凹線文	貝殻条痕文後ナデ		にぶい赤褐	にぶい赤褐	微細～2mmの白褐色の粒、微細な黒色の光沢粒		
63	縄文土器	SAJ5	深鉢	口縁部				ナデ、凹線文、スス附着	貝殻条痕後ナデ		にぶい褐	にぶい褐灰褐	2mm以下の灰色の粒、2mm以下の柱状で黒色光沢の粒		
64	縄文土器	SAJ5	深鉢	底部				ナデ、スス附着	ナデ		橙	にぶい橙	2.5mm以下の半透明光沢粒、灰色の粒、2mm以下の乳白色の粒		
65	縄文土器	SAJ7	深鉢	口縁部				横方向のナデ、貼付突帯、丁寧なナデ	横方向のナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の白い粒、1mm以下の灰白色の粒		
66	縄文土器	SAJ7	深鉢	口縁部				横方向のナデ	横方向のナデ		暗褐	にぶい褐	白色の微細粒	風化	
67	縄文土器	SAJ7	深鉢	口縁部				ナデ、貼付突帯	ナデ		浅黄橙	浅黄橙	微細～1mmの無色透明の鉱物粒、1mm～1.5mmの黒色光沢で角柱状の鉱物粒、2mm以下の岩片		
68	縄文土器	SAJ7	深鉢	胴部				組織痕	ナデ		淡黄	浅黄橙	1mm以下の無色透明の鉱物粒、1mm以下の黒色鋭光沢の鉱物粒		
69	縄文土器	SCJ1	深鉢	胴部				ミガキ、指押え	ミガキ、一部ナデ、黒斑、指押え、粗いナデ		黄灰橙	黄灰橙	3mm以下のにぶい黄橙、黒黄橙、灰白色、透明光沢の砂粒、5mm以下の暗灰黄色粒		
70	縄文土器	B区：IV層	深鉢	口縁部	推定47.2			横方向のナデ、棒状工具による凹点文列、凹線文、二列の刺突文、凹線による短直線文	横方向の不規則な貝殻条痕文		にぶい褐	灰褐暗褐	白・黒の微細粒		
71	縄文土器	B区：IV層	深鉢	口縁部				粗いナデ、指頭痕、刻み目	ナデ		にぶい褐褐灰	にぶい褐黒褐	1mm以下の黒色、褐色、乳白色の粒、微細な光沢粒		
72	縄文土器	C区：IV層	深鉢	口縁部				ナデ、凹線文	ナデ、指頭痕		黒	褐	3mm以下の茶色の粒、2mm以下の淡黄色の粒、2mm以下の透明光沢粒、2mm以下の柱状黒色光沢粒		
73	縄文土器	C区：IV層	深鉢	口縁部				ナデ、凹線文、沈線文押圧文	ナデ		にぶい黄褐	黒褐	光沢のある透明の微細粒		
74	縄文土器	B区：IV層	深鉢	口縁部				横方向のナデ、スス附着、連続刺突文、凹線文	横方向のナデ		にぶい褐黒褐	にぶい褐灰褐	2mm以下の白色、褐色、黒色の粒、1mm以下の無色透明光沢粒	風化	
75	縄文土器	C区：IV層	深鉢	口縁部～胴部				ナデ、凹線文、スス附着	丁寧なナデ		灰黄褐	黒褐	光沢のある透明の微細粒		
76	縄文土器	C区：IV層	深鉢	口縁部				ナデ、沈線文	ナデ		にぶい黄褐	にぶい黄褐オリーブ黒	2mm以下の半透明の光沢粒、1.5mm以下の淡黄色の粒		
77	縄文土器	C区：IV層	深鉢	口縁部				ナデ、凹線文	ナデ		黒	黒褐	2mm以下の半透明の光沢粒、1.5mm以下の淡黄色の粒		
78	縄文土器	C区：IV層	深鉢	口縁部				ナデ	ナデ		明赤褐黒褐	明赤褐	2mm以下の灰褐、灰白、茶褐色の砂粒		

第3表 野添遺跡 出土土器察表(3)

遺物 番号	種別	出土地点	器種	部 位	(cm)			手 法 ・ 調 整 ・ 文 様 ほか		色 調		胎 土 の 特 徴	備 考
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
79	縄文土器	B区:IV層	深鉢	口縁部				横方向のナデ、2条の沈線文	横方向のナデ	にぶい褐黒褐	にぶい褐黒褐	2mm以下の白色、褐色、黒色の粒、1mm以下の無色透明光沢粒	
80	縄文土器	B区:IV層	深鉢	口縁部				凹線文、ナデ	ナデ	にぶい黄褐褐灰	褐	1mm以下の灰色の粒、1mm以下の無色透明の粒	風化
81	縄文土器	C区:IV層	深鉢	口縁部				ナデ、押圧文	ナデ	橙	橙	2mm以下の灰白、淡黄、灰、橙色、透明光沢の砂粒	
82	縄文土器	C区:IV層	深鉢	口縁部				ナデ、肥厚帯、スス付着	ミガキ	橙	にぶい橙	微細で光沢のある粒、0.5mm~4.5mm大の小石	
83	縄文土器	C区:IV層	深鉢	口縁部				条痕によるナデ、貝殻腹縁連続刺突文	条痕によるナデ	にぶい橙	褐灰	1mm以下の黄橙、灰白、黒色透明光沢の砂粒	
84	縄文土器	B区:IV層	深鉢	口縁部				ナデ、凹線文	ナデ、工具痕	にぶい褐灰黄褐	褐灰	2.5mm以下の黒色の粒、3mm以下の灰褐色の粒	
85	縄文土器	B区:IV層	深鉢	口縁部				横方向のナデ、スス付着	横方向のナデ、指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄褐	4mm以下の灰色の粒、2mm以下の橙色の粒、2mm以下の半透明の粒	
86	縄文土器	C区:IV層	深鉢	口縁部				ナデ後沈線文、スス付着	ナデ	にぶい黄橙	浅黄	2mm以下の黒褐、黄橙、灰白色、透明光沢、黒色光沢の砂粒	
87	縄文土器	B区:IV層	鉢形土器	口縁部~胴部	推定 33.7			粗いナデ、スス付着	ナデ	灰黄黒褐	暗灰黄	2.5mm以下の灰、灰白、淡黄、黒色の粒、微細な透明光沢粒	
88	縄文土器	B区:IV層	鉢形土器	口縁部~胴部				ナデ、スス付着、組織痕	ヘラミガキ	浅黄	黄褐	1mm前後の半透明の鉱物粒、1mm以下の白色不透明の鉱物粒	
89	縄文土器	B区:IV層	鉢形土器	口縁部				横方向のナデ、スス付着	横方向のナデ	黒	灰黄黄灰	4mm以下の淡黄の粒、2mm以下の褐色の粒	
90	縄文土器	B区:IV層	鉢形土器	口縁部				横方向のナデ、スス付着、断面三角形の突帯文	横方向のナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	3mm以下の灰色の粒、2mm以下の灰白色の粒、2mm以下の半透明な粒	
91	縄文土器	C区:IV層	深鉢	頸部~胴部	推定 26.4			ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ、一部炭化物付着	黒	にぶい黄褐	2mm以下の褐色、乳白色、黒褐色の粒、1mm以下の無色透明光沢粒	
92	縄文土器	B区:IV層	深鉢	胴部				ミガキ、スス付着	粗いナデ	灰褐	灰黄褐	3mm以下の白、黄橙、灰、黒色、透明光沢の砂粒	
93	縄文土器	B区:IV層	深鉢	頸部~胴部				ナデ、スス付着	ナデ、指押え	にぶい褐	暗灰黄	2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の透明光沢粒	
94	縄文土器	B区:IV層	深鉢	胴部				ナデ、沈線文、スス付着	ナデ	にぶい橙褐灰	灰黄褐褐灰	3mm以下の黒褐色の粒、灰色の粒、2mm以下の無色透明の粒	
95	縄文土器	B区:IV層	深鉢	胴部				ナデ、沈線文	ナデ	にぶい橙	橙	微細~1.5mm以下の浅黄色の鉱物粒、半透明のガラス質の細片	
96	縄文土器	C区:IV層	深鉢	胴部				ナデ、凹線文	ナデ	褐	にぶい黄褐	3mm以下の茶色の粒、2mm以下の淡黄の粒、2mm以下の半透明な光沢粒	
97	縄文土器	B区:IV層	深鉢	胴部				ナデ、凹線文	ナデ、黒斑	橙	黄橙	2mm以下の淡黄、灰褐、灰白、赤褐色、黒色光沢、透明光沢の砂粒	
98	縄文土器	B区:IV層	浅鉢	胴部				ナデ、平行沈線文	ナデ	にぶい褐	褐灰	2mm以下の白、淡黄、黒色、透明光沢の粒	
99	縄文土器	B区:IV層	浅鉢	胴部				ナデ、平行沈線文	ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	5mmの赤褐色粒、3mm以下の白、淡橙灰白、灰黄色、黒色光沢の砂粒	
100	縄文土器	B区:IV層	深鉢	胴部				ナデ、沈線文	ナデ、指頭痕	にぶい赤褐	にぶい黄橙	1mm以下の白半透明の鉱物粒、1mm以下の砂粒	
101	縄文土器	B区:IV層	深鉢	胴部				条痕後粗いナデ、スス付着	ナデ	暗灰黄橙	灰にぶい黄橙	4mm以下の灰白、灰、淡黄、茶褐、黒色、透明光沢の砂粒	
102	縄文土器	C区:IV層	深鉢	胴部				ナデ後沈線文	ナデ	にぶい黄橙褐灰	灰黄褐	1mm以下の橙、にぶい黄、黒色、透明光沢の砂粒	
103	縄文土器	D区:IV層	浅鉢	胴部				組織痕	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	0.5mm~1mmの白色不透明の粒、1mm前後の無色透明の粒、微細な赤褐色の粒	
104	縄文土器	B区:IV層	浅鉢	胴部				組織痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mmのにぶい黄橙色の粒、1mm前後の無色透明の粒、微細な赤褐色の粒	
105	縄文土器	C区:IV層	深鉢	胴部~浅部				ナデ	ナデ、粘土のつなぎ目	にぶい褐黄褐	にぶい橙褐灰	1mm以下の灰色の粒、1.5mm以下の無色透明の粒	
106	縄文土器	C区:IV層	深鉢	底部				ミガキ、ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄	1mm前後の無色透明の粒、微細~2mm大の赤褐色の粒、0.5mm~8mm大の石	
107	縄文土器	SG1	壺	底部		推定 8.7		ミガキ、ナデ	調整不明	にぶい黄にぶい橙	黄灰にぶい黄橙	3.5mm以下の灰色、黄褐、灰褐色の砂粒	風化
108	縄文土器	B区:IV層上面	鉢	底部				ミガキ	ミガキ	黒褐	灰黄褐	3mm以下の赤褐色粒、2.5mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の乳白色粒、透明光沢粒	風化

2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調整で古墳時代の遺構はB・C区から検出されている。検出された遺構は竪穴住居跡3軒、土壙墓1基である(第24図)。遺物のごく一部の例外を除いて古墳時代初期に属するものであり、遺構もおおむね同時期の所産と考えられる。

(1) 竪穴住居跡

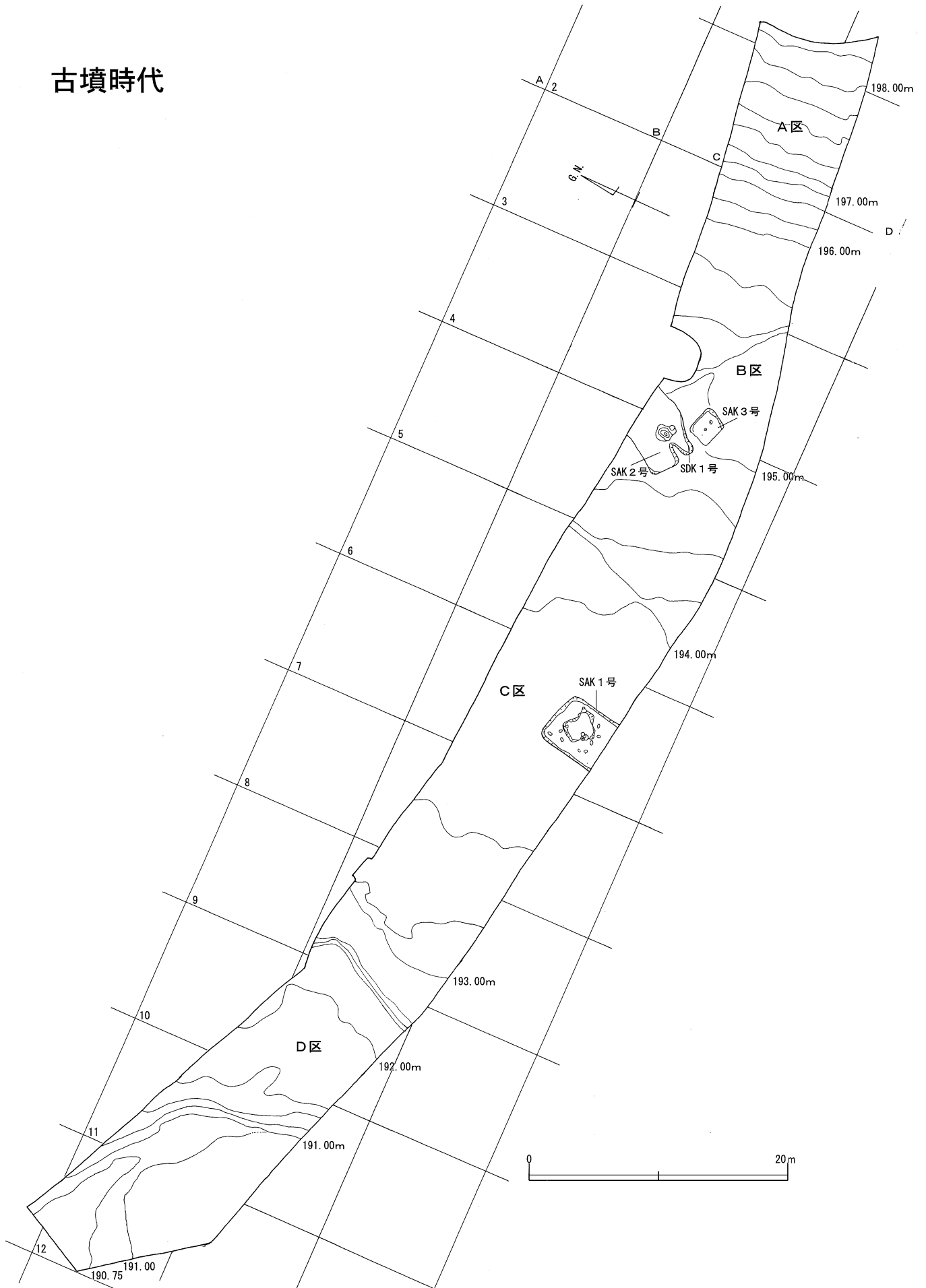
1号竪穴住居跡(SAK1:第25図)

C区の南壁沿やや中央の御池ボラ上面で、D7グリットから検出された。方形プランの住居跡で、南北方向4.4mm、東西方向4.1mm、検出面からの深さ45~62cmを測る。床面中央には長軸2.7mm、短軸2.3mmの不定形の浅い窪みがあり、その埋土中には多くの炭化物粒が含まれていた。埋土は、御池ボラを含む褐色土や暗褐色土が堆積するが攪乱している部分もあり一様ではない。埋土中には全体的に炭化物が含まれるが、中央の窪み付近にその集中があった。床面には貼り床も見られず、硬化面や焼土等も確認できなかった。主柱穴は方形配置の4基と同心円上に7基を配する。径が20~35cmで床からの深さは25~60cmを測る。遺物の多くは床面直上が若干浮いた状態で多量に出土した。

出土遺物は第28図~第31図に示している。この住居に伴う遺物(109~152)は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、109~117は断面三角形の貼付刻目突帯を持つ甕である。109は胴部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は直口する甕である。内外面ともハケ目調整である。外面に一部ススが付着している。110は胴部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する甕である。内外面とも横・斜方向のハケ目で、一部ススが付着し指頭痕がみられる。111~114は胴部から口縁部が直線的に外側に開く甕である。111~113は内外面とも工具による横・斜方向のハケ目のナデを施している。外面には一部指頭痕がみられる。114は内外面とも工具による斜方向のナデの後に施している。115~117は胴部上半に断面三角形の貼付突帯を巡らす甕の胴部片である。118・119は口縁部が直口する甕の口縁部である。118は内外面とも不定方向のハケ目後ナデを施し、119は内外面ともナデ調整である。120は頸部が緩やかに屈曲し、胴部上半にやや膨らみを持つ甕である。外面はナデ、横・斜方向にハケ目を施し、内面は横方向のナデ、斜方向のハケ目を施している。121・122は甕の底部である。121は外面はナデ、斜方向の工具痕を施し、内面は斜方向のナデを施している。122は外面はナデ調整で、木の葉圧痕が残る。内面調整は不明である。

123~128は壺である。123は胴中央部に最大径を持つやや長胴の壺である。口縁部はわずかに外傾して端部が内湾する。内外面とも斜方向のハケ目を施している。124は胴部上位の張った偏球形を呈する。胴部最大径の半分より小さくくびれた頸部から口縁部が直口した壺で、丸底の底部を呈する。外面は横方向のナデ、不定方向のハケ目を施し、内面は不定方向のハケ目を施している。125はやや長胴気味の壺である。口縁部は外傾してわずかに内湾する。外面は横方向のナデ、工具による不定方向のナデ(ハケ目)を施し、内面はナデを施している。126は小型の丸底壺である。口縁部は内湾気味に外側に開いて立ち上がり、口唇部は細く仕上げている。外面は横・斜方向のミガキ、内面はミガキを施している。127は壺で、外傾して立ち上がる口縁部は端部が内湾する。外面は横・斜方向のナデ、横・斜方向のハケ目を施し、内面は横方向のナデを施している。128は小型壺の胴部で、外面はミガキ、内面はナデである。129・130は胴部中位の張った偏球形を呈する二重口縁壺である。胴部最大径の半分以下にくびれた頸部から口辺部が外側に開き、屈曲して若干外側に開き気味の口縁が立ち上がると思われる。外面は

古墳時代



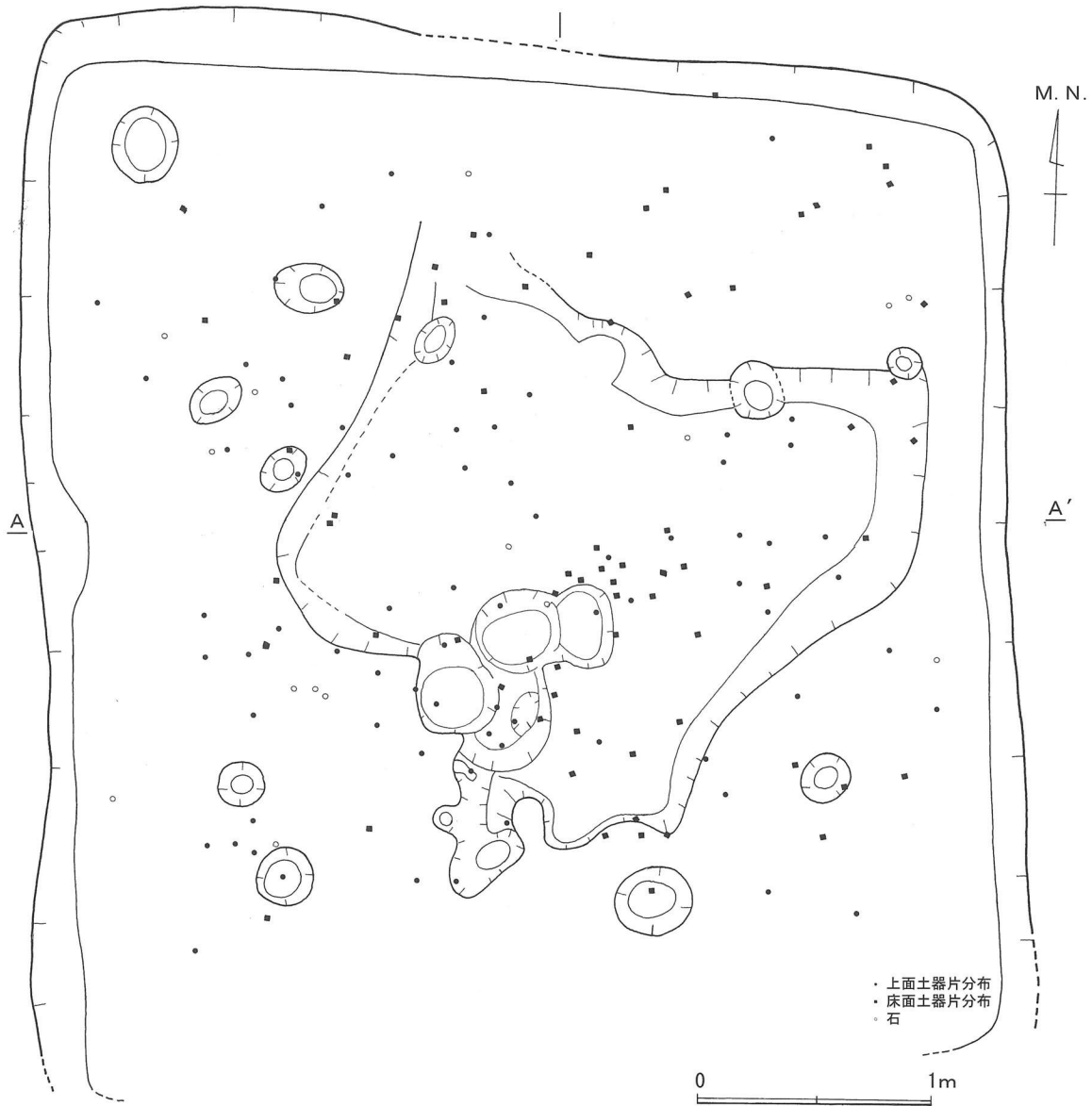
第24図 野添遺跡 古墳時代の遺構分布図 (1/400)

ミガキ、内面はナデを施している。

131～149は高坏である。131は内湾する坏底部から大きく外反して口縁部へと開く坏部を呈する。屈曲部には明瞭な稜を持つ。外面はミガキ、内面はミガキ、黒斑と思われるが、風化が著しいため調整不明瞭である。132は体部に稜を持たない坏で内湾気味に立ち上がる。調整は外面はミガキ後ナデを施し、内面はナデである。133は坏部で坏底部と口縁部との間に明瞭な稜を持たずに立ち上がり、口縁端部は若干内湾する。外面は丁寧なナデ、ミガキ後ナデを施し、内面は横方向のナデである。134は外反する口縁部が大きく開く坏部を呈する。外面は横方向のナデ、ミガキを施し、内面はミガキ、黒斑が見られる。135は坏底部と口縁部との間に稜を持たず浅い椀状を呈して口縁部が外側に開いて立ち上がり、口唇部は細く仕上げている。外面はミガキ後ナデ、内面はナデである。136は144のような脚部の脚裾部と思われる。外面は横方向のナデ、斜方向のミガキを施し、内面は横方向のナデ、内黒を施している。137～139は口縁部が直口して広く開く坏部を呈する。137は外面はミガキ後ナデ、内面はナデ、黒斑が見られる。138・139は内外面とも横方向のナデを施している。内面に一部黒斑がみられる。140・141は口縁部は外側に開き、口唇部が丸く仕上げている。調整は140は内外面ともナデで、141は内外面とも工具によるナデである。142は体部から脚部である。体部は屈曲部に明瞭な稜を持ち、大きく外反して口縁部へ開くもので、脚部は短い裾広がり「ハ」字状である。調整は内外面ともミガキ後ナデである。143はやや内湾する坏底部である。内外面ともミガキである。144は坏底部～脚部である。脚部はいわゆるエンタシス状に中位で若干膨らみを持つ。坏部の外面は横方向のナデで、脚部の外面は縦方向のミガキ後ナデで、内面はナデで粘土の継ぎ目上には多くの指頭痕が残る。145は脚部である。「ハ」字状に開き、若干の膨らみを持った太い脚部である。内外面とも横方向のナデで、内面に多くの指頭痕が残る。146～149は裾部である。146～148は緩やかに「ハ」字状に大きく開き、内端面で接地する形状を呈すが、中位の膨らみが146は147に比べて大きい。外面は横方向のナデ、ミガキ後ナデを施し、内面はナデで一部指頭痕が残る。148は内外面ともミガキである。149も「ハ」字状に広がる裾部である。外面はミガキ、内面は横・斜方向のナデである。150は碗である。内外面ともミガキで、内面に黒斑がみられる。151は杓子状土製品の柄部と考えられる。柄部の全長は約6.0cmを測る。内外面とも指ナデで仕上げている。152はミニチュア土器である。内外面とも指頭痕が多く残る。

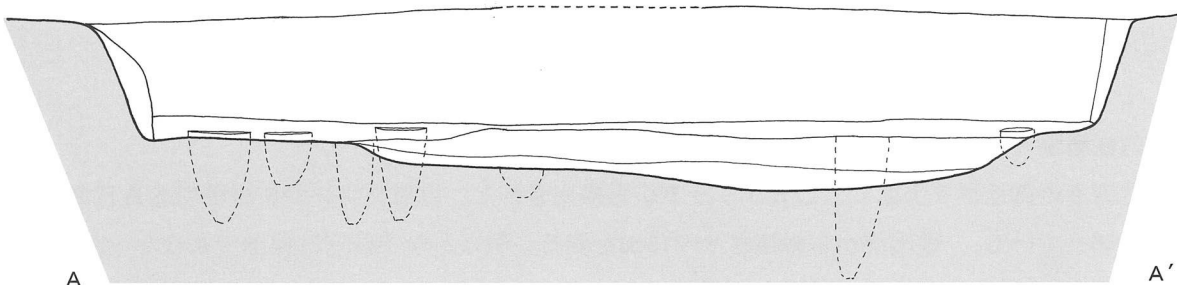
2号竪穴住居跡（SAK2：第10図）

B区の北寄りの御池ボラ上面で、C5グリッドから検出された。方形プランの住居跡でSAK2がSAJ7を切っている。検出面からの深さ7～13cmを測る。明らかな支柱穴は検出できなかった。住居の埋土は、御池ボラ粒を含む黒褐色土や暗褐色土が堆積する。床面には硬化面や焼土等は確認できなかった。遺物は土器小片が少量床面に出土したが、小片で風化しているため器種については不明である。



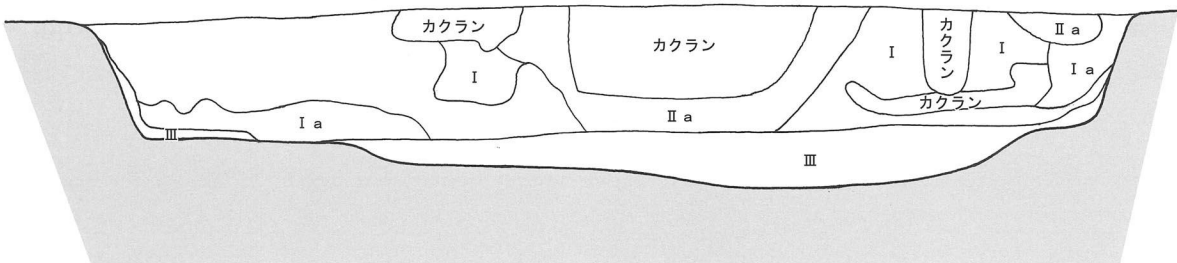
A

A' 194.970m



A

A' 194.970m



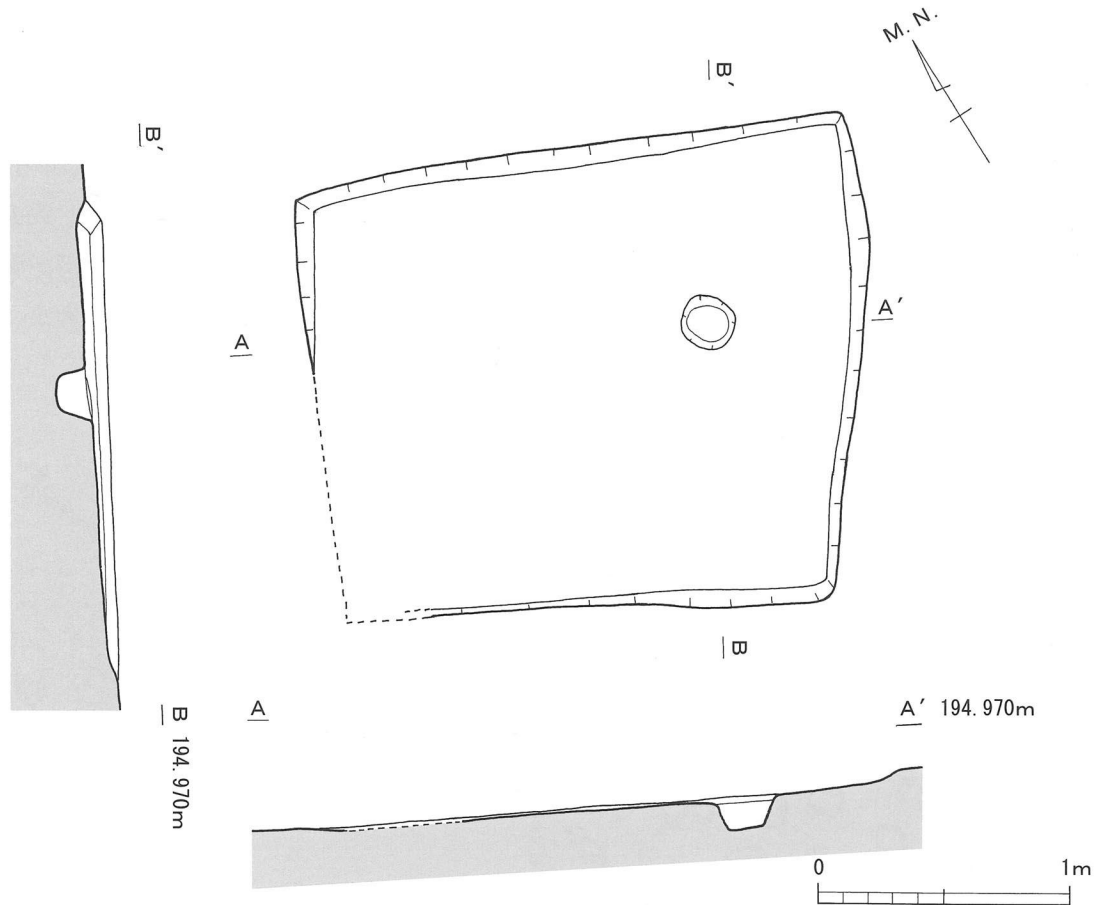
【土層注記】 SAK1

- I 褐色 (10YR 4/4) 1~2mmの黄褐色粒子、炭化物を多く含む。 I a 褐色 (10YR 4/4) 5~10mmの黄褐色粒子と炭化物が混在。
- II 明褐色 (7.5YR 3/4) 5~10mmの黄褐色粒子と炭化物が混在。 II a 暗褐色 (7.5YR 3/3) 5~10mmの黄褐色粒子と炭化物が混在。
- III 明褐色 (7.5YR 3/4) 1~2mmの黄褐色粒子を多量に含む。

第25図 野添遺跡 K1号竖穴住居跡実測図 (SAK1: 1/30)

3号竪穴住居跡（SAK3：第26図）

2号住居跡の南東側約3mの位置に検出された。方形プランの住居跡で、南北方向1.9m、東西方向2.24m、検出面からの深さは4～6cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、長軸方向が西南西側に若干傾斜する。床面に支柱穴は検出できなかったが床面中央東側に径17cm、深さ15cmのピット1基を配する。住居の埋土は、御池ボラ粒を含む黒褐色土や暗褐色土が堆積する。床面には硬化面や焼土等は確認できなかった。遺物は出土していない。



第26図 野添遺跡 K3号竪穴住居跡実測図（SAK3：1/30）

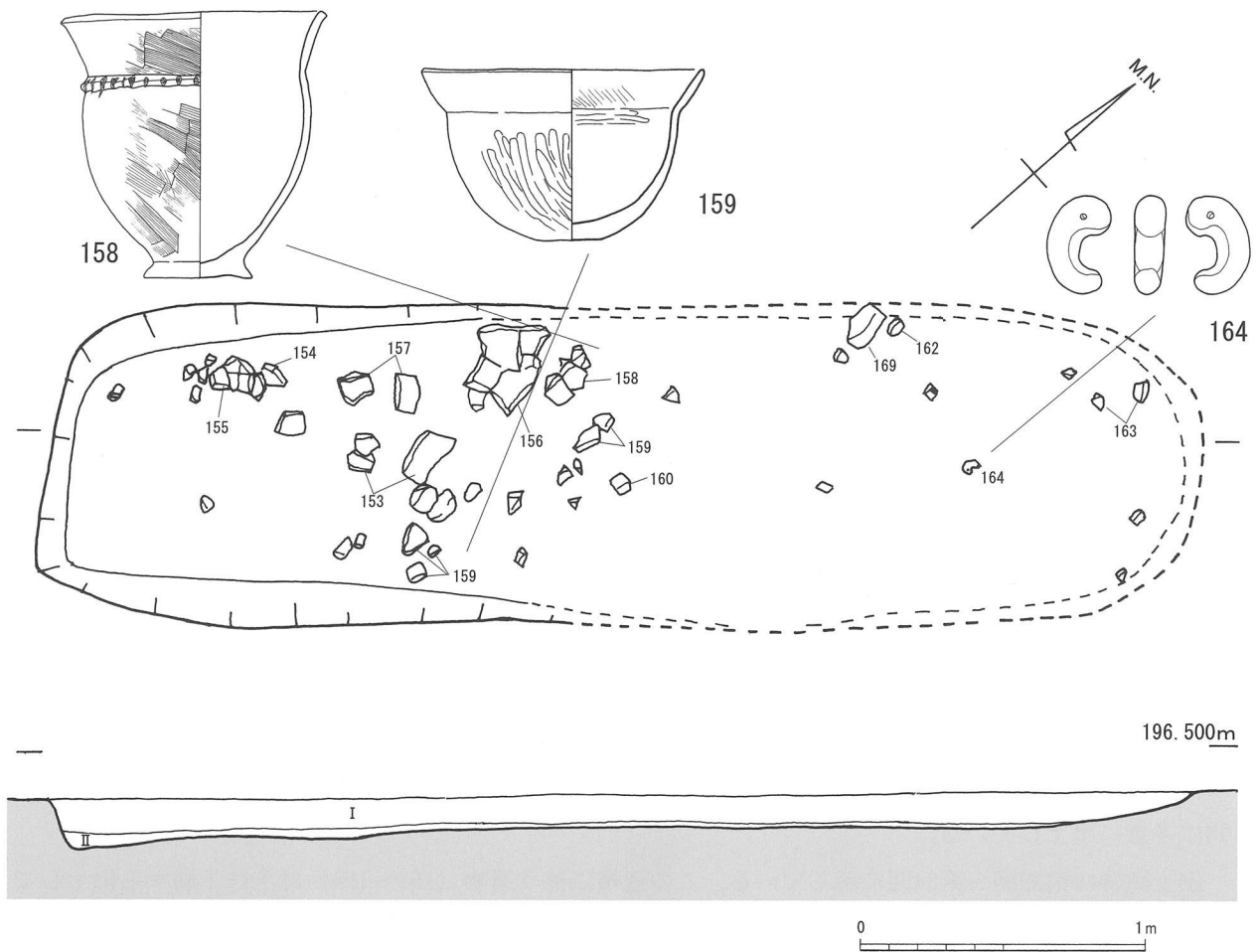
(2) 土壙墓

1号土壙墓（SDK1：第10図・第27図）

B区の北寄りの御池ボラ上面で、D5グリッドから検出された。J7号竪穴住居跡と切りあっており、規模は長軸約200cm、短軸約88cm、深さは10～15cmを測る。底面はJ7号に向けて次第に浅くなる。平面形態は長方形で、断面形態は箱状を呈すると推測される。覆土は基本土層Ⅲ・Ⅳ層を主体とする。遺物は多量に出土している。

出土遺物は第32図～第34図に示している。この遺構に伴う遺物（153～164）は主に下層から出土しており、プランの全体に分布している。遺物の内訳は、153は断面三角形の貼付刻目突帯を持つ甕で、胴部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は直口する。内外面ともハケ目調整である。外面に一部スガが付着している。154と155は同一個体の壺である。複合口縁をもつもので、口縁部がほぼ直立するものである。口縁部外面に櫛描波状文を施している。調整は外面に斜方向のハケ目、ナデ、内面は横・斜方向

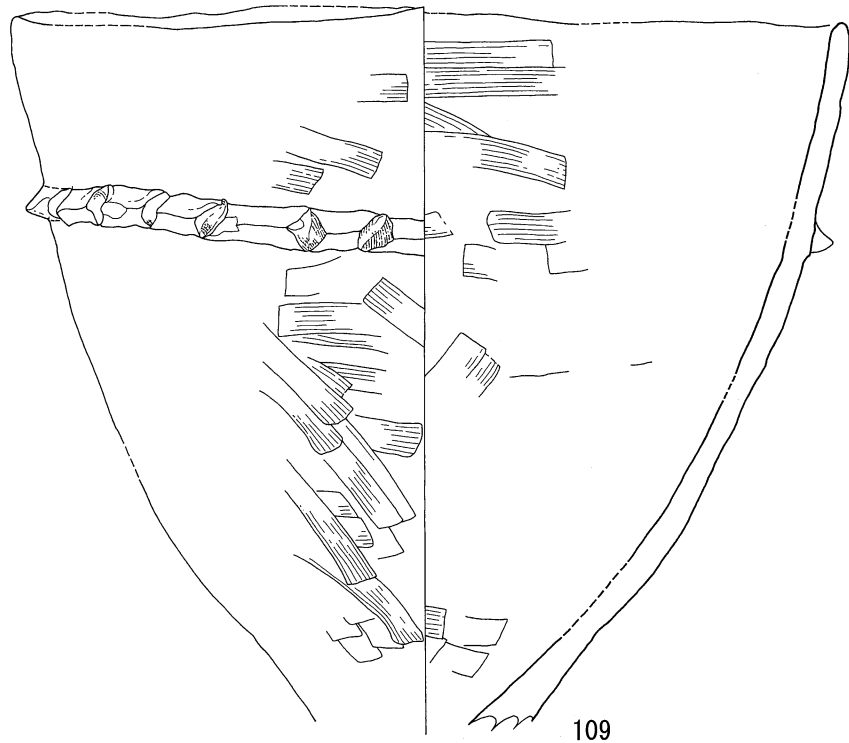
のハケ目で口縁部に指頭痕がみられる。胴部の外面にススが付着し、内面には炭化物が付着している。156と157は同一個体の壺である。胴部中位の張った偏球形を呈する。底部は凸レンズ状の丸底である。調整は横・斜方向のハケ目、内面は斜方向のハケ目、ナデである。一部指頭痕が残る。158は口縁部が緩やかに外反し、胴部はやや膨らみを持ち底部へとすぼまる小型の壺である。やや上げ底で裾部は外側に開く。頸部下に貼付刻目突帯を持ち、調整は外面はハケ目、内面はナデを施している。内外面とも黒斑がみられる。159は小型丸底壺である。頸部にくびれを持ち、内湾気味の口縁部が外方にのび、体部は塊状を呈する。外面は横方向のナデ、斜方向のハケ目、ミガキを施し、内面は丁寧なナデを施している。160は頸部くびれ部からやや内湾気味の口縁部が立ち上がる小型の壺である。調整は内外面ともナデである。内面に指頭痕が残る。161と162は同一個体で高坏になると思われる。161は坏底部と口縁部との間にやや稜を持つ。調整は外面は工具による横・斜方向のハケ目、内面はナデである。162は脚柱部と裾部との間に屈曲を持たずに裾部が開くものと思われる。外面は縦方向のハケ目、内面は縦方向のナデ調整である。163は高坏の体部である。小さな坏底部からわずかに外反する口縁部が開く。屈曲部外面には稜を持ち、外面はナデ、工具ナデ、内面は丁寧なナデである。164は勾玉である。蛇紋岩製で1点のみの出土である。C字状に湾曲する形状で、頭部に両端より穿孔を施している。



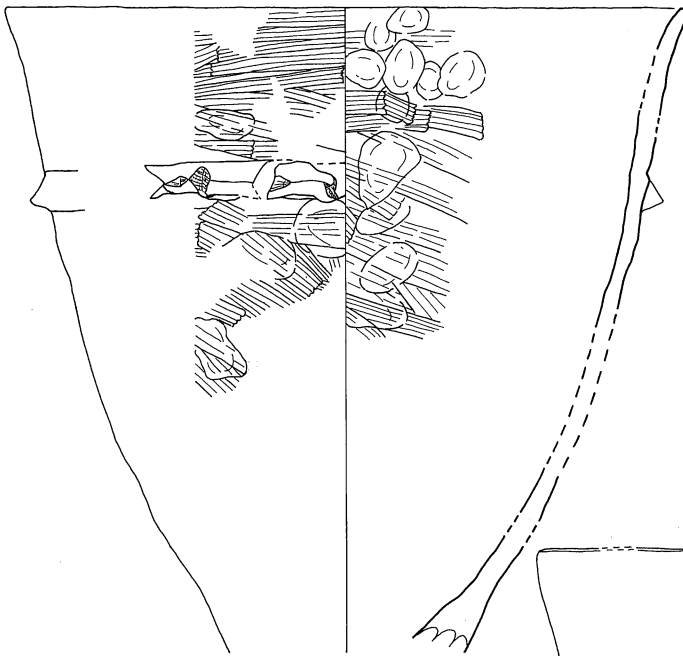
【土層注記】 SDK1

I 暗褐色 (7.5YR 3/4) 黒色土と黄橙色粒子が混在する。
 II 暗褐色 (7.5YR 3/4) 黄橙色粒子が多量に混在する。

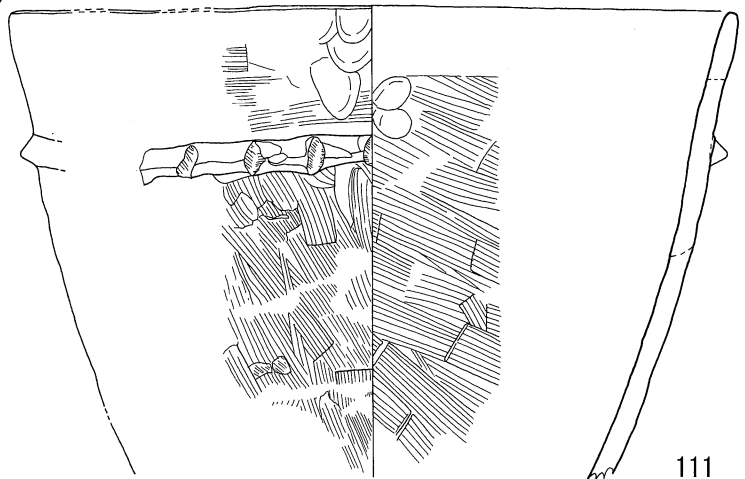
第27図 野添遺跡 K1号土墳墓実測図 (SDK1 : 1/40)



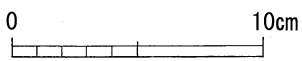
109



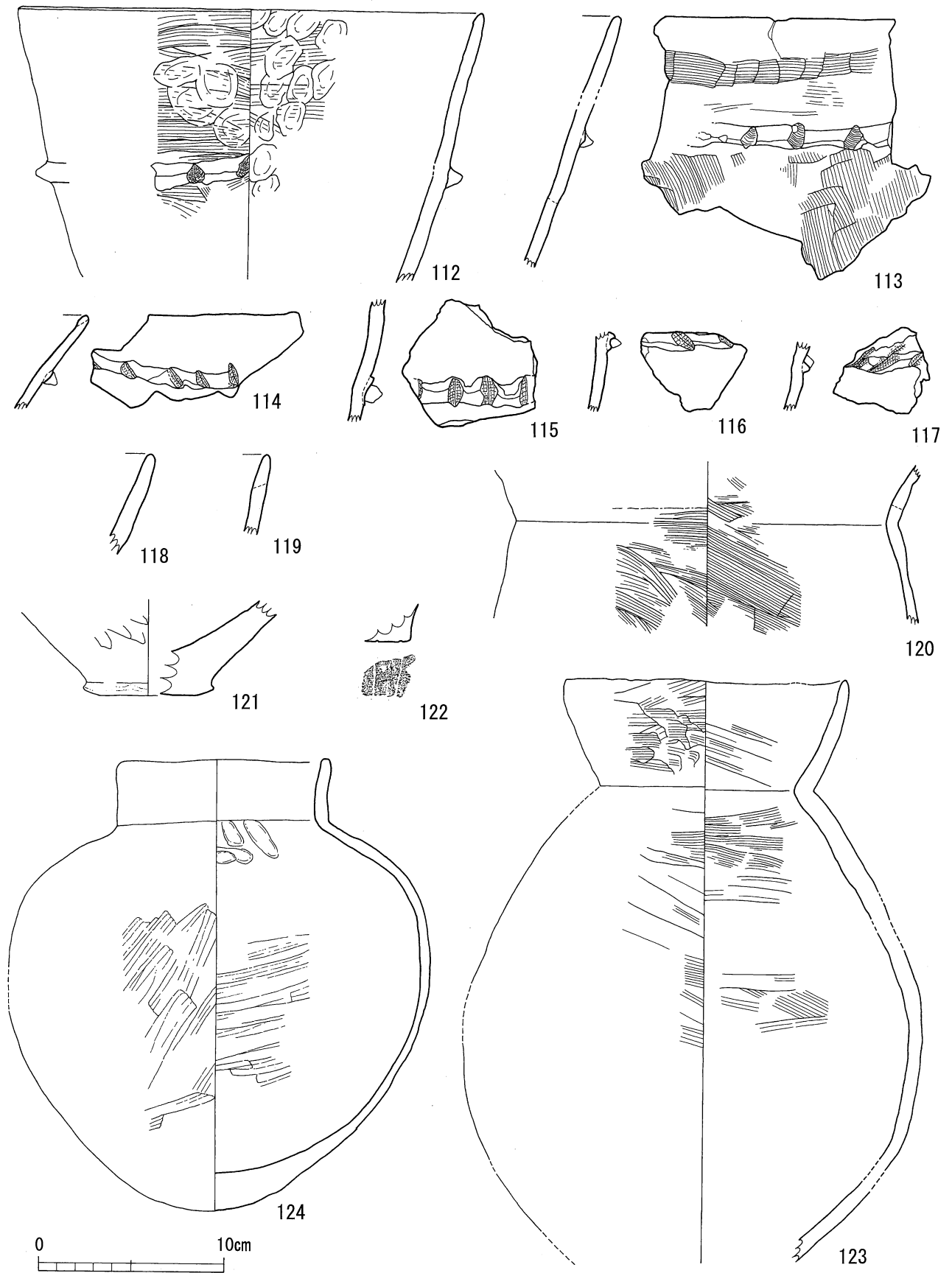
110



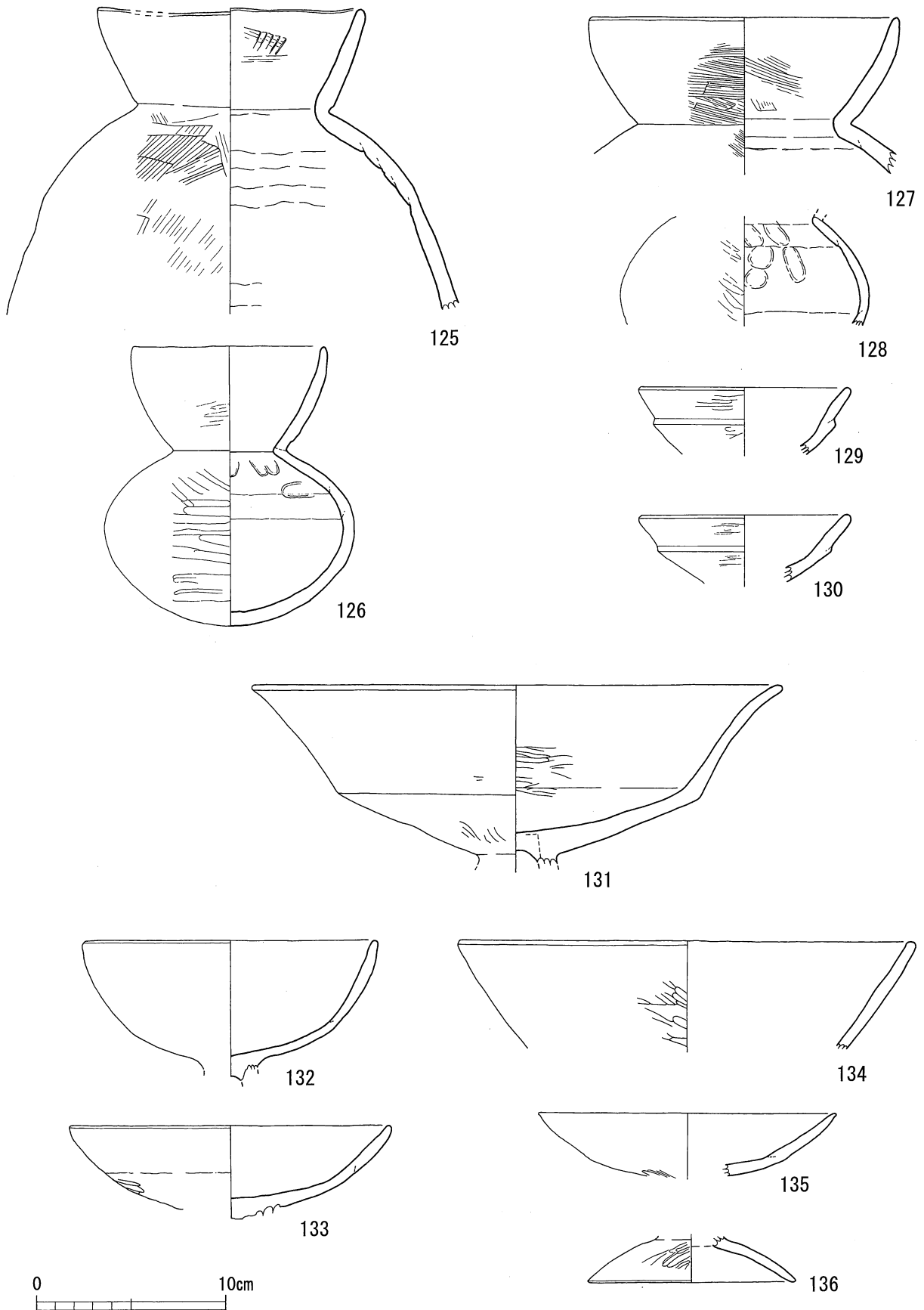
111



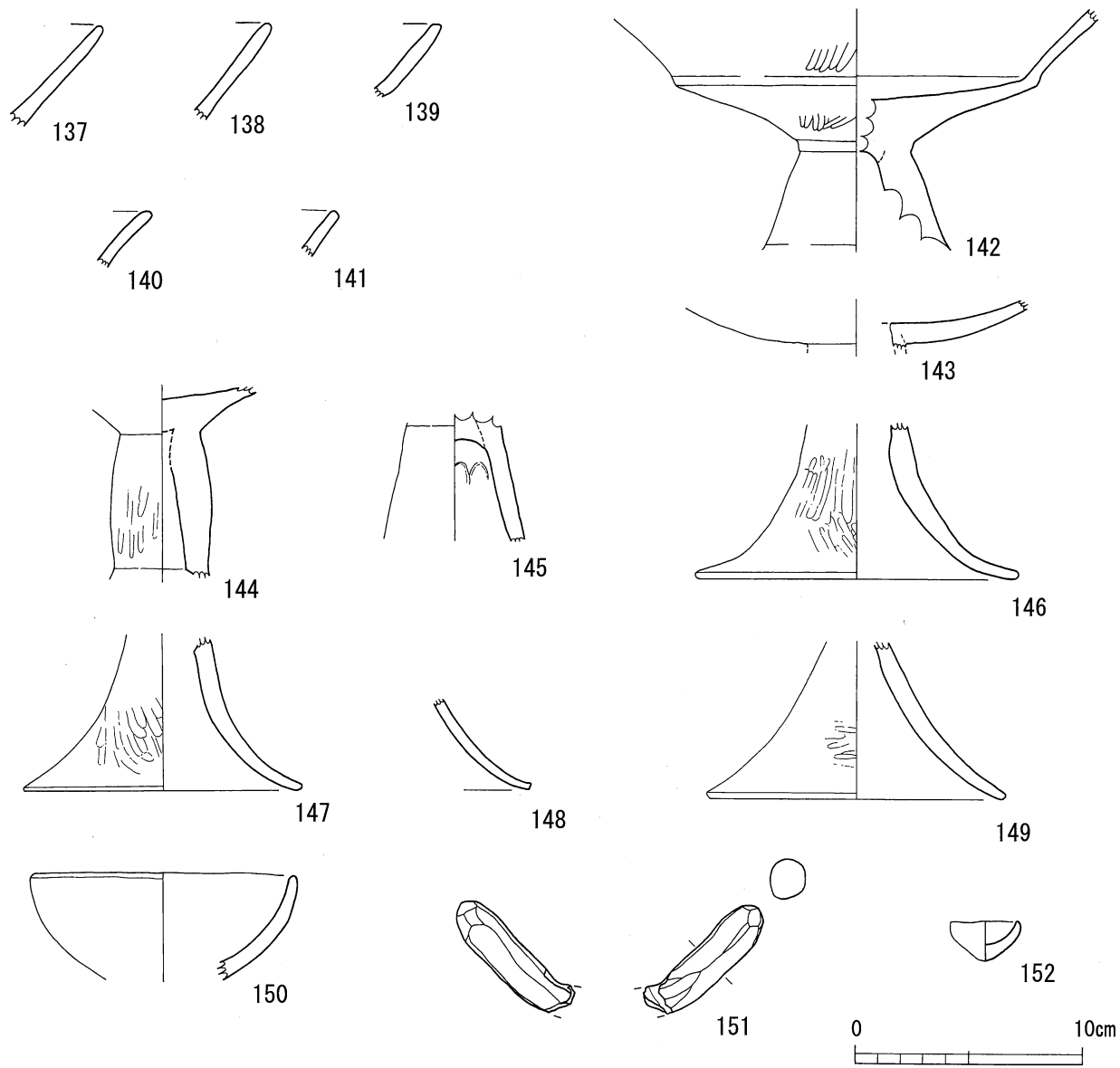
第28图 野添遺跡 K1号竖穴住居跡出土土器実測图(1) (1/3)



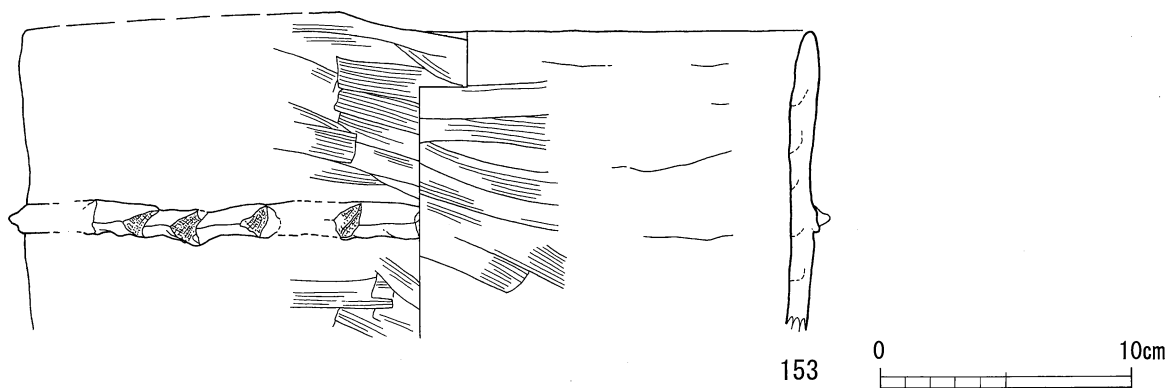
第29图 野添遺跡 K1号竖穴住居跡出土土器実測图(2) (1/3)



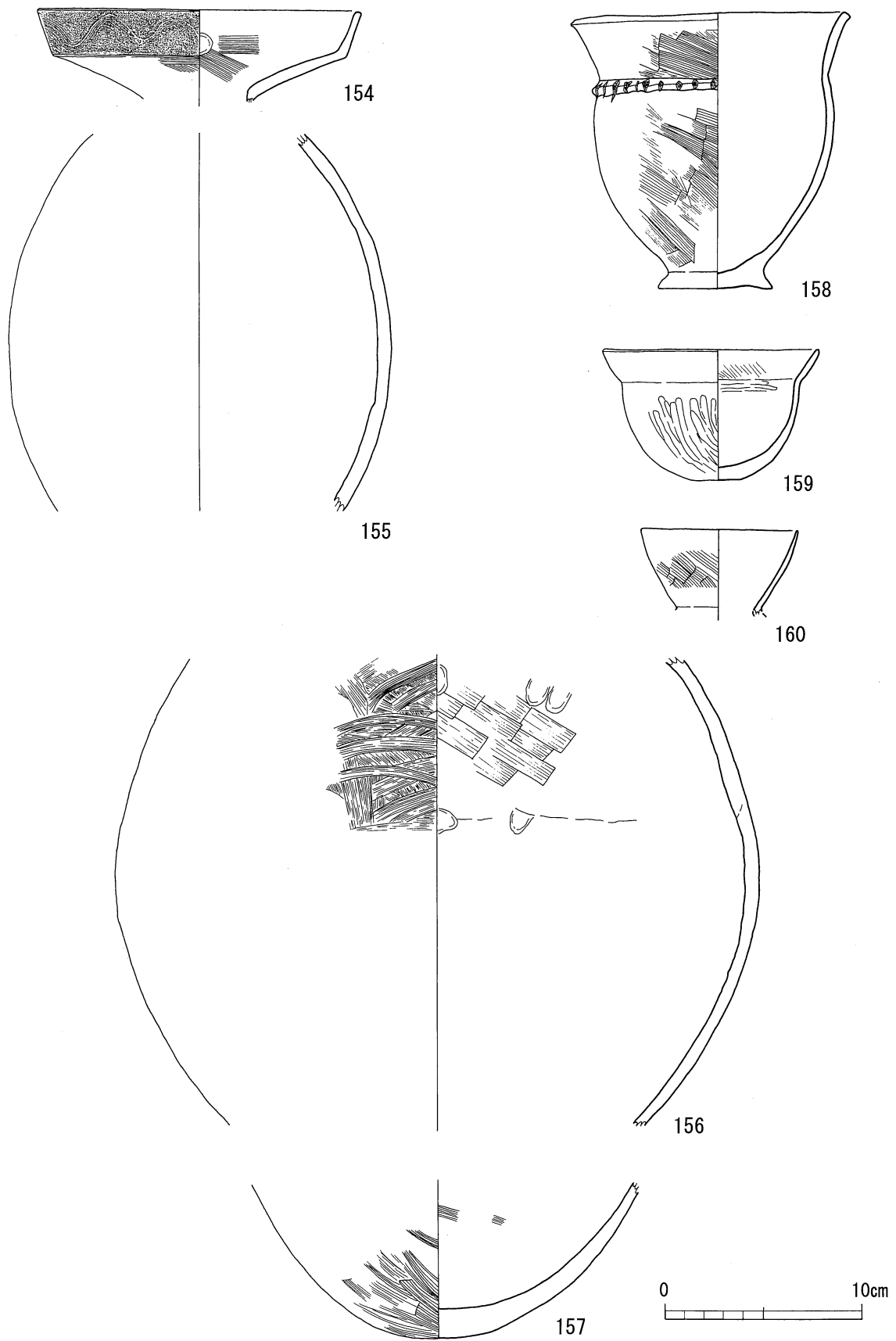
第30図 野添遺跡 K1号竖穴住居跡出土土器実測図(3) (1/3)



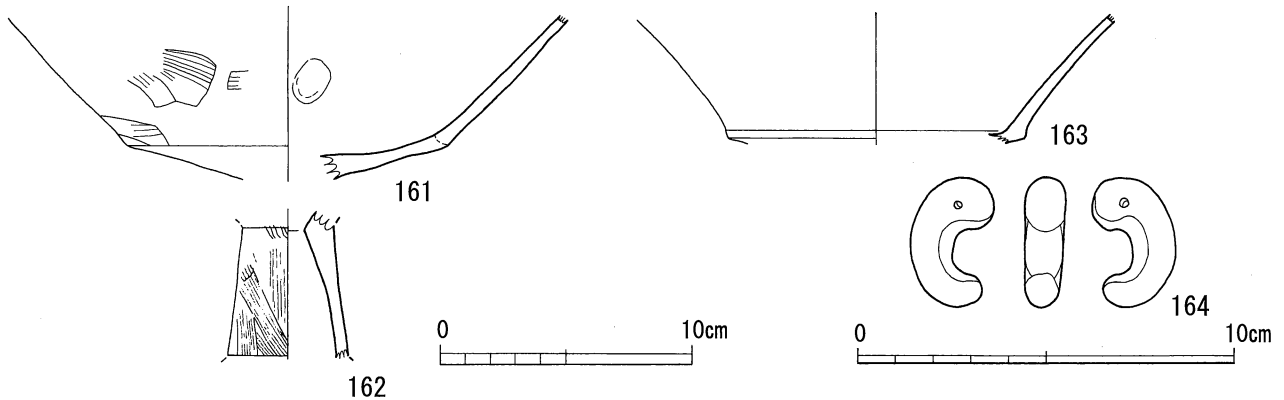
第31图 野添遺跡 K1号竖穴住居跡出土土器実測図(4) (1/3)



第32图 野添遺跡 K1号土壙墓出土遺物実測図(1) (1/3)



第33图 野添遺跡 K 1号土壙墓出土遺物実測図(2) (1/3)

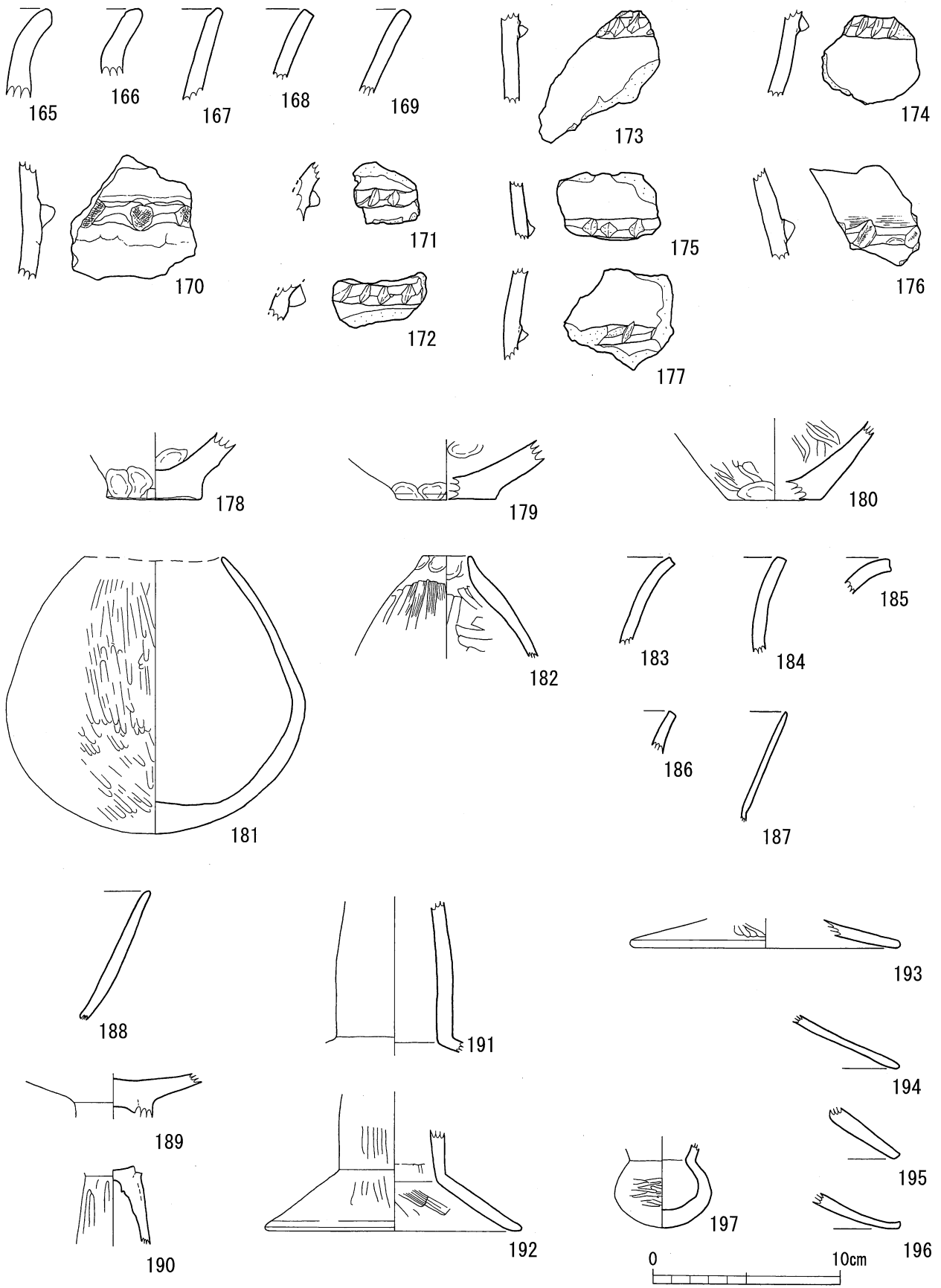


第34図 野添遺跡 K1号土壌墓出土遺物実測図(3) (1/3)

(3) 包含層出土の遺物

古墳時代の土器の遺物包含層はB区・C区の第Ⅲ層からⅣ層である。甕・壺・高坏の土器が出土している。個々の遺物についての詳細は観察表に記載している。出土遺物は第35図に示している。

165～169はの甕の口縁部である。165・166は口縁部がわずかに外反する。調整は内外面ともナデで、工具痕が残る。167は口縁部がまっすぐにのび、口唇部はわずかにつまみだしている。内外面ともハケ目調整でススが付着している。168・169は口唇部が平らに仕上げている。168は内外面とも横方向のナデで外面にススが付着している。169は内外面ともハケ目調整である。170～177は胴部上半に断面三角形の貼付突帯を巡らす甕の胴部である。170～172は内外面ともナデ調整である。173～177は内外面とも横・斜方向のハケ目調整である。178～180は甕の底部である。178はわずかにくびれを持って内湾する胴部が外方に延びる。わずかに上げ底を呈する。内外面ともナデで指頭痕がみられる。179～180は平底で、くびれを持たずに内湾する胴部が立ち上がる。179は外面はナデで一部黒変している。内面は不定方向の工具によるナデである。180は内外面ともナデ調整である。181～187は壺である。181は肩部のあまり張らない丸底の壺である。頸部くびれ部から内湾気味の口縁部が外側に開くものと考えられる。調整は外面はミガキ、横・斜方向のハケ目である。182は扁平気味の胴部を持つ小型土器である。内外面ともハケ目調整である。183～187は壺の口縁部である。183～186は直口する頸部から口縁部が外反し開いている。内外面ともハケ目調整である。187は直口する頸部から口縁部が直口し開いている。内外面とも斜方向のハケ目調整である。188～196は高坏である。188は体部にごくわずかな稜をもつ坏部で口唇部が若干外反する。調整は外面はミガキ後ナデ、内面はナデである。189は坏底部で、外面はナデ、内面はミガキである。190は円柱状を呈す。外面はミガキ、内面はナデである。191・192はやや膨らみを持った柱状部で、191はエンタシス状の脚柱部に屈曲して裾部が大きく広がる。外面はミガキ、内面はハケ目、ナデ調整である。192は内外面ともナデ調整である。外面は一部黒変している。193～196は裾部である。193・194は大きく開く裾部で、外面は横方向のナデ、内面は横方向のナデ、ハケ目である。195は柱状部から屈曲して広がる裾部と思われる。外面はミガキ、内面は風化しているため調整不明である。196は裾部が緩やかに外反し、内端面で接地する。内外面とも風化しているため調整不明である。197はミニチュア土器である。外面はナデ、ミガキ、内面は横方向にナデである。



第35図 野添遺跡 包含層（古墳時代）出土土器実測図（1／3）

3 古代の遺物

古代については遺構の確認はできず、遺物が若干出土しただけである。古代の遺物は主に第Ⅲ層から出土している。口縁部が開き、口唇部を丸く仕上げた甕、土師器坏、高台付き埴、土師器皿、布痕土器、須恵器、紡錘車などがある。

(1) 包含層出土の遺物

古代の土器の遺物包含層はB区・C区の第Ⅱ層から第Ⅲ層である。個々の遺物についての詳細は観察表に記載している。出土遺物は第36図に示している。

198～224は古代の土器である。198～202は土師器甕である。198・199は胴部に膨らみを持ち、口頸部が緩やかにくびれ外反する甕である。198は外面は横方向のナデ、内面は工具による横方向のナデを施し、199は内外面とも工具による甕であると思われる。200は胴部に膨らみを持ち、口頸部が「く」字状に強く屈曲し、外反する甕であると思われる。内面はハケ目、外面は横方向のナデである。201はわずかなくびれを持って内湾する胴部が外方に延びる。底部の中央部がわずかに窪む。外面はヘラミガキ、ナデを施し、内面はナデである。202は甕の底部で、くびれを持たずに直線的な胴部が立ち上がる。202は内外面ともナデである。

203～210は土師器坏である。203は底部から体部への稜を持たないで口縁部にかけて若干外反しながら延びるものである。口唇部は細い。内外面とも回転ナデである。204～207は底径と口径の差が大きくなり、体部は基本的にラッパ状に大きく開くものである。内外面とも回転ナデである。203～210はヘラ切り離しとみられる。208～210は円盤高台状の底部形態を呈するものである。内外面とも回転ナデが施されている。209・210は、切り離し後に丁寧な工具調整が施されている。

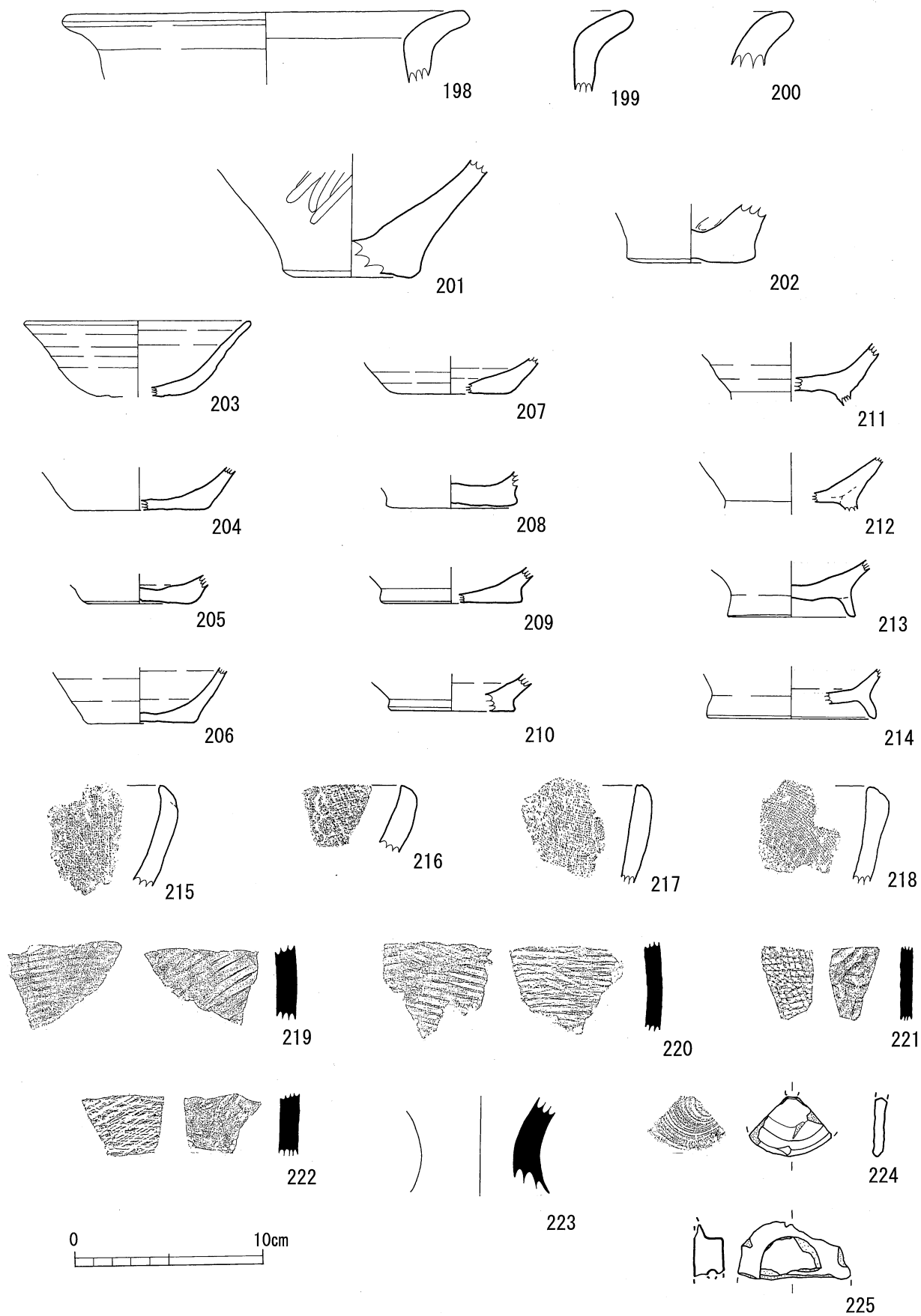
211～214は高台付き埴である。211・212は高台端部が外側に開いた高台が体部直下よりもやや外寄りに付き、体部はやや内湾しながら立ち上がるものである。内外面とも風化気味であるが回転ナデがみられる。212は内外面ともナデ調整である。213・214は黒色土器の高台付き埴である。体部から口縁部にかけて外側に直線的に延びるものと思われる。高台端部は面取りされ、外側に開く。内外面ともナデ調整である。

215～218は布痕土器の口縁部である。製塩や塩の運搬に使用されたとと思われる円錐状を呈する土器である。体部から内湾気味に延びていき、端部断面を三角形に形成する。一般的には尖底を呈し口縁端部は製作過程によるヘラ切り落としで面取りがされている。外面に指頭痕が残るナデ調整で、内面に粗い布目圧痕を残している。全体的に軟質で長時間火を受けたような橙色を色調とする。

219～223は須恵器である。219～222は甕とした遺物であるが、器種の区別が曖昧なところがある。219・220は内外面とも条線状に平行タタキを施している。221は外面は格子目のタタキを施し、内面は同心円当具痕がみられる。222は外面は縦と横方向の交叉状にタタキを施し、内面はタタキ後ナデを施している。223はその形状から長頸壺の頸部の可能性が強い。内外面ともナデ調整である。

224は土師質の坏または皿の底部を転用した紡錘車である。

225は滑石製の蓋のつまみである。



第36図 野添遺跡 包含層（古代）出土土器実測図（1／3）

4 中世から近世の遺構と遺物

今回の調査で中世から近世の遺物は少なく、遺構に伴うものも僅かであるが、若干の出土遺物と埋土中の火山灰の状況から遺構の時期の位置付けを行った。中世から近世の遺構は、調査区のB・C・D区から検出されている。検出された遺構は、土壙墓2基、土坑2基、溝状遺構2条、道路状遺構2条である。遺物は中世に属するものであり、遺構もおおむね中世の所産と考えられる。但し、溝状遺構・道路上遺構については埋土の状況から近世のものだと判断した。

(1) 土壙墓

1号土壙墓（SDT1：第38図）

C区の南端部北壁沿で、C9グリッドが検出された。周辺には西に隣接してSG1号道路状遺構が存在する。規模は長軸約145cm、短軸約82cm、深さは16～25cmを測る。平面形態はやや不整の長方形で、断面形態は箱状を呈する。主軸方位はN-21°-Wである。覆土は基本土層Ⅱ層を主体とする。

出土遺物は第43図に示している。この遺構に伴う遺物（226～231）は主に中層から出土している。遺物の内訳は、226は土師器坏で、体部から口縁部にかけて外反しながらのびるものである。全体を比較的に厚く仕上げた坏で、底部は糸切りを呈する。内外面とも回転ナデである。227～231は土師器皿である。227は体部が丸みを帯びながら立ち上がり、口唇部は面取りされ若干外反する。外面は回転ナデで、内面は回転ナデ後指ナデを施している。底部は糸切りを呈する。228～230は器高に比して底部の器壁が厚く、法量も小さい。231はへら切り底で、内外面とも横方向の回転ナデ調整である。228～230は糸切り底で、内外面とも回転ナデである。

2号土壙墓（SDT2：第38図）

C区の南縁ほぼ中央で、D8グリッドから検出された。周辺には東に約5.5m離れてK1号竪穴住居跡が存在する。規模は長軸約138cm、短軸約95cm、深さは41cmを測る。平面形態は楕円形で、断面形態は皿状を呈する。覆土は基本土層Ⅱ層を主体とする。

出土遺物は第44図に示している。この遺構に伴う遺物は主に上層から出土している。232は土師器の皿である。232は内外面風化しているが回転ナデ調整が加えられた皿で、体部は丸みを帯びながら立ち上がり、口縁は不整形である。底部はへら切り離しである。

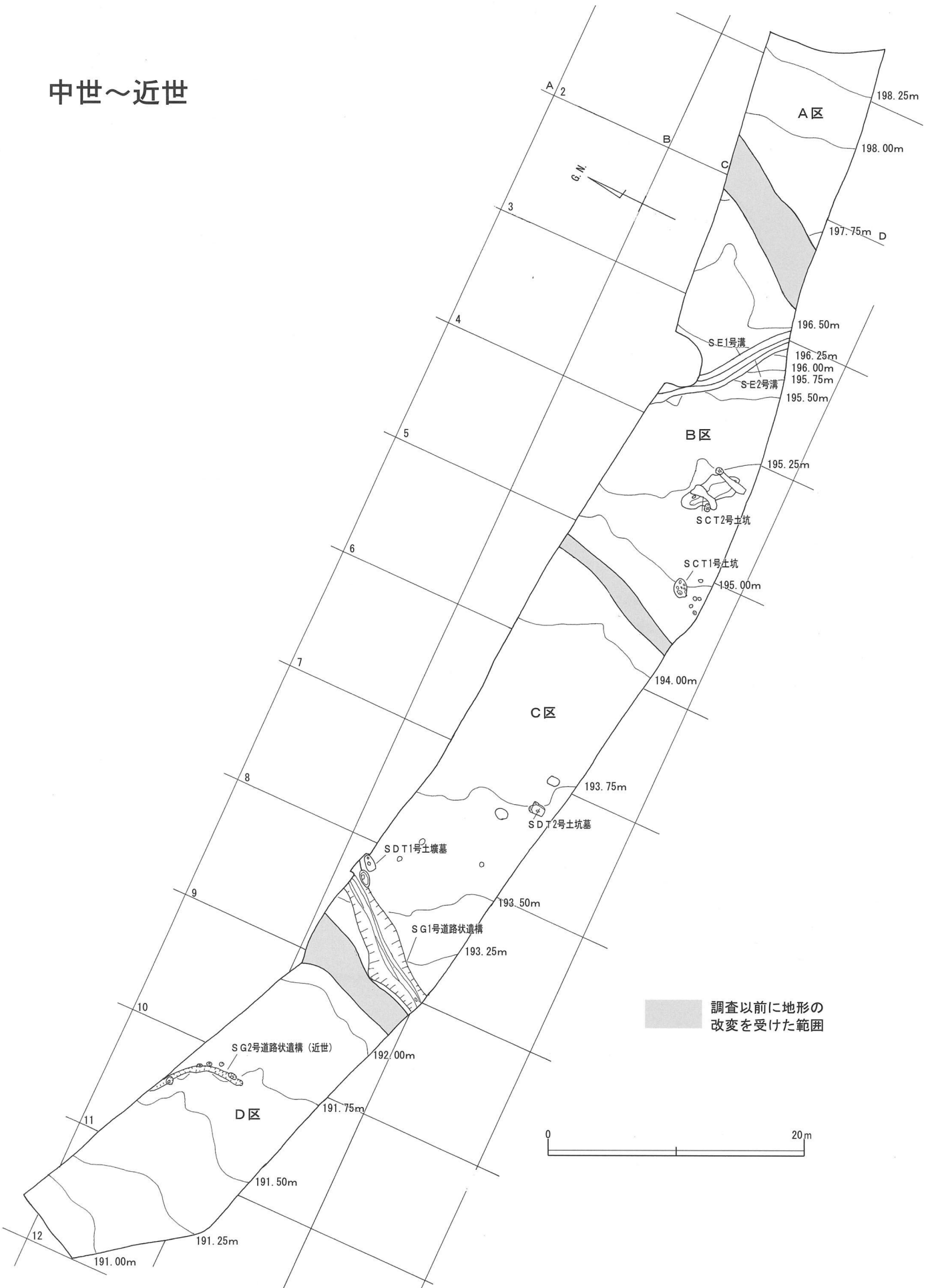
(2) 土坑（SC）

1号土坑（SCT1：第38図）

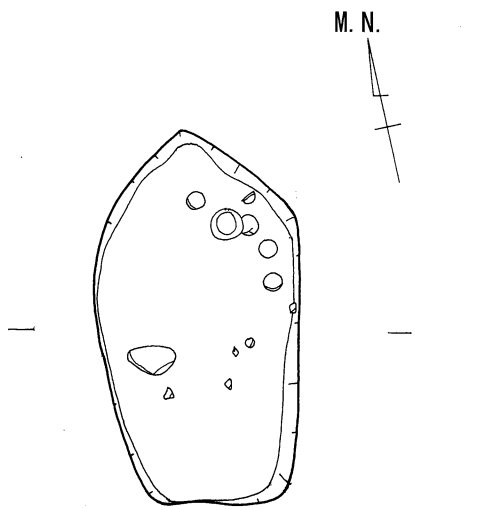
B区の南端部南縁沿で、C9グリッドから検出された。周辺には東に約5m離れてT2号土坑が存在する。規模は長軸約145cm、短軸約82cm、深さは16～25cmを測る。平面形態はやや不整の長方形で、断面形態は箱状を呈する。覆土は基本土層Ⅱ層を主体とする。

出土遺物は第45図に示している。この遺構に伴う遺物（233～235）は主に中層から出土している。遺物の内訳は、233は土師器質の小型土器の口縁部である。内外面とも横方向のナデである。234・235は土師器質の坏の口縁部である。体部は基本的にラップ状に大きく開くもので、口縁が緩く外反する。外面は回転ナデ、内面はナデを施している。

中世～近世



第37図 野添遺跡 中世から近世の遺構分布図 (1/400)

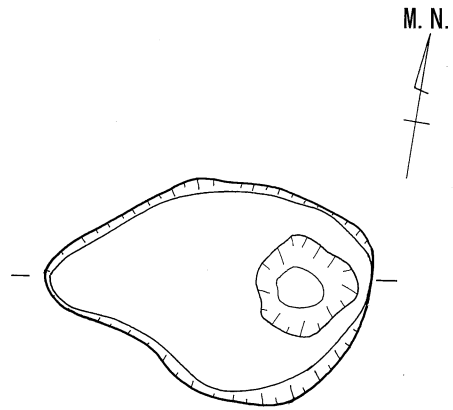


194.900m

T1号土壙墓

【土層注記】SDT1

- I 暗褐色 (10YR 3/4) 直径1~2mmの黄橙色粒子を微量に含む。しまり弱く、粘性ややあり。
- II 暗褐色 (10YR 3/4) 直径3~5mmの黄橙色粒子を多量に含む。しまり弱く、粘性ややあり。
- III 暗褐色 (10YR 3/4) 直径3~5mmの黄橙色粒子を多量に含む。しまり弱く、粘性ややあり。
- IV 御池軽石層直径1~10mmの黄橙色粒子のみで構成。しまりややあり、粘性なし。

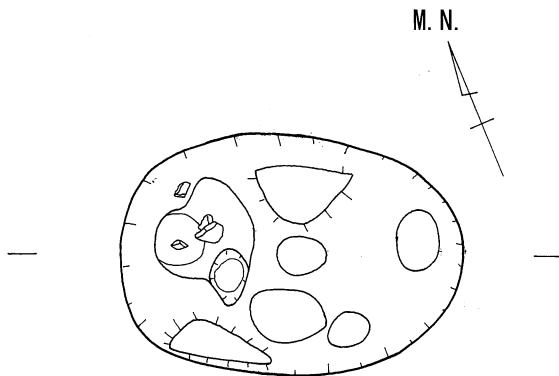


194.900m

T2号土壙墓

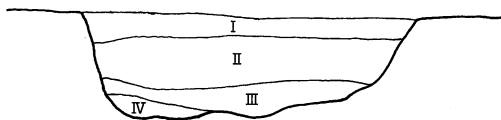
【土層注記】SDT2

- I 暗褐色 (7.5YR 3/3) 直径1mmの黄橙色粒子を少量含む。しまりが弱く、粘性ややあり。
- II 暗褐色 (7.5YR 5/8) 直径1mmの黄橙色粒子を多量含む。しまりが強く、粘性あり。
- III にぶい褐色 (7.5YR 6/3) 直径1mmの黄橙色粒子を少量含む。しまり弱く、粘性なし。
- IV 黄褐色 (7.5YR 6/8) 御池軽石直径1mmの黄橙色粒子のみで構成。しまり、粘性なし。



T1号土坑

191.600m



【土層注記】SCT1

- I 褐色 (10YR 4/4) 黄橙色粒子を2%程度含む。しまりがなく、粘性なし。
- II 褐灰色 (7.5YR 4/1) 黄橙色粒子を5%程度含む、しまりがあり粘性あまりない。
- III 褐色 (10YR 4/4) 黄橙色粒子を10%程度含むためか砂粒がザラザラしている。
- IV 黄褐色 (10YR 5/6) 御池ボラのみで構成。

第38図 野添遺跡 T1号・T2号土壙墓、T1号土坑実測図 (1/30)

2号土坑（SCT2：第39図）

1号土坑の東側約5mの位置に検出された。規模は長軸約145cm、短軸約82cm、深さは16～25cmを測る。平面形態は不整形な形で、断面形態は鍋状を呈する。覆土は攪乱部分もあるが1号土坑と違い褐灰土を主体とし、御池ボラや炭化物粒子が混入する。1号土坑よりもやや新しい時期のものと考えられる。遺物は出土していない。

(3) 溝状遺構

1号溝（SE1：第40図）

B区中央部で、標高約195.25m付近から検出された。遺構は山の斜面に沿って南南東壁から北北西方向に約7.5m延び、その先は調査区外へ続く。主軸方向はN-8°-Wである。溝の幅は1.2m～2mで検出面からの深さは最深部で36cmを測る。底面は断面U字形を呈し、北北西に向かって次第に深くなる。溝上面には部分的に厚さ0.5～1cmの硬化面が表れ、埋土は1mm程度の御池ボラ粒を少量含む粘質の褐色土である。埋土中に文明ボラ層は介在しない。

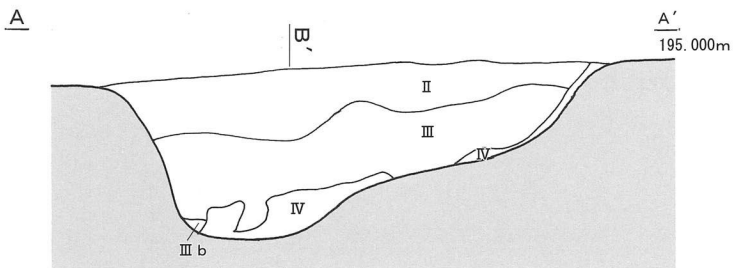
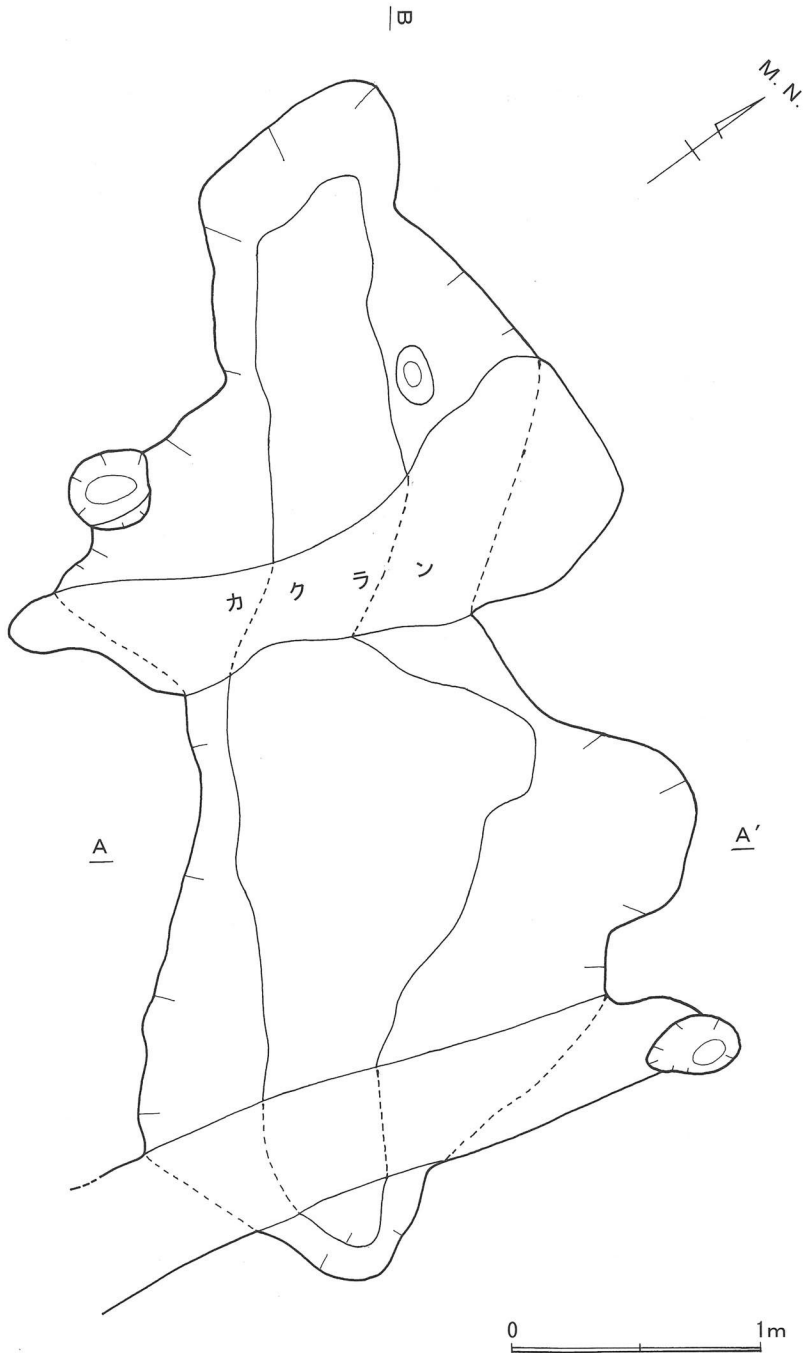
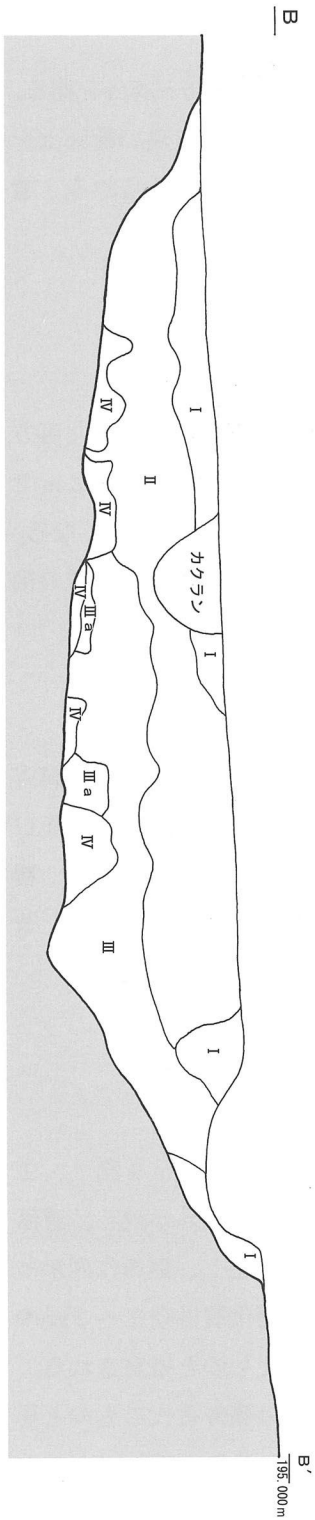
2号溝（SE2：第40図）

2号溝は、山の斜面に沿って南東壁から北西方向延び、1号溝と並行している。なお、その先は調査区外へ続く。長さは12.3m、幅は1m～2mで検出面からの深さは最深部で25cmを測る。底面は断面U字形を呈し、北西に向かって次第に浅くなる。溝上面には部分的に厚さ0.5～1.2cmの硬化面が表れ、覆土は1mm程度の御池ボラ粒を少量含む粘質の褐色土である。埋土中に文明ボラ層は介在しない。また遺物も出土していない。

(4) 道路状遺構

1号道路状遺構（SG1：第41図）

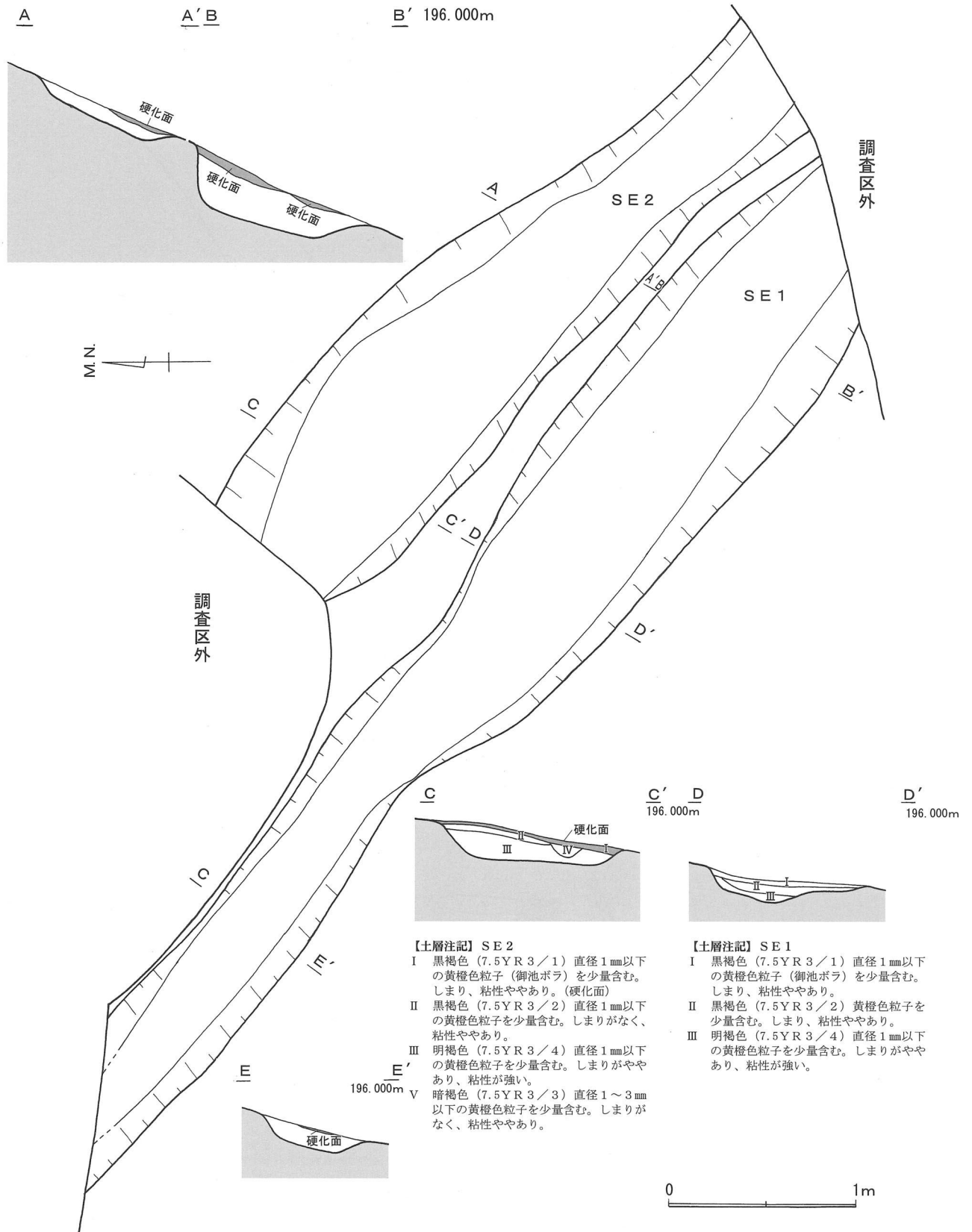
C区南端部で、標高約193mから検出された。走行は北東から南西で、検出全長は10.8mを測り、主軸方向はN-88°-Eで上面幅は南西に走行する程広がる傾向にある。その先は調査区外へ続く。道路の幅は、2.05m～2.3mで検出面の深さは最深部で60cmを測る。底面は断面U字形を呈し、南西に向かって次第に深くなる。断面を見ると幅約20～35cm、厚さ5～10cmの硬化層がある。硬化層は径1～3mmの黄橙色粒子と白色粒子を多量に含み、二層観察され、二時期にわたって使用されたものと推定される。覆土は硬く御池ボラを少し混在する褐色土層が主体である。出土遺物は古墳時代の甕や古代のものと思われる高台付き埴などが出土しているが、床面から浮いているものが殆どで、流れ込みの遺物であると思われる。



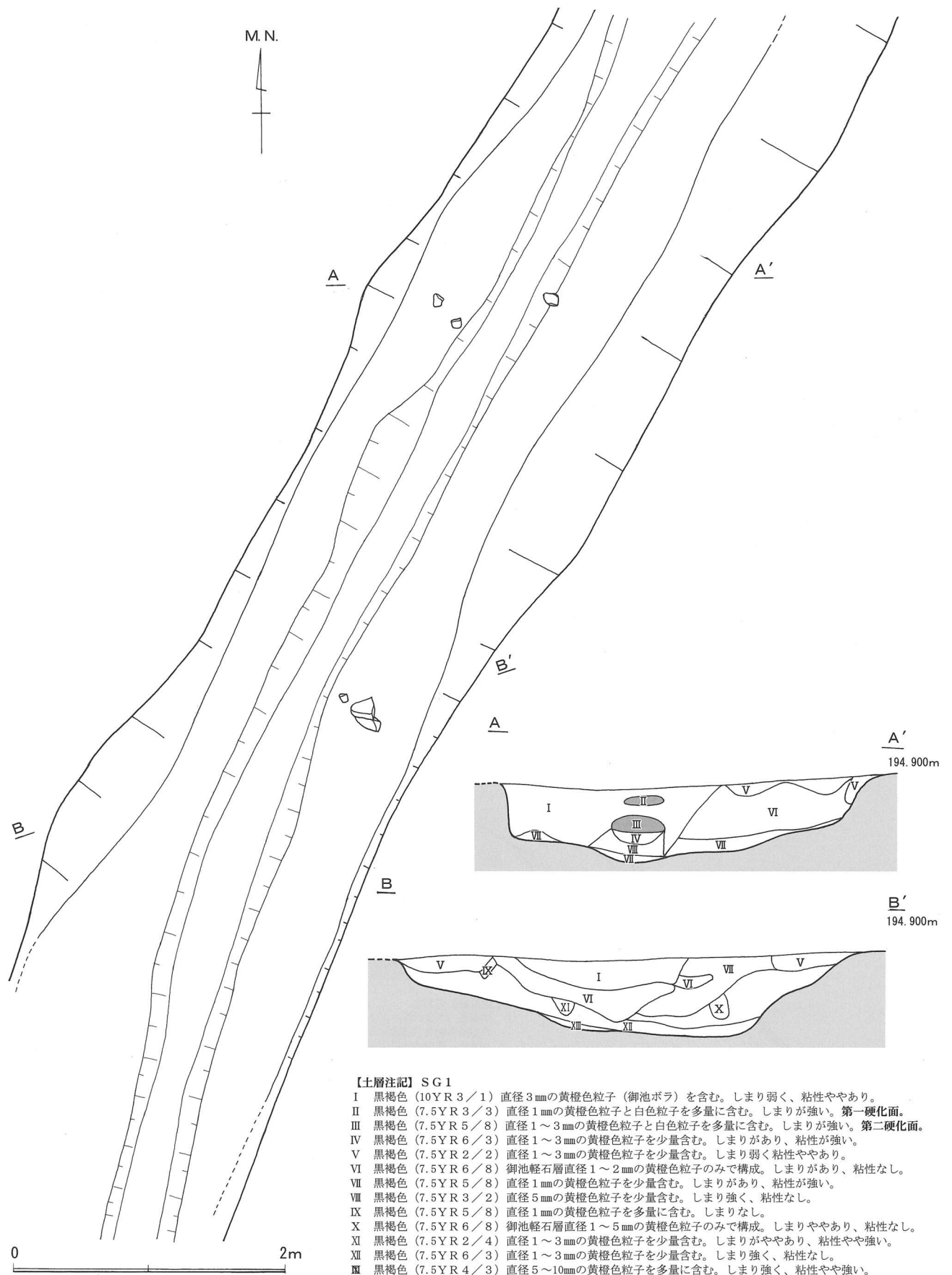
【土層注記】 S C T 2

- I 褐色 (10YR 4/4) 御池ボラを2%程度含む。植物による浸食を受けている。バサバサで粘性なし。
- II 褐灰色 (7.5YR 4/1) Iよりしまりがあり、III aをブロック状に25%程度含む。御池ボラを5%程度含む、10~30mmの植物体が炭化したものを3%程度含む。
- III 褐灰色 (7.5YR 4/1) IIと同層だがIIよりIII aをブロック状に多く含む。
- III a 褐色 (10YR 4/4) 粘りがあり、御池ボラを10%程度含むためか砂粒がザラザラしている。
- III b 褐色 (10YR 4/4) 50%以上の御池ボラを含む。
- IV 黄褐色 (10YR 5/6) 御池ボラのみで構成。

第39図 野添遺跡 T2号土坑実測図 (SCT2: 1/30)



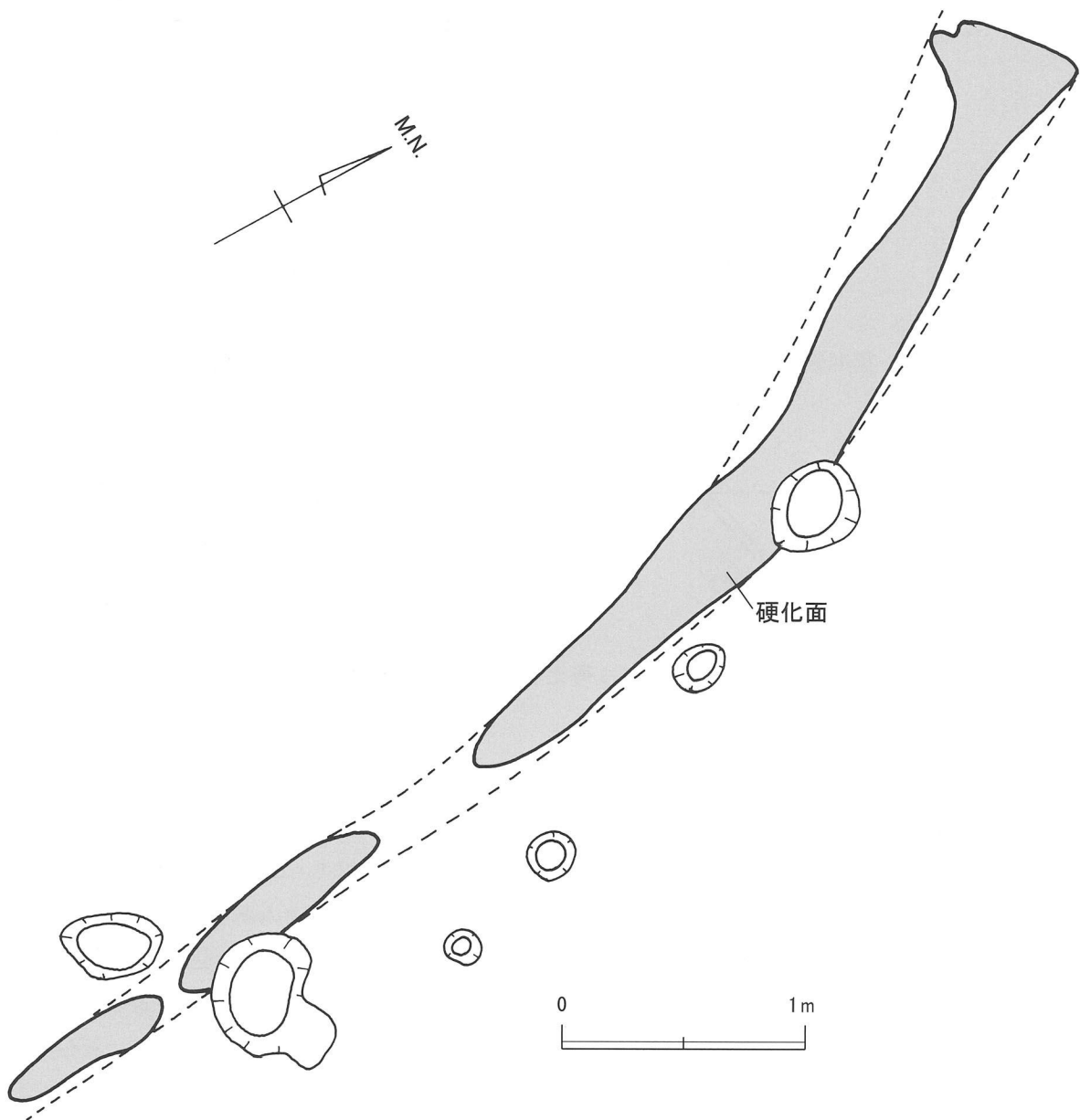
第40図 野添遺跡 1号・2号溝状遺構実測図及び土層断面図 (SE 1・SE 2 : 1/60)



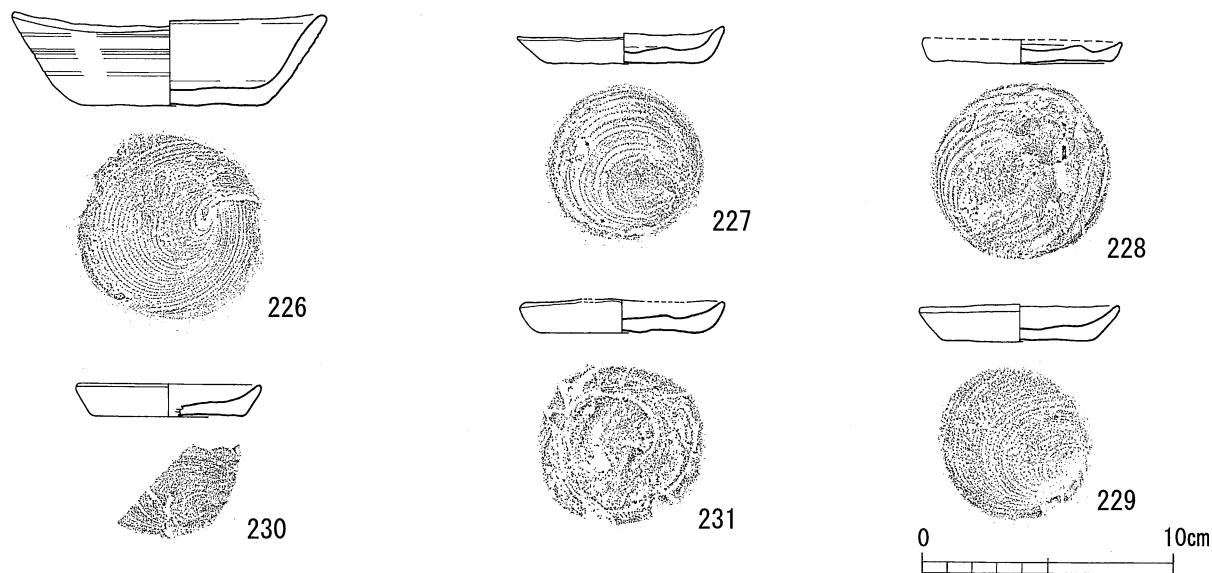
第41図 野添遺跡 1号道路状遺構実測図及び土層断面図 (SG 1 : 1/40)

2号道路状遺構 (SG2 : 第42図)

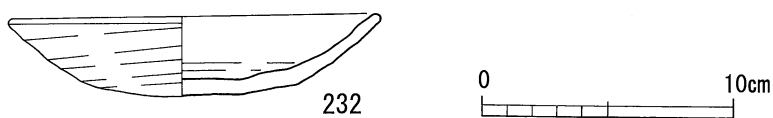
D区中央部北壁沿で、標高約191.75m付近で検出された。走行は南から北西で、検出全長4.5mを測り、幅約25cmの溝で溝上面はほとんど削平されて、硬化面だけがみとめられる程度にしか検出されなかった。北側の断面観察すると浅いU字状を呈し、底面はアカホヤ層が堆積している。硬化層の幅は10~18cm、厚さ1~3cmで、深さは計測不可能。溝の脇には柱穴が溝に沿って並んでおり、その数は6基を数える。



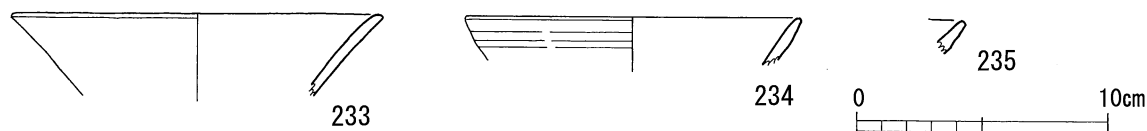
第42図 野添遺跡 2号道路状遺構実測図 (SG2 : 1/60)



第43図 野添遺跡 T1号土壙墓出土土器実測図(1/3)



第44図 野添遺跡 T2号土壙墓出土土器実測図(1/3)

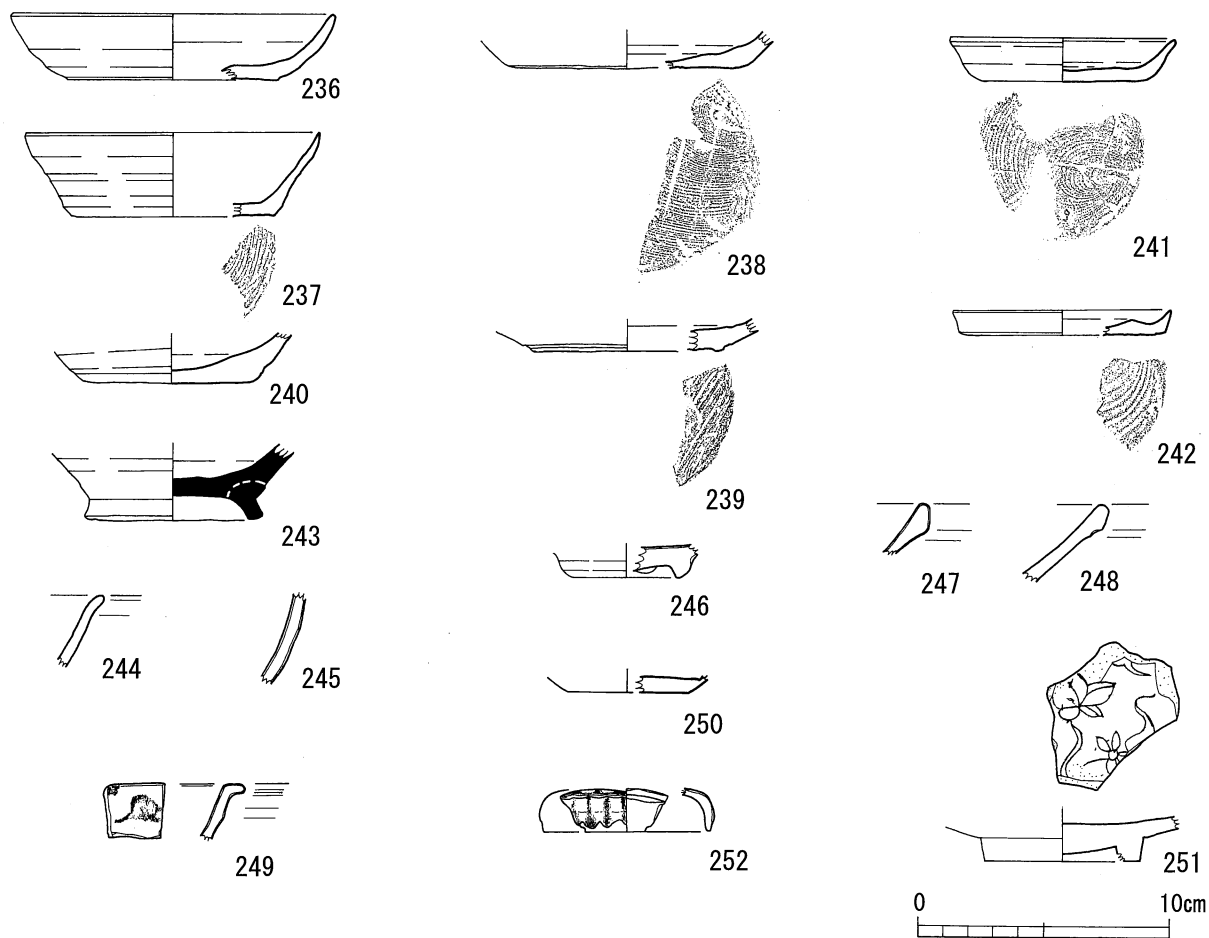


第45図 野添遺跡 T1号土坑出土土器実測図(1/3)

(5) 包含層出土の遺物

中世から近世の土器の遺物包含層はA・B・C区の第II層からである。個々の遺物についての詳細は観察表に記載している。出土遺構は第46図に示している。

遺構外の出土遺物は数十点と少ない。236～240は土師器坏である。236・237は体部が緩やかに内湾しながら立ち上がるもので、底部と体部の境界は明瞭である。236は内外面とも回転ナデで、底部はヘラ切りを呈する。237外面は回転ナデ、内面は横方向のナデである。底部は糸切りを呈する。238は体部が丸みを帯びながら直線的に立ち上がるものと思われる。内外面ともナデ調整でススが付着している。底部は糸切りを呈する。239は体部が直線的に立ち上がるもので、底部と体部の境界は明瞭である。内外面ともナデ調整で、底部は板状圧痕らしき痕跡が認められる。240は緩やかに内湾しながら立ち上がるもので、底部と体部の境界付近の外面は明瞭な屈曲点を持つ。内外面とも回転ナデである。241・242は土師器質の小皿である。241は体部が丸みを帯びながら緩やかに立ち上がり、口唇部は面取りされ若干



第46図 野添遺跡 包含層（中世～近世）出土土器実測図（1／3）

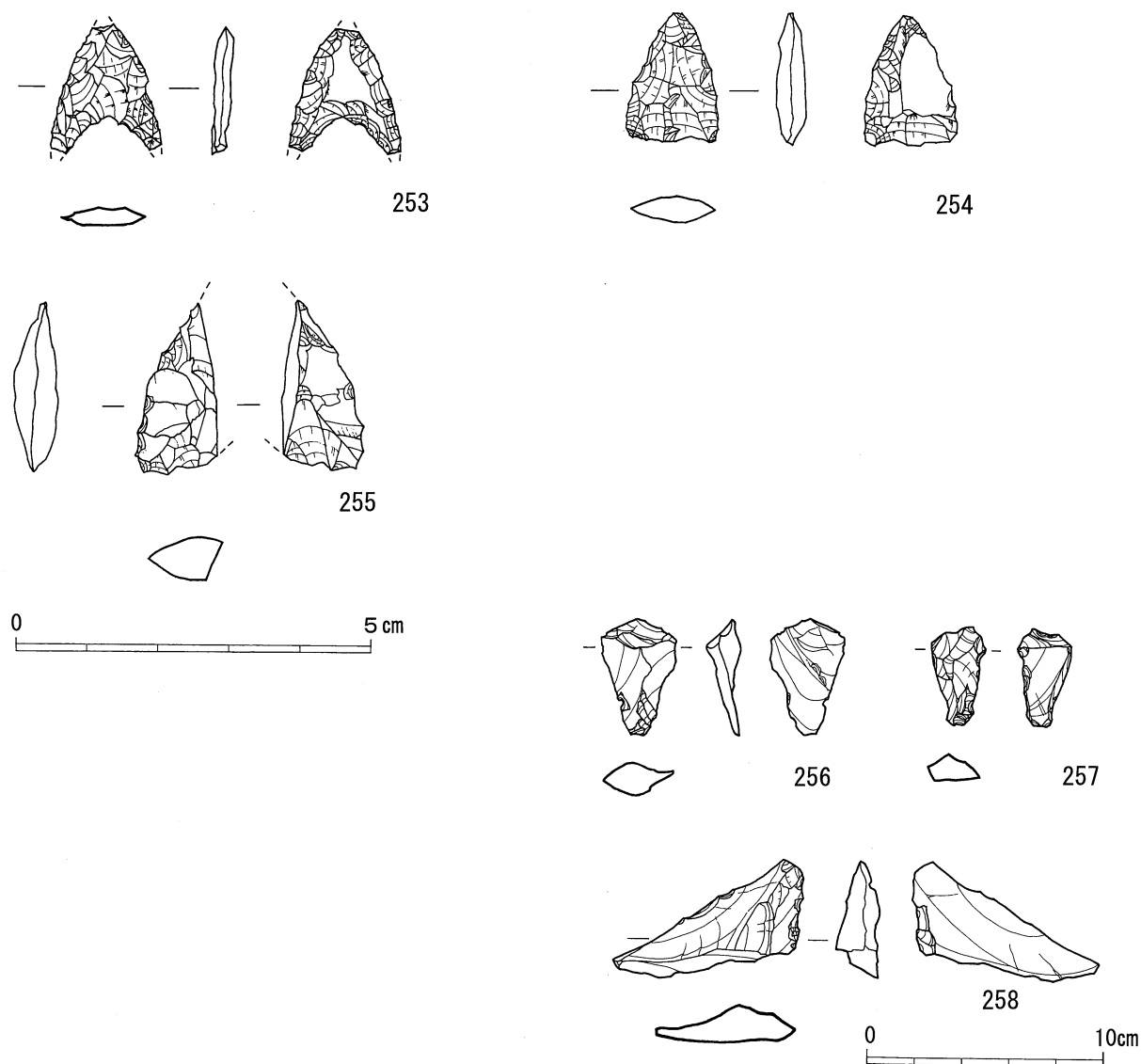
外反する内外面とも回転ナデで、底部は糸切りを呈する。242は体部が緩やかに内湾しながら立ち上がる。口縁部の断面形は舌状を呈する。内外面とも回転ナデで、底部は糸切りを呈する。243は高台が付く須恵器である。体部がやや丸みを帯びて立ち上がり、体部直下に台形状で豊付中央がかすかにくぼむ高台が付くもので、高台内をナデ調整しているほか、豊付に工具痕が認められた。外面は回転ナデである。

244～246は青磁碗である。244は、くすんだ緑灰色の釉がかかり、内外面無文の口縁部である。口縁部はわずかに外反する。245は、胎土はきめ細やかで、緑色の釉を施し、内外面無文の体部である。龍泉同安窯系の青磁だと考えられる。246は高台付碗の底部である。器壁は厚く、高台の外面は緑色の釉がかかり、内面は無釉である。247～250は白磁である。247・248は玉緑口縁白磁碗の口縁部である。口唇部が肥圧し外反する。灰白色の釉がかかり、内外面無文である。249は白磁坏である。口縁部が内湾もしくは直立気味に立ち上がり、上端で短く屈曲する。灰白色の釉がかかる。外面は浅い沈線が巡る。250は白磁皿である。胎土はきめ細やかで、灰白色の釉を施す。内外面無文である。251は白磁碗の底部である。径4.2cmの比較的小さい高台が付く。器壁は厚く、高台の内面は無釉である。内面見込み部分には、細線の線描き花文が施されている。252は青白磁合子の蓋部である。明緑灰色の釉がかかり、内外面無文である。

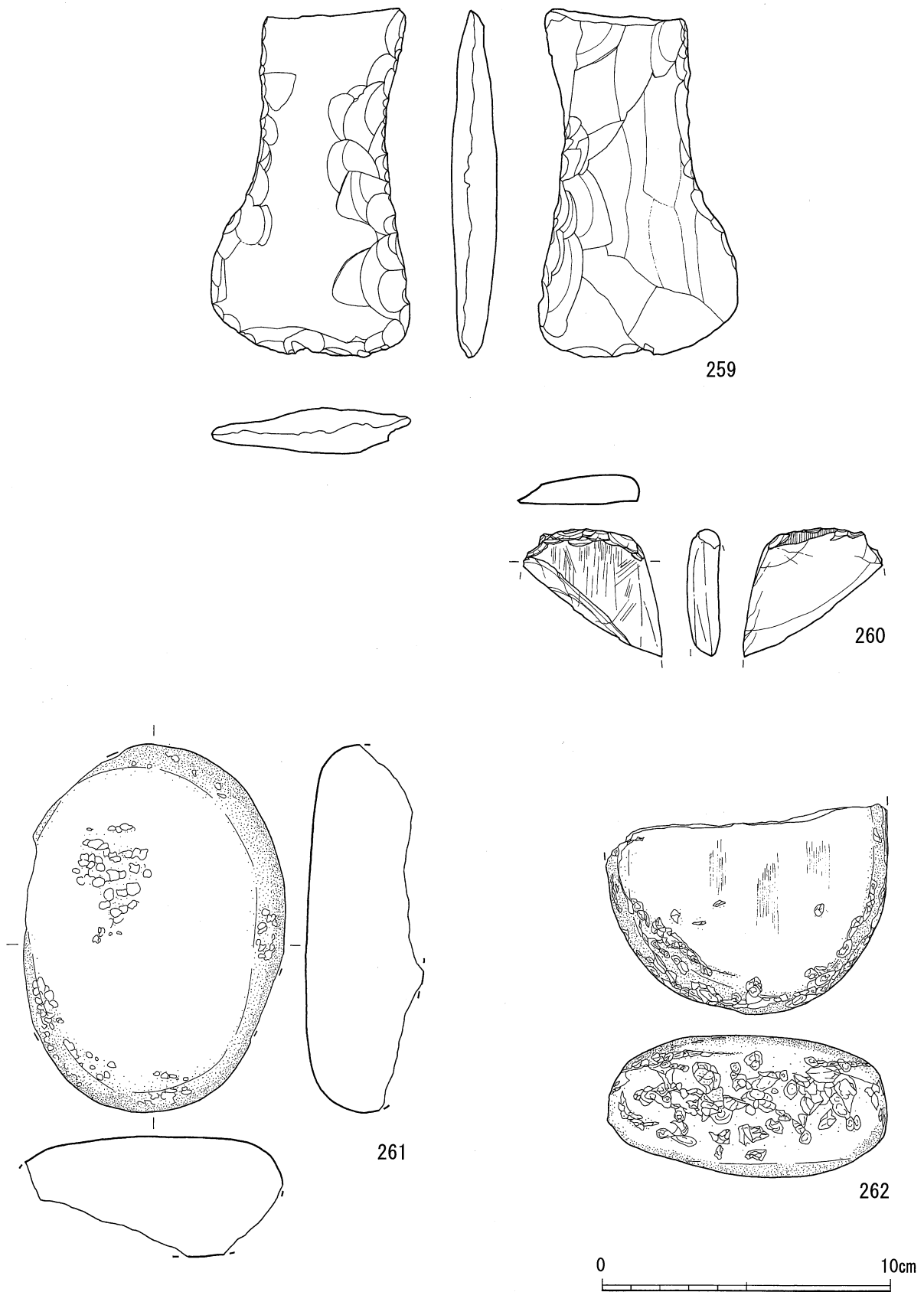
5 石器

包含層から出土した石器は少なく、第47図～第49図に記載したものがほとんどである。石器の使用された時期については特定できないので一括して記述したい。

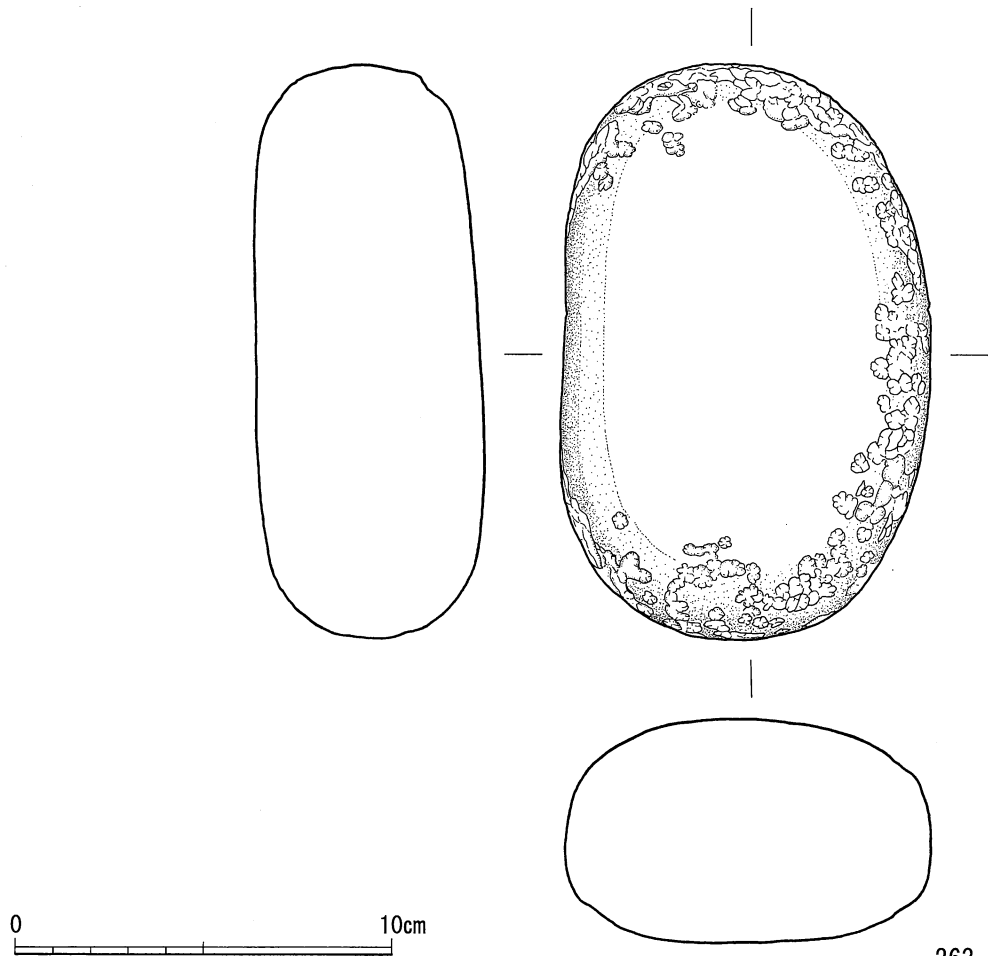
253～255は打製石鏃である。253は平面形態が正三角形をしている凹基式の石鏃である。側縁部は直線的であるが浅いU字状を作り出している。脚部は先端を尖らすものである。使用石材はチャートである。254・255は平面形態が二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。側縁部は外湾するもので抉りはU字状に作り出している。脚部はまるみをつけている。254の使用石材はチャートである。255の使用石材は頁岩である。256～258は剥片である。使用石材はチャートである。259は打製石斧である。中型で両側縁部の基部近くに抉りを入れた有肩のものである。使用石材は砂岩である。260は、磨製石斧の基部破片で、縦に割れて剥片状を呈するものである。使用石材はシルト岩である。261～263は磨石である。平面形態は全て楕円形を呈し、縁周に敲打痕が観察される。使用石材は砂岩である。



第47図 野添遺跡 石器実測図(1) (1/2)



第48图 野添遺跡 石器実測図(2) (1/2)



第49図 野添遺跡 石器実測図(3) (1/2)

第4表 野添遺跡 石器計測表

遺物番号	器種	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	石材	備考
17	剥片	S A J 1	3.3	2.3	0.8	2.8	チャート	
34	剥片	S A J 2	2.2	2.9	0.4	2.0	チャート	
41	剥片	S A J 3	3.8	5.0	0.9	14.0	チャート	
42	敵石	S A J 3	6.2	4.5	3.6	123.2	砂岩	
43	打製石斧	S A J 3	6.7	5.1	1.9	110.0	頁岩	
253	打製石鏃	B区: IV層	1.8	1.6	0.3	0.6	チャート	
254	打製石鏃	B区: IV層	1.9	1.3	0.4	0.8	チャート	
255	打製石鏃	B区: IV層	2.4	1.2	0.7	1.5	頁岩	
256	剥片	C区: IV層	2.5	1.6	0.8	1.3	チャート	
257	剥片	C区: IV層	2.1	1.2	0.7	0.5	チャート	
258	剥片	B区: IV層	2.5	4.0	0.9	4.2	チャート	
259	打製石斧	C区: IV層	12.5	6.9	15.5	144.2	砂岩	
260	磨製石斧	D区: IV層	4.4	4.8	1.2	26.7	シルト岩	
261	磨石	C区: IV層	12.7	9.1	4.3	574.2	砂岩	
262	磨石	C区: IV層	7.3	9.7	5.0	475.0	砂岩	
263	磨石	C区: IV層	15.3	9.8	6.0	1415.0	砂岩	
52	玉	S A J 4	7.3	9.7	5.0	475.0	緑色結晶片岩	
164	勾玉	C区: IV層	15.3	9.8	6.0	1415.0	蛇紋岩	

第5表 野添遺跡 出土土器表(1)

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm)			手法・調整		文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外	内	外	内	外	内		
109	土師器	SAK1	甕	口縁部～底部	推定32.7			貼付刻目突帯、ハケ目スス付着	ハケ目、黒斑、粘土のつなぎ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙		1.5cm以下の褐色、赤褐色の粒		
110	土師器	SAK1	甕	口縁部～胴部				工具による横方向のナデ、指頭痕、スス付着	工具による横・斜方向のナデ、指頭痕	明赤褐	明赤褐		7mm以下の褐色の粒、6mm以下の黒褐の粒		
111	土師器	SAK1	甕	口縁部～胴部				工具による横・斜方向のナデ、貼付刻目突帯スス付着	工具による横方向のナデ、指頭痕	橙にぶい黄橙	橙にぶい黄橙		8mm以下の褐色、明褐色の粒		
112	土師器	SAK1	甕	口縁部～胴部				工具による横・斜方向のナデ、貼付突帯、スス付着、指頭痕	工具による横・斜方向のナデ、指頭痕	明赤褐にぶい褐	明赤褐明黄褐		8mm以下のにぶい黄橙の粒、7mm以下の黒褐の粒		
113	土師器	SAK1	甕	口縁部～胴部				工具による横・斜方向のナデ、貼付刻目突帯	工具による横・斜方向のナデ、指頭痕	明黄褐橙	橙褐灰		9mm以下の褐色の粒、2mm以下の灰色の粒		
114	土師器	SAK1	甕	口縁部～胴部				横要項ナデの上に工具による斜方向のナデ、貼付刻目突帯	横方向のナデの上に工具による斜方向のナデ指頭痕	浅黄	浅黄橙		6mm以下の橙の粒、3mm以下の褐色の粒1.5mm以下の半透明の粒		
115	土師器	SAK1	甕	頸部				ハケ目、貼付突帯、スス付着	丁寧なナデ、指頭痕	にぶい褐	にぶい橙		3mm以下の褐色、乳白色の粒		
116	土師器	SAK1	甕	頸部				工具によるナデ、貼付突帯	工具によるナデ	浅黄	淡黄		3mm以下の褐色の粒		
117	土師器	SAK1	甕	頸部				横方向のナデ、貼付突帯、スス付着	ナデ、指頭痕	灰黄	淡黄		最大8mmの石の粒		
118	土師器	SAK1	甕	口縁部				不定方向のハケ目後ナデ	不定方向のハケ目後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		1mm～7mmの褐色の粒		
119	土師器	SAK1	甕	口縁部				ナデ、粘土のつなぎ目スス付着	ナデ、指押え	にぶい黄橙	浅黄		2mm～9mmの褐色の粒		
120	土師器	SAK1	甕	頸部～胴部				ナデ、横方向のハケ目斜方向のハケ目	横方向のナデ、斜方向のハケ目	にぶい黄橙	浅黄		0.5mm～3mm大の褐灰、にぶい橙、5mm～7.5mm大の灰、褐色の粒		
121	土師器	SAK1	甕	底部		推定7.0		ナデ、斜方向の工具痕	斜方向のナデ	浅黄	浅黄		2mm～7mmの褐色の粒、2mm以下の黒色 無色半透明な粒		
122	土師器	SAK1	甕	底部				ナデ、木の葉底		にぶい黄橙			6mm前後の橙色粒、3mm以下の褐、白色粒		
123	土師器	SAK1	壺	口縁部～胴部				斜方向の工具痕、剥離	斜方向の工具痕、剥離	橙	赤褐		1mm以下の茶褐色、灰褐色の砂粒		
124	土師器	SAK1	壺	口縁部～底部				不定方向にハケ目、横方向のナデ、一部黒変	不定方向のハケ目、指押え	浅黄橙	浅黄橙		1mm前後の茶褐色の粒		
125	土師器	SAK1	壺	口縁部～胴部				横方向のナデ、不定方向の工具によるナデ	横方向のナデ、一部工具によるナデ	灰しろ	にぶい黄橙		2mm～8mmの褐色の粒、1mm以下の黒色		
126	土師器	SAK1	壺	口縁部～底部	推定10.2			横・斜方向のミガキ、ミガキ	ミガキ、粘土のつなぎ目	にぶい黄橙	明黄褐		微細～1mm以下の黒色、白色、透明光沢粒、2mm大の白色の粒	風化気味	
127	土師器	SAK1	壺	口縁部～胴部				横方向のナデ、斜・横方向のハケ目、ナデ	不定方向のナデの上を斜方向のハケ目	橙にぶい黄橙	にぶい黄橙にぶい橙		0.3mm～4mmの灰褐、灰色の砂粒		
128	土師器	SAK1	壺	胴部				ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	橙		光る微粒子、0.5mm～3mm大の黄褐色の砂粒	風化	
129	土師器	SAK1	壺	口縁部	推定11.2			ミガキ	ナデ	橙	橙		精良	風化	
130	土師器	SAK1	壺	口縁部	推定11.2			ミガキ	ナデ	橙	橙		2.5mm以下の乳白色粒、1mm以下の透明光沢粒		
131	土師器	SAK1	高坏	口縁部	推定28.0			ミガキ、一部スス付着	ミガキ、黒斑	橙	明赤褐橙		2mm以下の橙色粒、半透明光沢粒、乳白色粒	風化	
132	土師器	SAK1	高坏	口縁部	推定15.2			ミガキの上をナデ、丁寧なナデ	ナデ	橙	にぶい橙		2mm以下の黒色の微細粒		
133	土師器	SAK1	高坏	口縁部	推定16.8			丁寧なナデ、ミガキの上をナデ	横方向のナデ	黄橙橙	黄橙		1mm以下の黒色の微細粒		
134	土師器	SAK1	高坏	口縁部	推定24.0			ミガキ、横方向のナデ	ミガキ	橙	淡黄		1mm以下の白色、透明光沢粒、赤褐色の粒、微細な光沢粒		
135	土師器	SAK1	高坏	口縁部				ミガキ後ナデ	ナデ、黒斑	黄橙	橙浅黄		2mm以下の鋭光沢で灰色の粒、1mm以下の無色透明な粒、微細なキラキラ光る粒		
136	土師器	SAK1	高坏	口縁部	推定11.0			斜方向のミガキ、横方向のナデ、ナデ	横方向のナデ、内黒	橙明黄褐	オリーブ黒		微細な透明光沢粒		
137	土師器	SAK1	高坏	口縁部				ミガキ後ナデ	ナデ、黒斑	橙	明黄橙		微細なキラキラ光る粒、1mm大の乳白色の粒		
138	土師器	SAK1	高坏	口縁部				横方向のナデ、ミガキ黒変	横方向のナデ、ナデ、黒斑	橙	明黄褐浅黄		微細な透明光沢粒		
139	土師器	SAK1	高坏	口縁部				横方向のナデ、ナデ	横方向のナデ	橙にぶい黄橙	にぶい黄橙		微細な透明光沢粒		
140	土師器	SAK1	坏	口縁部				ナデ	ナデ	橙	橙		2mm以下の褐、浅黄橙色粒		
141	土師器	SAK1	坏	口縁部				工具ナデ	工具ナデ	明赤褐	にぶい黄褐		微細な灰白色、光沢粒		
142	土師器	SAK1	高坏	体部～脚部				ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ、一部黒斑	にぶい黄橙	にぶい黄褐橙		1mm以下の黒、褐、灰白色粒、微細な光沢粒		
143	土師器	SAK1	高坏	体部				ミガキ	ミガキ	明赤褐	橙灰		6mm以下の橙色粒、2mm以下の半透明光沢粒	風化	
144	土師器	SAK1	高坏	坏部～脚部				横方向のナデ、縦方向のミガキ後ナデ	ナデ、指押え	明黄褐	浅黄		光沢のある白い微細粒		
145	土師器	SAK1	高坏	坏部～脚部				横方向のナデ	横方向のナデ、指押え、指頭痕	にぶい橙	灰オリーブ		光沢のある白い粒、黒い粒		
146	土師器	SAK1	高坏	脚部～裾部	推定13.9			ミガキ後ナデ、横方向のナデ	ナデ、指押え	浅黄橙	浅黄橙		微細な光沢のある粒		
147	土師器	SAK1	高坏	脚部～裾部	推定12.0			ミガキ後ナデ、横方向のナデ	ナデ、粘土のつなぎ目	浅黄橙	浅黄橙		微細な光沢のある粒、微細～2mm以下の赤褐色の粒		

第6表 野添遺跡 出土土器察表(2)

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	面		面			
								外	内	外	内		
148	土師器	SAK 1	高坏	裾部				横方向ナデ後ミガキ、ミガキ	ミガキ	灰白 灰黄	暗灰黄 灰白	微粒～1mmの灰白、黄褐色、光る微粒子	風化
149	土師器	SAK 1	高坏	脚部～裾部		推定 12.8		ミガキ	横・斜方向のナデ	橙	橙	微細な光沢粒、1mm以下の透明光沢粒	
150	土師器	SAK 1	埴	口縁部～体部	推定 11.7			ミガキ	ミガキ、黒斑	橙	橙	精良	風化
151	土師器	SAK 1	杓子状土器	柄				指ナデ	指ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の赤褐、黒色粒	
152	土師器	SAK 1	ミニチュア土器	口縁部～底部				指ナデ	指ナデ	橙	橙	1mm以下の灰白、透明光沢粒、微細な光沢粒	
153	土師器	SDK 1	甕	口縁部	推定 31.3			ハケ目、貼付刻目突帯スス付着	ハケ目、粘土のつなぎ目、ナデ	にぶい黄橙 暗灰黄	橙 灰黄	1cm以下の褐色、赤褐色の粒	
154	土師器	SDK 1	壺	口縁部	推定 16.4			櫛描波状文、ナデ、横・斜方向のハケ目、指頭痕	横・斜方向のハケ目、指頭痕、ナデ	淡黄	淡黄 にぶい黄橙	微細なにぶい橙、黒色、灰白の粒	
155	土師器	SDK 1	壺	胴部				斜方向のハケ目、スス付着	縦・斜方向のハケ目	淡黄	淡黄	微細なにぶい橙、黒色、灰白の粒	
156	土師器	SDK 1	壺	胴部				斜方向のハケ目	斜方向のハケ目、指頭痕、粘土のつなぎ目	黄 オリブ黄	淡黄	2mm以下の褐色の粒、1mm以下の黒色の粒	
157	土師器	SDK 1		底部				不定方向のハケ目	ナデ、一部にハケ目	浅黄	浅黄	3mm以下の茶色、灰色、赤褐色の粒	
158	土師器	SDK 1	小型土器	口縁部～底部		5.8		ハケ目、布目圧痕を施す刻目突帯、黒斑、スス付着	ナデ、黒斑	浅黄橙 黒褐	浅黄橙 黄灰	3mm以下のにぶい橙、灰白、黄灰、透明光沢粒	
159	土師器	SDK 1	小型土器	口縁部～底部	推定 10.9	2.4	推定 6.65	横方向のナデ、斜方向のハケ目、斜方向のミガキ	横方向のナデ、丁寧なナデ、横方向のミガキ	黄灰 灰黄	黄灰 浅黄	微細～1mm灰白、透明光沢粒	
160	土師器	SDK 1	壺	坏部				ハケ目、ハケ目後ナデ	ナデ、指頭痕	橙	明赤褐	1mm以下の淡黄色の粒、微細な光沢のある透明な粒	
161	土師器	SDK 1	高坏	脚部				工具による縦・斜方向のハケ目	ナデ、丁寧なナデ	浅黄橙	淡黄 灰黄	6.5mm以下の灰色の粒、1.5mm以下の無色透明で光沢のある粒	
162	土師器	SDK 1	高坏	体部				縦方向の器面調整後ナデ、スス付着	縦方向にナデ	にぶい黄橙	明褐灰	微粒	
163	土師器	SDK 1	高坏	口縁部				ナデ、工具ナデ	丁寧なナデ	灰黄	にぶい黄橙	1mm以下の淡黄、黒色光沢粒、微細な透明光沢粒	
165	土師器	B区：IV層上面	甕	口縁部				ナデ、部分的に工具痕	横方向のナデ、ナデ、縦方向に工具痕	にぶい褐	にぶい褐	1mm～4mm大の茶褐色粒、微細な淡黄透明光沢粒	
166	土師器	B区：IV層上面	甕	口縁部				ナデ、横方向のナデ、工具痕	ナデ、工具痕	明黄褐	明黄褐	1mm～2mmの淡黄、乳白、褐色の粒	
167	土師器	B区：IV層上面	甕	口縁部				横方向のハケ目、スス付着	横方向のハケ目、スス付着	淡黄	浅黄	3mm以下の茶、黄褐色の粒	
168	土師器	B区：IV層上面	甕	口縁部				横方向のナデ、スス付着	横方向のナデ	淡黄	浅黄	3mm以下の茶、黄褐色の粒	
169	土師器	B区：IV層上面	甕	口縁部				ハケ目	ハケ目	浅黄橙 灰黄褐	灰白	4mm以下の赤褐色、褐色、灰色の粒	
170	土師器	C区：IV層上面	甕	胴部				ナデ、工具による押え刻目突帯(布目痕)	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の褐、褐灰、灰白色粒	風化気味
171	土師器	B区：IV層上面	甕	胴部				ナデ、貼付刻目突帯	ナデ	淡黄	浅黄橙	1mm～1.5mm大の無色透明の粒、1mm～4.5mm大の茶褐色の粒、2mm～2.5mm大の灰色の粒	
172	土師器	B区：IV層上面	甕	胴部				ナデ、貼付刻目突帯	ナデ	灰白	灰白	0.5mm～1mm大の無色透明な粒、0.5mm～3mm大の灰、茶褐色の粒	
173	土師器	B区：IV層上面	甕	頸部～胴部				横・斜方向のハケ目貼付突帯	斜方向のハケ目	にぶい黄	明黄褐 にぶい黄	黄色味のある粒、黒色の微細粒	
174	土師器	B区：IV層上面	甕	頸部～胴部				斜方向のハケ目、貼付突帯、スス付着	斜方向のハケ目	淡黄 にぶい黄	にぶい黄	1mm以下の赤褐色の粒、灰白色の粒	
175	土師器	B区：IV層上面	甕	胴部				ハケ目後ナデ、貼付突帯	横方向のハケ目	明黄褐	明黄褐	4mm以下の茶色の粒、2mm以下の半透明の光沢粒	
176	土師器	B区：IV層上面	甕	胴部				横方向のハケ目、貼付突帯、スス付着	横方向のハケ目	淡黄	淡黄	7mm以下の茶色の粒、5mm以下の淡灰色の粒、2mm以下の黒の粒	
177	土師器	B区：IV層上面	甕	頸部～胴部				横方向のハケ目、貼付突帯、スス付着	斜方向のハケ目	浅黄	淡黄	2mm以下の淡茶色の粒、黒い微細粒	
178	土師器	B区：IV層上面	壺	底部		推定 5.15		ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の褐色の粒、3mm以下の灰褐の粒	
179	土師器	B区：IV層上面	壺	底部		推定 5.2		ナデ	ナデ	浅黄	灰黄	5mm以下の黒褐の粒、3mm以下のにぶい橙の粒	
180	土師器	B区：IV層上面	壺	底部		推定 5.0		ナデ、ミガキ、指頭痕一部黒変	不定方向に工具によるナデ	浅黄橙	浅黄橙	4mm以下の黒色の粒、3mm以下の暗褐の粒、2mm以下の半透明の粒	
181	土師器	B区：IV層上面	壺	口縁部～底部	推定 7.45		推定 14.8	全体にミガキ、粗いナデ	横・斜方向にハケ目	淡黄 灰黄橙	灰黄褐	1mm以下の光沢のある黒色の粒、3mm以下の茶褐色の粒	
182	土師器	B区：IV層上面	壺	胴部～底部				ハケ目、ナデ、指頭痕	ナデ、ハケ目	にぶい橙	にぶい橙	微細な無色透明の粒	
183	土師器	B区：IV層上面	壺	口縁部				斜方向のハケ目	不定方向のハケ目	淡黄	浅黄橙	3mm以下の褐色、灰褐色、黒褐色の粒	
184	土師器	B区：IV層上面	甕	口縁部				横・縦方向のハケ目	横・斜方向のハケ目	にぶい黄橙	浅黄橙	4mm以下の粒、微細な黒い粒	
185	土師器	B区：IV層上面	甕	口縁部				横・斜方向のハケ目	横方向のハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の褐色の粒	
186	土師器	B区：IV層上面	甕	口縁部				ハケ目	ハケ目	浅黄橙	浅黄橙	1.5mm以下の褐色、赤褐色、黒色、無色透明の粒	
187	土師器	B区：IV層上面	壺	口縁部				斜方向のハケ目	横方向のナデ、斜方向のハケ目	灰	にぶい黄橙	1mm以下の褐色、黒褐色の粒	

第7表 野添遺跡 出土土器表(3)

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外 面		内 面			
								外 面	内 面	外 面	内 面		
188	土師器	B区：IV層 上面	高坏	体部				ミガキ後ナデ	ナデ	橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰白色の砂粒	
189	土師器	C区：IV層 上面	高坏	坏部～ 脚部				ナデ、横方向のナデ	ミガキ	にぶい黄	にぶい黄	1mm以下の褐色、茶色、灰色の粒	
190	土師器	B区：IV層 上面	高坏	脚部				ミガキ	ナデ	淡黄	黄灰 淡黄	5mm以下の褐色の粒	
191	土師器	B区：IV層 上面	高坏	脚部				ナデ	ナデ、粘土のつなぎ目	にぶい橙	灰黄 灰	2mm以下の淡黄色粒、微細な光沢粒	風化
192	土師器	B区：IV層 上面	高坏	脚部～ 裾部			推定 13.8	縦方向のミガキ	ナデ	淡黄	淡黄	精良	
193	土師器	B区：IV層 上面	高坏	裾部				横方向のナデ	ハケ目、横方向のナデ	黄橙	淡黄	2mmの茶褐色の砂粒	
194	土師器	B区：IV層 上面	高坏	裾部				ミガキ、ナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙	淡黄	細砂粒	
195	土師器	B区：IV層 上面	高坏	裾部				ミガキ、不定方向のナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	1mm以下の白色、透光沢粒、細砂粒	風化
196	土師器	B区：IV層 上面	高坏	裾部				ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	1mm以下の白色、透光沢粒、細砂粒	風化
197	土師器	C区：IV層 上C	小型 土器	頸部～ 底部				ナデ、ミガキ	ナデ、横方向のナデ	にぶい黄	にぶい黄	微粒	
198	土師器	C区：IV層 上面	甕	口縁部				横方向のナデ	工具による横方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の茶褐色の砂粒、1.5mm以下の灰褐色の砂粒	
199	土師器	D区：IV層 上面	甕	口縁部				工具による横方向のナデ	工具による横方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の茶褐色、灰褐色の砂粒、無色透明の微細な砂粒	
200	土師器	D区：IV層 上面	甕	口縁部				横方向のナデ	ナデ、工具による横方向のハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm前後の灰褐色、茶褐色の粒	
201	土師器	SCT1	壺	胴部～ 底部				ヘラミガキ、スス付着	ナデ、スス付着	橙 浅黄橙	浅黄橙 灰黄	3mm大の乳白色の粒、1mm～8mm大の茶褐色の粒、0.5mm～5mm大の灰色の粒	
202	土師器	SG1	壺	底部			推定 6.8	ナデ、剥離	ナデ、指頭痕	灰黄	にぶい黄橙	1mm～7mmの褐色の粒、1mm以下の黒色、灰白色の粒	
203	土師器	B区：III層	坏	口縁部～ 底部	推定 11.8			回転ナデ、ナデ	不定方向の工具による雑なナデ	橙 にぶい橙	にぶい橙 灰オリーブ	0.5mm～1mm大の灰褐、乳白色の砂粒	
204	土師器	D区：III層	坏	体部～ 底部	推定 7.8			回転ナデ、指頭痕、工具痕	回転ナデ	橙	橙	微細な透光沢粒、1mm大の茶色粒	
205	土師器	C区：III層	坏	底部	推定 5.4			回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	橙	橙	2mm以下の赤褐色、乳白色の粒	
206	土師器	B区：III層	坏	体部～ 底部	推定 5.55			回転ナデ、ナデ	回転ナデ	橙	橙	2mm以下の灰白、赤褐、淡黄色の粒	
207	土師器	SCY1	坏	体部～ 底部	推定 5.8			回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	橙	にぶい黄橙	2mm以下の赤褐色、乳白色の粒、0.5mm以下の黒色の粒	
208	土師器	SAK1	皿	底部	推定 6.95			ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	橙	黄橙	1mm前後の茶褐色、黒褐色の粒	
209	土師器	D区：III層	坏	底部	推定 7.5			回転ナデ	ナデ	明赤褐	橙	1mm以下の灰白、赤褐、白色粒、微細な透光沢粒	
210	土師器	C区：III層	坏	体部～ 底部	推定 6.4			ナデ	回転ナデ	橙	にぶい橙	4.5mm以下の赤褐色の粒、2.5mm以下の褐色の粒	
211	土師器	D区：III層	高台付 坏	体部～ 底部				回転ナデ、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な透光沢粒、1mm以下の淡黄、茶色粒	風化
212	土師器	SCT1	高台付 坏	体部～ 底部				ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	1.5mm以下の柱状で黒く光る粒、微細な褐色の粒	
213	土師器	B区：III層	高台付 坏	胴部～ 底部	推定 6.8			ナデ、黒斑	内黒	にぶい黄橙	灰	精良	
214	土師器	SG1	高台付 坏	底部	推定 6.8			ナデ、横方向のナデ	ナデ、内黒	にぶい黄橙	黒	1mm以下の褐色、黒褐色の粒	
215	土師器	B区：II層 上面	鉢	口縁部～ 体部				粗いナデ	布目痕	にぶい橙	橙	2mm～4mmの橙、灰色の砂粒、5mm以上の灰褐色の小石	
216	土師器	B区：II層 上面	鉢	口縁部				粗いナデ	布目痕	橙	橙	細砂粒	
217	土師器	D区：II層 上面	鉢	口縁部				ナデ	布目痕	橙	橙 灰黄	5mm前後の黒褐色、灰褐色の粒	
218	土師器	D区：II層 上面	鉢	口縁部～ 体部				ナデ	布目痕	明赤褐	明赤褐	4mm以下の黒褐色、乳白色の粒	
219	土師器	B区：II層 上面	鉢	胴部				平行タタキ	平行当て具痕	にぶい褐	にぶい褐	微細な淡黄、光沢粒	
220	土師器	D区：II層 上面	鉢	胴部				平行タタキ	平行タタキ	暗灰黄	灰黄褐	きめ細か、微粒	
221	土師器	D区：II層 上面	鉢	胴部				格子目タタキ	同心円当て具	黄灰	灰黄	きめ細か、微細な光沢粒	
222	土師器	D区：II層 上面	鉢	胴部				タタキ	タタキ上をナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	きめ細か、微粒	
223	土師器	D区：II層 上面	鉢	胴部				ナデ	ナデ	灰褐	明褐灰	3mm以下の褐色の粒	
224	紡錘車	C区：IV層 上面								淡黄	にぶい橙	きめ細やか	
225	滑石	B区：II層 上面	蓋の つまみ					スス付着	スス付着	明褐灰 黒	明褐灰 黒	1mm以下の黒褐色、灰白色の粒、微細な金色光沢粒	
226	土師器	SDT1	坏	口縁部～ 底部	推定 12.4	7.2		回転ナデ、ナデ、糸切り底	回転ナデ	浅黄	浅黄	黒、白の微細粒	
227	土師器	SDT1	皿	口縁部～ 底部	推定 8.1	6.1		回転ナデ、ナデ、糸切り底	回転ナデ後指でナデ	浅黄橙 褐灰	浅黄橙 褐灰	黒、白の微細粒	
228	土師器	SDT1	皿	口縁部～ 底部	推定 7.9	推定 7.2		ナデ、糸切り底	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微粒	

第8表 野添遺跡 出土土器表(4)

遺物 番号	種別	出土地点	器種	部 位	(cm)			手 法 ・ 調 整 ・ 文 様 ほか		色 調		胎 土 の 特 徴	備 考
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
229	土師器	SDT 1	皿	口縁部 ~底部	推定 8.0	推定 6.0		ナデ、糸切り底	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	微粒	
230	土師器	SDT 1	皿	口縁部 ~底部	推定 6.4	推定 6.3	推定 1.3	回転ナデ、糸切り底、 ナデ	回転ナデ、ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な透明光沢粒、2mmの乳白色粒1 個5mmの淡黄色粒1個	
231	土師器	SDT 1	皿	口縁部 ~底部	推定 8.2	推定 6.6		横方向のナデ、ナデ、 ヘラ切り底	ナデ、横方向のナデ	にぶい黄 にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の淡黄、茶色粒、微細な透明 光沢粒	
232	土師器	SDT 2	皿	口縁部 ~底部	推定 14.4		推定 3.25	回転ナデ	回転ナデ	淡黄橙 灰黄	にぶい橙 灰黄橙	透明で光るガラス質の細片、0.5mm~ 2mmの灰、茶色の砂粒	
233	土師器	SCT 1	小型 土器	口縁部	推定 14.5			ミガキ、ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な灰色の粒	風化
234	土師器	SCT 1	坏	口縁部	推定 13.5			回転ナデ	ナデ	灰黄	灰黄	微細な光沢粒	
235	土師器	SCT 1	坏	口縁部				回転ナデ	ナデ	灰白	灰白	微細な灰色の粒	
236	土師器	B区：IV層 上面	坏	口縁部 ~底部	推定 13.0			回転ナデ後ナデ、ヘラ 切り	回転ナデ後ナデ	橙 にぶい黄橙	橙 にぶい黄橙	微細な白色、赤褐色の粒	風化
237	土師器	B区：IV層 上面	坏	口縁部 ~底部	推定 11.6	推定 8.2		回転ナデ	横方向のナデ	浅黄	浅黄	1mm以下の淡黄、透明、黒色の粒	
238	土師器	B区：IV層 上面	坏	底部		推定 9.4		ナデ、スス付着	ナデ、スス付着	にぶい黄橙	灰黄褐	微細な光沢粒	
239	土師器	B区：IV層 上面	坏	底部		推定 7.7		ナデ	ナデ	灰黄	暗灰黄	1.5mm以下の橙色粒	
240	土師器	B区：IV層 上面	坏	体部~ 底部		推定 6.75		回転ナデ、ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰白、赤褐色の粒	風化
241	土師器	D区：IV層 上面	皿	口縁部 ~底部	推定 9.1	推定 6.75	推定 1.75	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な透明光沢粒	
242	土師器	C区：IV層 上面	皿	口縁部 ~底部	推定 8.6	推定 1.1	推定 8.15	回転ナデ、糸切り底	回転ナデ、ナデ	淡黄	にぶい黄橙	細砂粒	
243	土師器	D区：IV層 上面	高台 付坏	胴部~ 底部		推定 7.2		回転ナデ	回転ナデ、ナデ	灰黄 黄灰	灰黄 黄灰	2mm以下の白色の粒、微細な黒色の粒	
244	青磁	C区：II層 上面		口縁部				釉	釉	暗青灰	灰	きめ細か、微粒	14~15 C
245	青磁	C区：II層 上面						釉	釉	灰オリーブ	灰	精良	龍泉窯
246	青磁	C区：II層 上面		底部				釉	釉	灰白	灰白	きめ細か、微細	14~15 C
247	白磁	B区：II層 上面		口縁部				釉	釉	灰白	灰白	精良	12C
248	白磁	C区：II層 上面		口縁部				釉	釉	灰白	灰白	精良	12C
249	白磁	C区：II層 上面		口縁部				釉	釉	灰白	灰白	精良	12C
250	白磁	C区：II層 上面		底部				釉	釉	灰白	灰白	精良	12C
251	白磁	C区：II層 上面		底部		推定 6.2		露胎	釉	灰白	灰白	精良	12C
252	青白 磁	C区：II層 上面	合子	蓋				釉(明緑灰)	露胎	灰白	灰白	精良	12C

6 付. 植物遺存体の取り上げ

これまで竪穴住居跡等の遺構を検出した際には土器・石器・鉄器等の遺物の取り上げは必須のこととして行ってきたが、その他の遺物の検出を目的とした覆土の水洗は行っていなかった。

近年、遺跡の調査研究において自然科学分野の導入が進展し、考古学的研究が新展開をみせている。各地の縄文遺跡の調査状況を見ると、各種植物遺存体の検出に伴って大陸から渡来したものか自生していたものかを含めて植物栽培・農耕の論議が活発になっている。

今回、野添遺跡において縄文後期の竪穴住居跡を検出したことから試験的の意味も含めて覆土水洗作業を実施した。水洗を行ったのはJ1・J2・J3の3軒である。

その結果、予想外に多量の種子等を取り上げることができた。同時に、問題点も明らかになり今後の調査方法の課題について把握することができたのは大きな成果であった。

(1) 取り上げ

御池ボラ層に掘り込まれた竪穴住居跡の輪郭が判明した後、黒色の覆土を全て土嚢袋に納め水洗した。土嚢袋は数十袋にもものぼった。水洗作業は通常フローテーション法によって行われるが、覆土に多く含む御池ボラも同様に浮くことから水をかけながら目の大きさの違う3種類の篩にかけ、黒い炭化物とみられるものを中心にピンセットで選別し取り上げた。水洗作業は発掘作業と併行しながら現場事務所前で発掘作業員が毎日交代で行ったが、真冬のため水道管が凍結する日も多く、氷の溶ける午前十時頃から午後四時までの厳しい作業となった。取り上げた炭化物は自然乾燥させ、ラベルを添付し収納した。

(2) 結果

現場撤収後、埋蔵文化財センターにおいて炭化物の形状等の特徴をみながら選別作業を行った。最も多かったのは炭化樹木の細片であったが、意外だったのはクリ?の多さで、しかも殆どは殻はなく中の子葉だけが遺存しており理解に苦しむところである。また、植物種子とみられる楕円形の粒も多量に得ることができた。縦に割れているものでは子葉の様子も観察できるなど思った以上の結果に覆土の取り上げの重要性を再認識させられた。当初、種子様炭化物検出にあまり期待していなかったこともあって同定作業はできていないが、それは今後の課題として今回は炭化物の若干について計測表、拡大写真を掲載した。筆者らの観察では粒状のものはマメ類に近いものが多く、大粒のものはクリアではないかと考えているが、勿論詳細な同定が必要である。

(3) 課題

試験的に行ったこともあり取り上げに幾つかの不備な点があげられる。第一点は取り上げ作業において覆土全量を一括したことである。平面・垂直分布が記録できるように住居跡にメッシュを切り、上部から下部まで埋没過程を明らかにしながら層位的に取り上げる必要がある。第二点は発掘作業員に袋詰め、ラベル記載等を任せ過ぎたために一部住居跡ごとの資料に混乱が生じているのではないかとの懸念を払拭できなかったことであり、第三点は水洗選別作業を作業員が毎日交代で行ったためと一定の基準を設けていなかったことにより取り上げ炭化物に偏りが生じた可能性があることなどである。その結果、多量の種子等の炭化物を得ることができたものの資料的価値において不確定な要素を多分に含むことになってしまった。これらの点については今後の調査において再検討し、さらに、資料の確実性を高めるため炭化種子個々の年代測定、同定作業に必要な標本資料の集成など行っていきたい。

第9表 野添遺跡縄文住居跡出土炭化種子一覧（参考資料）

1 採取数

住居 番号	マメ様を含む小粒炭化物		ク リ 様 炭 化 物		備 考
	完形および復元 できるもの	破損品（全形把 握不可能）	片方残存（形状 把握可能）	破損品（全形把 握不可能）	
J 1	2 6	9	—	—	破損品の項には幾つか の割れているもの個々 を一点として数えてい る
J 2	1 2 3	4 1 9	8	2, 8 7 3	
J 3	5	2 0	—	6 3	
計	1 5 4	4 4 8	8	2, 9 3 6	

2 計測表（任意に抽出した資料を計測したもの）

J 1

番号	直径：mm	短径：mm	備 考
1	6.04	4.24	I 類
2	5.15	3.27	
3	4.26	3.01	
4	4.43	3.57	
5	4.17	2.95	

J 2

番号	直径：mm	短径：mm	備 考
6	4.45	3.50	I 類
7	5.62	3.50	
8	4.94	4.01	
9	5.71	3.87	
10	4.52	2.95	
11	3.89	3.49	II 類
12	12.12	6.78	
13	13.29	10.61	III 類
14	13.77	8.64	
15	19.32	17.15	
16	15.36	3.02	
17	17.29	14.04	
18	12.60	10.64	
19	17.30	13.60	

J 3

番号	直径：mm	短径：mm	備 考
20	4.84	3.62	I 類
21	5.16	3.28	
22	3.68	2.98	
23	14.31	11.24	III 類

※この表は、取り上げおよび選別時に住居跡間の一部混乱のあった可能性があるため参考資料として提示するものである。

3 形状分布

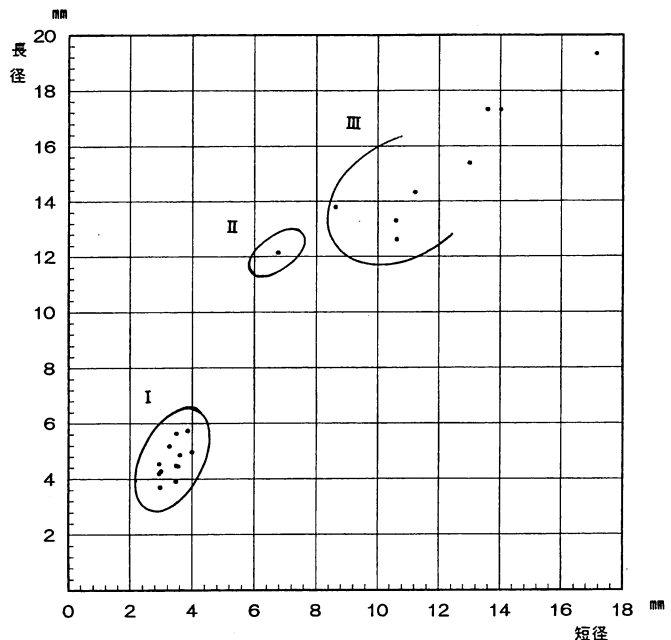
計測表に提示した J 1・J 2・J 3 の資料を合わせて長径および短径によって作成した形状分布状況である。

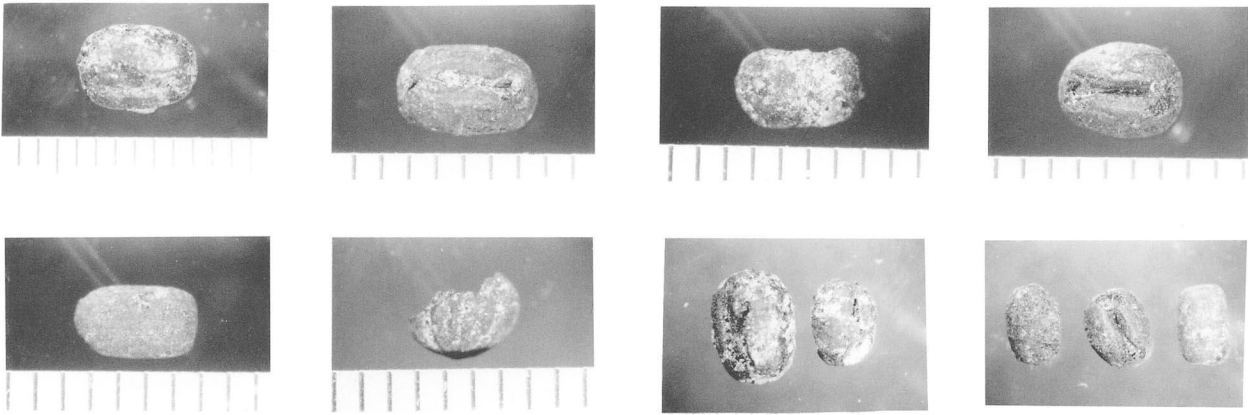
大きく 3 類に分けられる。I 類はマメ類を含む一群、II 類はマメ様であるが大きさにおいて I 類と大きな差があるもの、III 類はクリ様のものである。

I 類；マメ類？ほか（小）

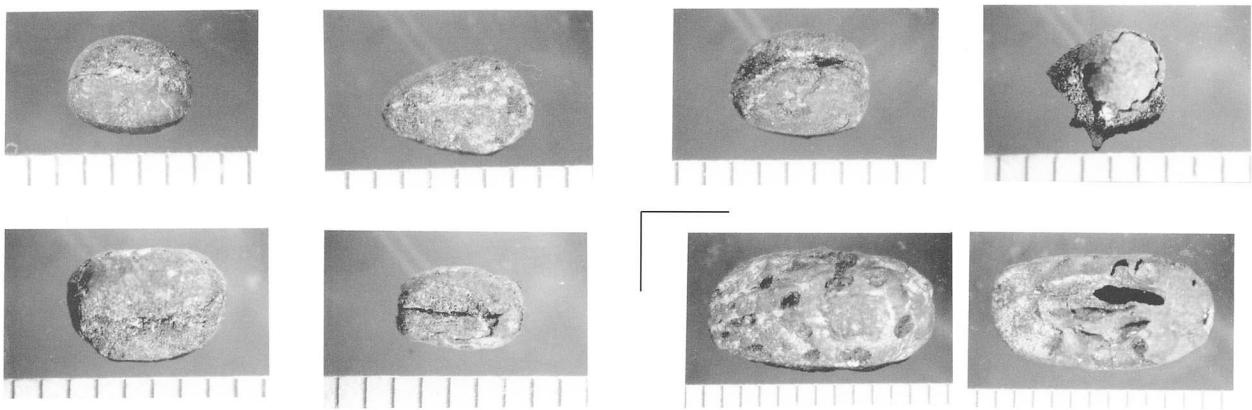
II 類；マメ類？ほか（大）

III 類；クリ？

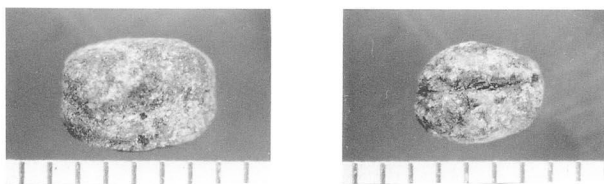
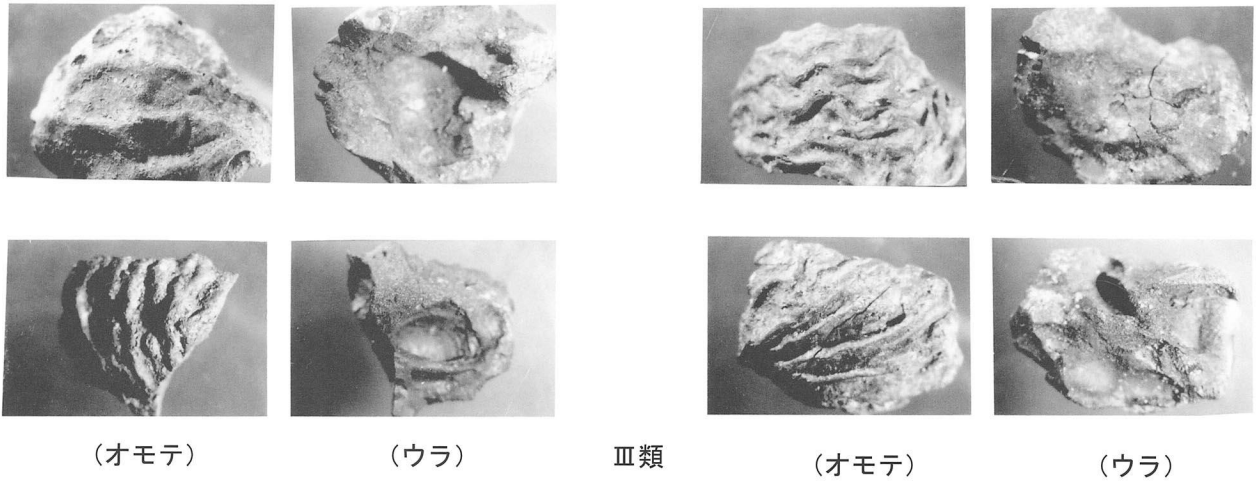




J 1 ; I 類



J 2 ; I 類



J 3 ; I 類

※目盛りはmm

縄文住居跡出土炭化種子顕微鏡写真

第4節 総括

野添遺跡は、縄文時代後・晩期、古墳時代、古代、中世、近世にまたがる複合遺跡で、縄文時代後期に最盛期があったと考えられる。

調査の結果、主な遺構として、Ⅱ層から土壇墓2基、土坑2基、溝状遺構2条、道路状遺構2条、Ⅳ層からは、竪穴住居跡9軒、土壇墓1基、土坑1基が確認され、遺物では縄文時代後・晩期の土器、古墳時代から近世にかけての土師器、須恵器、布痕土器、陶磁器等が出土している。石器では石鏃、剥片、石斧、磨石、敲石などがある。今回の調査の成果を総括してみたい。

1 縄文時代の遺構と遺物について

縄文時代の遺構として、A・B・C区から竪穴住居跡7軒・土坑1基が確認された。出土の土器から後期後葉の住居と考えられる。住居跡はとくにC区に集中しており、当時の集落はC区のなだらかな平地に中規模の集落があったと推察される。住居形態は7軒ともほぼ同様に、直径3～5mの円形プランを呈している。縄文時代の円形竪穴住居の編年的位置については、住居内出土土器から考察すると、肩部に凹点文を施す中岳Ⅱ式相当の深鉢土器が決め手となる。河口貞徳氏によって調査された中岳洞穴出土土器の一群は中岳Ⅱ式と命名され、西平式土器から三万田式土器への移行過程のものとして位置づけられている。その後、中岳Ⅱ式土器が中村遺跡（宮崎県北諸県郡山田町）や平畑遺跡（宮崎県学園都市遺跡群）、王子原遺跡（宮崎県都城市安久町）から出土し、日高孝治氏・北郷泰道氏・菅付和樹氏によると、後期末から晩期前葉に位置づけられ、さらに栗畑光博氏は土器の形態や文様等、細部にわたる再検討をし三万田式と御領式土器に併行する可能性が強いとしている。現状では縄文後期後葉から晩期の間に位置づけられると考えられる。住居内からは炭化物粒は確認されたが硬化面や焼土等は確認できなかった。これらは一部で時期差が想定されるもののほとんどが同時期であると考えられ、とくにC区では地形に沿って3～4m間隔で住居が点在していた様子が窺える。また、1・2・3号住居跡の埋土を水洗いした結果、植物種子とみられる楕円形の炭化物を多量に得ることができた。粒状のものはマメ類に近いものが多く、大粒のものはクリではないかとみられる。松山遺跡（宮崎県えびの市）においても遺物包含層から約30個の炭化クリが検出されており、縄文時代後期では松山遺跡について県内で2例目の出土となる。4号住居跡からは玉が検出されており、学頭遺跡（宮崎県東諸県郡高岡町）出土菅玉に類似している。また、3号住居跡からは磨製石斧、敲石、打製石斧が検出された。土坑については、形状は不整形プランで断面は椀状を呈する。中岳Ⅱ式土器を出土しており、住居跡群と同じ頃形成されたものと考えられる。

今回の調査で出土した縄文土器のうち、ほぼ全体を占めるものは深鉢の凹線文系の土器群である。この土器群の中心は縄文後期後葉から晩期前葉に位置づけられている中岳Ⅱ式である。その他、二平行沈線をもつ「指宿式」の要素をもつものや貝殻文系の土器である「市来系」（58）のものや、組織痕土器が一部みられる。「中岳Ⅱ式」の要素をもつ土器は（1～7、9～13、18～21、24～26、29～32、35～39、44～46、48～51、66、72～73、75、77～81、91、96、98）である。特徴は、器壁が厚く、口縁部が肥厚し、胴部が膨らむもので、口縁部や胴部屈曲部に二条の凹線文や凹点文が施されている。外器面は口辺部が横方向に、胴部以下が縦方向に研磨されているが、ススが付着しており、煮沸容器として使用

されたものと思われる。「指宿式」の要素をもつ土器は(56~57、60~61、70~71、84、94~95、99~100)である。特徴は、頸部がくびれ、胴部には先端が入組繫ぎ文になっている2本1組の沈線による曲線的なモチーフなどが抽出されている。また、縄文晩期前半にみられる組織痕土器(68・88・103・104)は、土器の表面に布などの痕跡がみられる。器形は浅鉢型土器の一種でボール状の丸底を呈する。

2 古墳時代の遺構と遺物について

都城盆地の古墳は北部に集中しており、南部にはない。志布志に抜けるルートとして立地条件上大切な箇所だったと思われる。恐らくは前方後円墳体制に組み込まれない在地系豪族の独自の葬送儀礼をもっていたと思われる。都城盆地は後に諸県郡という行政区に入るのであるが、その行政区の長に治まったのが国富町に古墳群を築いた集団かもしくは都城北部に古墳群を築いた集団と思われる。「記紀」によると諸県君である。都城盆地の古墳の集落は梅北川周辺にあると思われ、野添遺跡も同じ集落のネットワークに組み込まれる範囲にあったかも知れない。

古墳時代の野添遺跡は竪穴住居跡3軒、土壙墓1基から検出されている。住居跡の形態は3軒ともほぼ同様で方形プランを呈する。住居跡の埋土は褐色土に御池ボラ混じりの土で床面に近づくにしたがってボラの含有率が多くなる。1号住居跡は埋土中に全体的に炭化物が含まれていた。1号住居跡の残りはよく、支柱穴は方形配置の4基である。住居跡の時期であるが、口縁部が内湾気味に立ち上がり、貼付刻目突帯を施す甕型土器も出土していることから古墳時代の5世紀から6世紀頃に位置づけられる。SA12・SA13は検出面の深さが4cm~13cmで浅く、遺物は小片で少量なので埋土の状況から古墳時代の遺構として捉えた。3号土壙墓は、7号竪穴住居跡と切り合っている。埋土の状況は1号・2号・3号住居跡と同じで遺構内出土土器をみても、貼付刻目突帯をもつ甕、小型丸底壺などから古墳時代5世紀~6世紀頃に形成されたものと考えられる。遺物は全て土師器で甕・壺・高坏で作りも丁寧で、供献土器の印象が強い。また土壙墓内から蛇紋岩製の勾玉(産地は不明)も検出された。

3 古代及び中・近世の遺構と遺物について

古代については遺構の確認はできず、遺物が少量ながら出土している。布痕土器等が出土していることから10世紀頃と考えられる。

中世から近世の遺物は、遺物包含層のほとんどが耕作により削平されているため少なく、遺構に伴うものも僅かであるが、若干の出土遺物と埋土中の火山灰の状況から遺構の時期の位置づけを行った。検出された遺構は、土壙墓2基、土坑2基、溝状遺構2条、道路状遺構1条である。遺物は中世に属するものであったので、遺構もおおむね中世の所産と考えられるが、溝状遺構・道路状遺構については埋土の状況から近世のものとして判断した。

本遺跡C区の2号土壙墓からは埋納された土師器坏と小皿が3号土壙墓からは小皿が出土した。両遺構からは上面が耕作の影響でカットされていたものの、遺構内堆積土は基本土層II層の下位の土層と判断されるもので、2つの遺構はほぼ同時期と考えられる。II層は桜島文明軽石(15世紀後半)を含むものである。本遺構の中には、陶磁器など時期比定の手がかりとなる遺物は含まれていなかったため、土師器の坏と小皿について、古代末以降、桜島文明軽石までの都城盆地における土師器の編年(栗畑光博氏:都城盆地における古代末~中世前期の土師器編年試案)から2号・3号土壙墓の埋納時期を推定す

る。野添遺跡の2号・3号土壙墓の出土は時期をみると、2号土壙墓の土師器は底部切り離しがへら切り1点に対し、糸切り4点という組成である。口径は小皿が6.4～8.2cmで、坏が12.4cmという具合に小皿に多少のバラツキがあるが、小皿が8cmを少し越えるぐらいで、坏が12cmを少し越えるぐらいという傾向は見て取れる。3号土壙墓の土師器は小皿の口径が14.4cmとなり大きめとなる。これらの特徴から2号・3号土壙墓の土師器の編年は田谷・尻枝SC26段階に該当すると思われる。2号土壙墓の小皿については、口径が大きく正坂原SC01段階に相当するものであるが埋土の状況から2号土壙墓と同時期のものとして捉えた。時期は13世紀中頃から14世紀初頭にかけての所産ではないかと思われる。都城においてこの段階に含めて考えられるのが、平峰遺跡の大溝SD01、久玉遺跡3次調査A地区4号溝、同遺跡1次調査D地区SD16出土資料である。また、2号・3号土壙墓はC区のなだらかな平面地に位置しており周囲には建物遺構等の存在が認められなかったことから祭祀的な土師器埋納遺構と考えられるのではないだろうか。

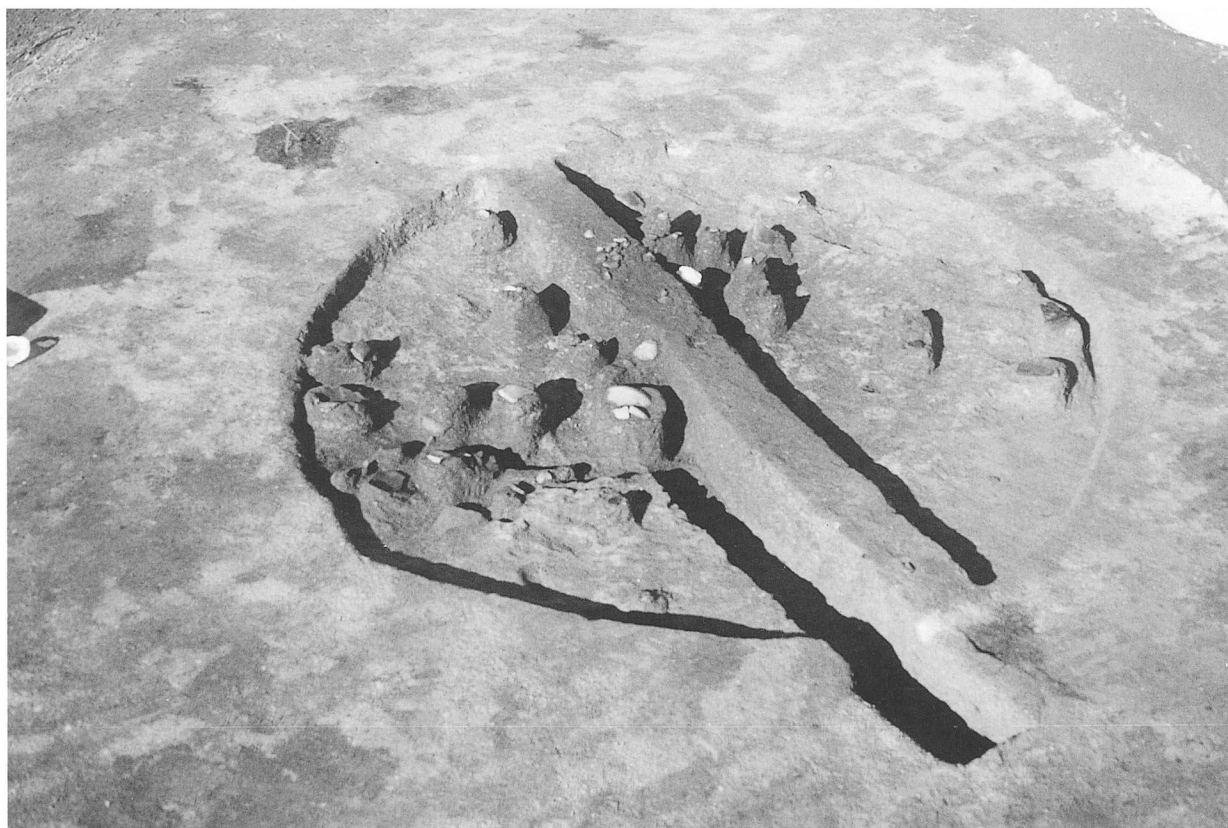
B区中央部で検出された1号・2号溝状遺構は北西方向に並列して走行している。出土遺物は確認されていない。遺構埋土の状況から近世の遺構として捉えたが、他に同時期の遺構は確認されていない。溝は地形に沿うものではなく、排水だけの機能をもつものではないように思われる。両溝とも部分的に硬化面が確認されることから「道」としての機能も推測される。

C区南端部で検出された道路状遺構は、北東から南西に走行する。道路の幅は検出面で約2mで、当時はさらに幅広であったことがうかがえ、断面をみると硬化層が2層観察され、2時期にわたって使用されたものと推定される。硬化層の中に15世紀後半に降下したとされる文明白ボラが混在していることから中世以降から近世にかけてのものと推測される。出土遺物が古墳時代の甕、古代のものと思われる高台付き埴などで流れ込みの遺物であると思われる。そのため時期決定には説得力に欠ける。

遺物包含層のほとんどが耕作により削平されていたため、中・近世の遺物の出土量は少なかった。遺物は、土師器7点、須恵器1点、白磁・青磁・青白磁などの陶磁器が9点出土している。土師器(236～242)、須恵器(243)等については、出土点数が少ないため時期については不明である。白磁碗(247～251)は、大宰府分類白磁碗IV類に分類され、大宰府C期の11世紀後半～12世紀前半頃と考えられる。青白磁碗(252)も同時期と思われる。青磁碗(245)は、大宰府分類の龍泉窯系青磁碗IIc類?が出土しており、大宰府F期の13世紀中頃～14世紀初頭前後と考えられる。また他の青磁碗(244・146)は、14世紀後半～15世紀前後のものと推察される。

〈参考・引用文献〉（敬称略）

- 「宮崎県史 資料編 考古1」宮崎県史刊行会
「宮崎県史 通史編 原始・古代1」宮崎県史刊行会
「宮崎県史 通史編 原始・古代2」宮崎県史刊行会
「王子原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第45集 2001
「ワクド石遺跡」『熊本県文化財調査報告』第144集 1994
「梅木原遺跡」『小林市文化財調査報告書』第11集 2000
「都之城跡・久玉遺跡・宮ノ下遺跡・堂山（南地区）遺跡・牟田ノ上遺跡・屏風谷第1遺跡」
『都城市文化財調査報告書』第13集 1991
「大岩田村ノ前遺跡」『都城市文化財調査報告書』第14集 1991
「天神原遺跡」『都城市文化財調査報告書』第23集 1993
「久玉遺跡第5次・油田遺跡・正坂原遺跡」『都城市文化財調査報告書』第25集 1993
「樺山・郡元地区遺跡」宮崎県教育委員会 1992
堂込秀人「南九州縄文晩期土器の再検討 ―入佐式と黒川式の細分―」『鹿児島考古第31号』1997
水ノ江和同「北部九州の縄文後・晩期土器 ―三万田式から刻目突帯土器の直前まで―」
『縄文時代8』縄文時代研究会 1997
金丸武司「宮崎県における緑帯文成立期以前の土器について」宮崎縄文研究会 1997
「横市地区遺跡群 肱穴遺跡(1)・今房遺跡・馬渡遺跡（第1次）」
『都城市文化財調査報告書』第50集 2000
「上牧第2遺跡・母智丘原第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第45集 2001
「母智丘谷遺跡・畑田遺跡・嫁坂遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第45集 2002
都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内中央部）『都城市文化財調査報告書』第5集 1986
都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内南部）『都城市文化財調査報告書』第6集 1987
「梅北佐土原遺跡・中尾遺跡・蓑原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第42集 2001
戸高充則編「縄文時代研究辞典」東京堂出版 1994
「源藤遺跡」宮崎市教育委員会 1987
「前原西遺跡」『宮崎学園都市遺跡調査報告書』第4集 宮崎県教育委員会 1988
「平畑遺跡」『宮崎学園都市遺跡調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 1985
「陣ノ内遺跡」『宮崎学園都市遺跡調査報告書』第4集 宮崎県教育委員会 1988
太宰府市教育委員会200『大宰府条坊跡XV―陶磁器分類―』太宰府市の文化財第49集



1号竖穴住居跡（SAJ 1）検出状況



2号竖穴住居跡（SAJ 2）検出状況



3号竖穴住居跡 (SAJ 3) 検出状況



7号竖穴住居跡 (SAJ 7) ・ 2号竖穴住居跡 (SAK 2) ・ 1号土壌墓 (SDK 1) 完掘状況



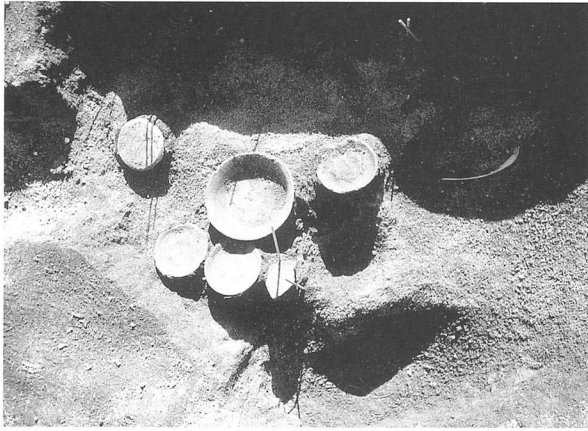
1号土壙墓 (SDK 1) 検出状況



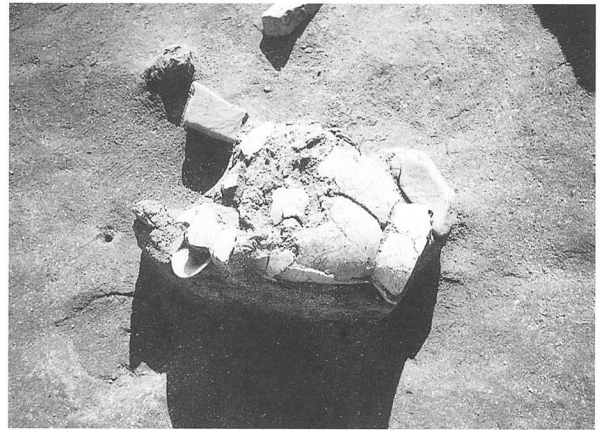
1号土壙墓 (SDT 1) 検出状況



1号竪穴住居跡 (SAK 1) 完掘状況



1号土壙墓 (SDT 1) 土器検出状況



1号竖穴住居跡 (SAK 1) 土器検出状況



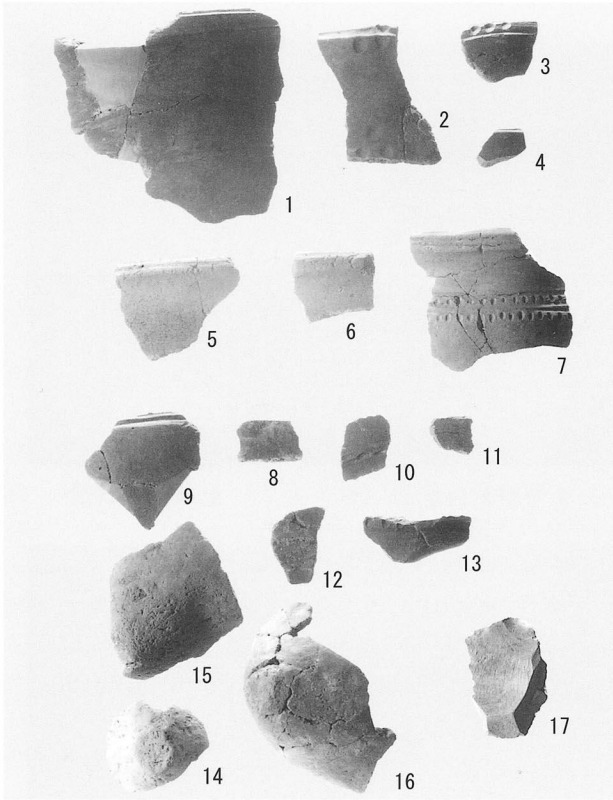
2号土坑 (SCT 2) 完掘状況



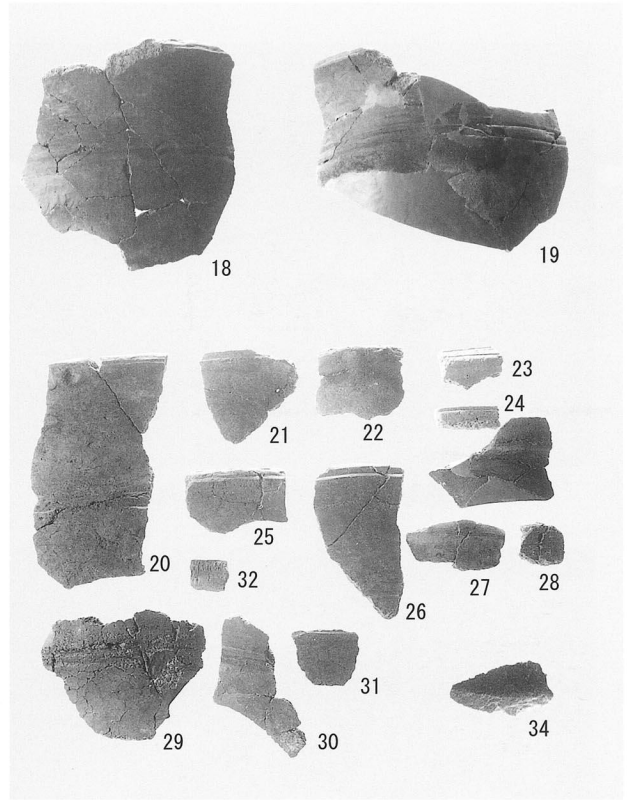
2号土壙墓 (SDT 2) 完掘状況



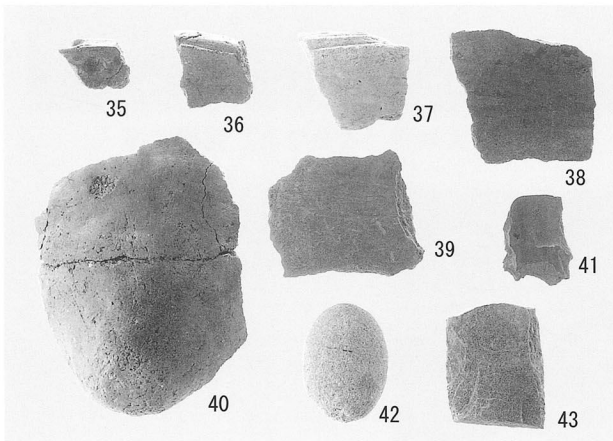
1号道路状遺構完掘状況 (SG 1)



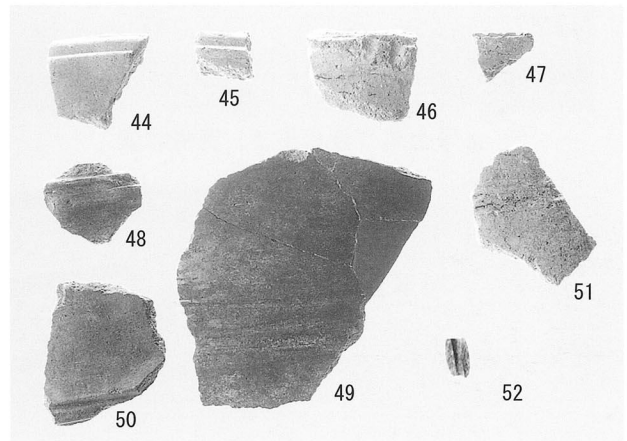
J 1号竖穴住居跡出土遺物



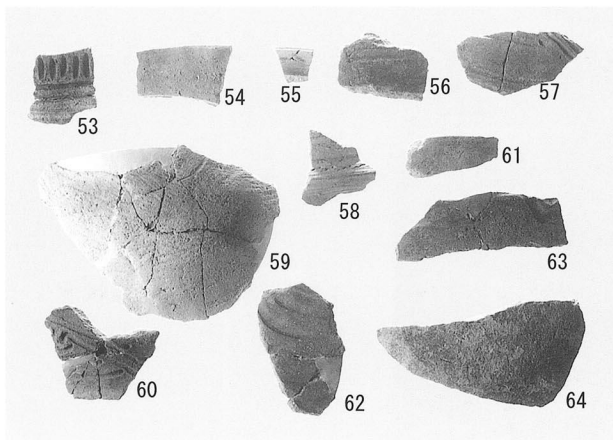
J 2号竖穴住居跡出土遺物



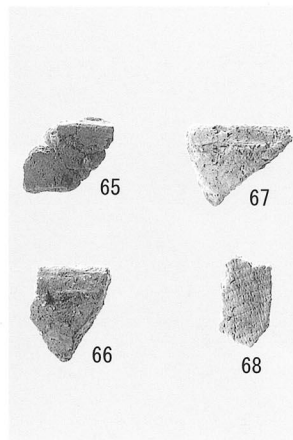
J 3号竖穴住居跡出土遺物



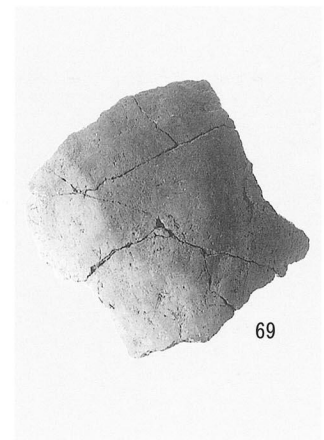
J 4号竖穴住居跡出土遺物



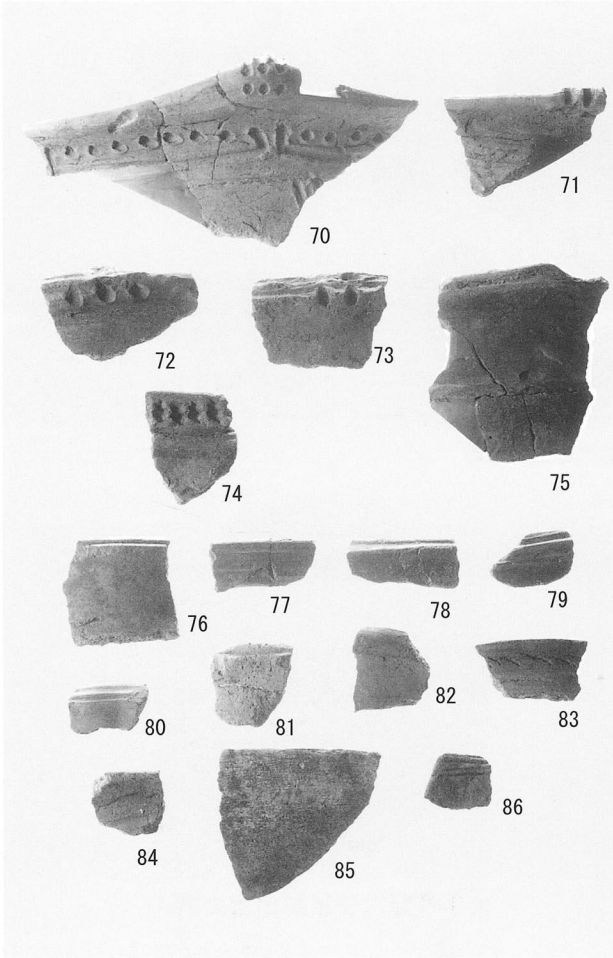
J 5号竖穴住居跡出土遺物



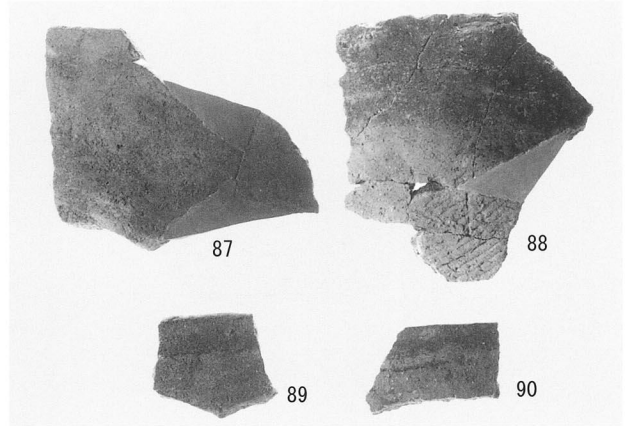
J 7号竖穴住居跡出土遺物



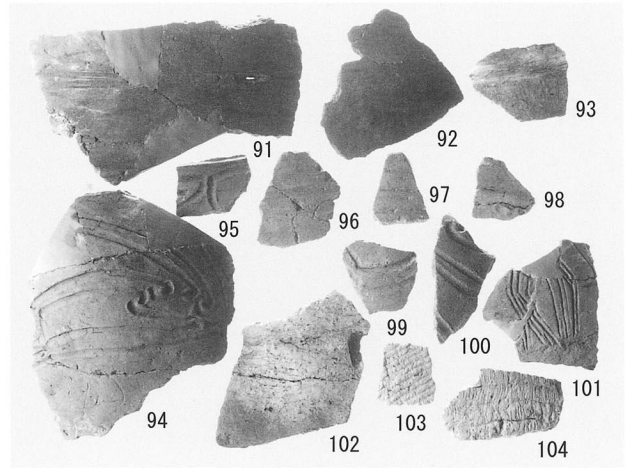
J 1号土坑出土遺物



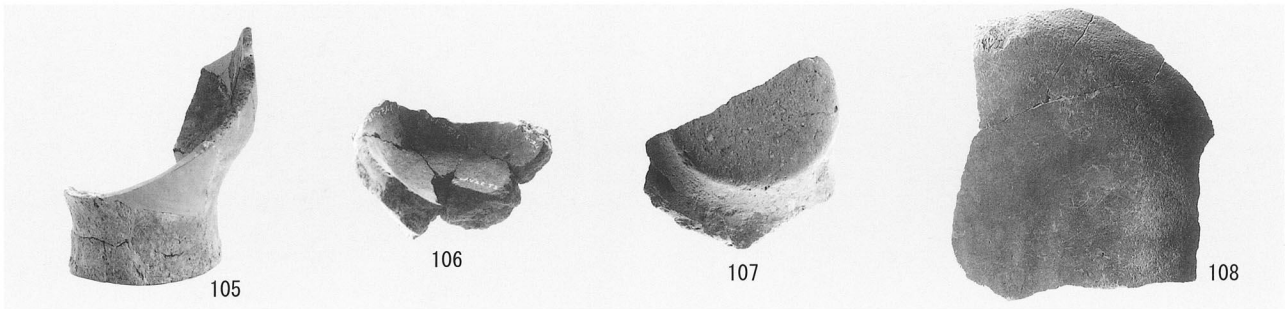
野添遺跡出土縄文土器(1)



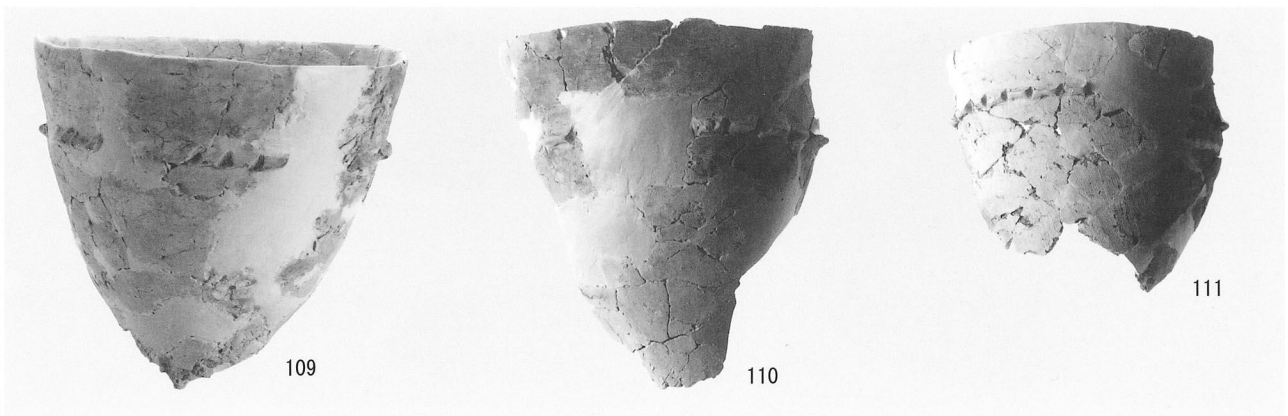
野添遺跡出土縄文土器(2)



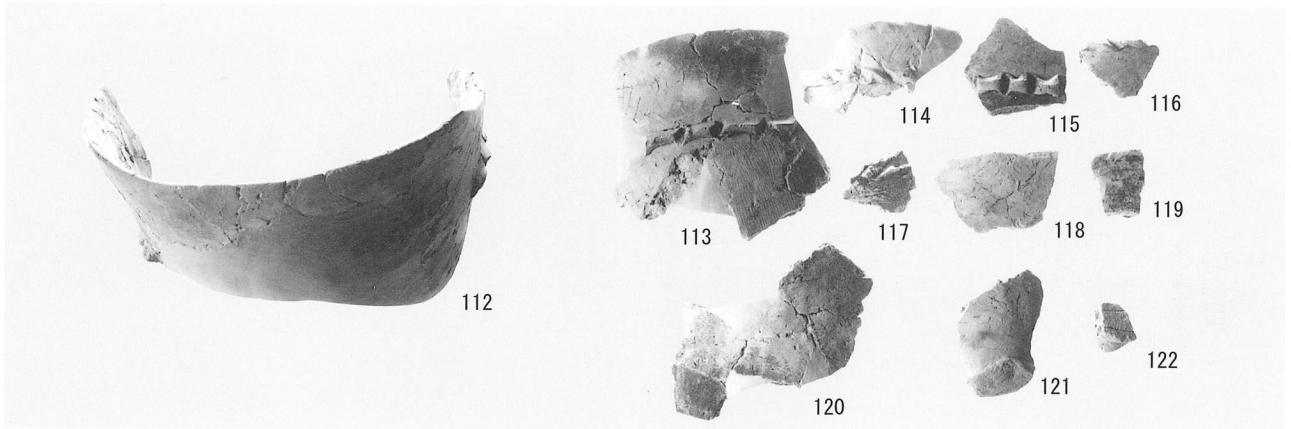
野添遺跡出土縄文土器(3)



野添遺跡出土縄文土器(4)



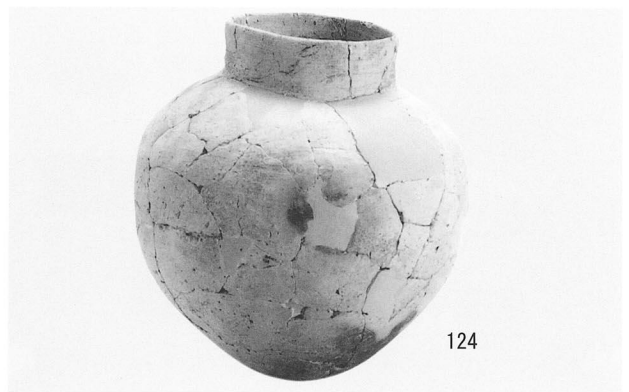
K 1号竪穴住居跡出土土器(1)



K 1 号竖穴住居跡出土土器(2)



K 1 号竖穴住居跡出土土器(3)



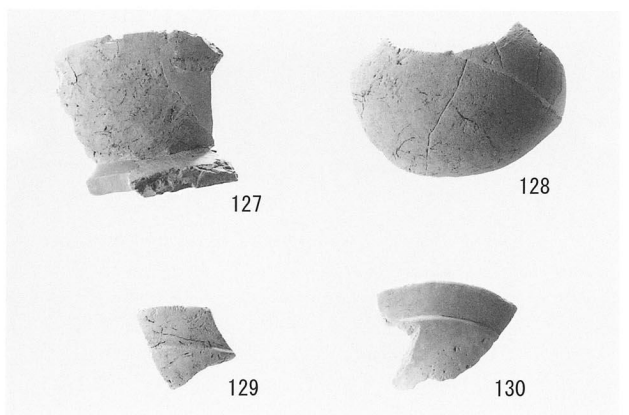
K 1 号竖穴住居跡出土土器(4)



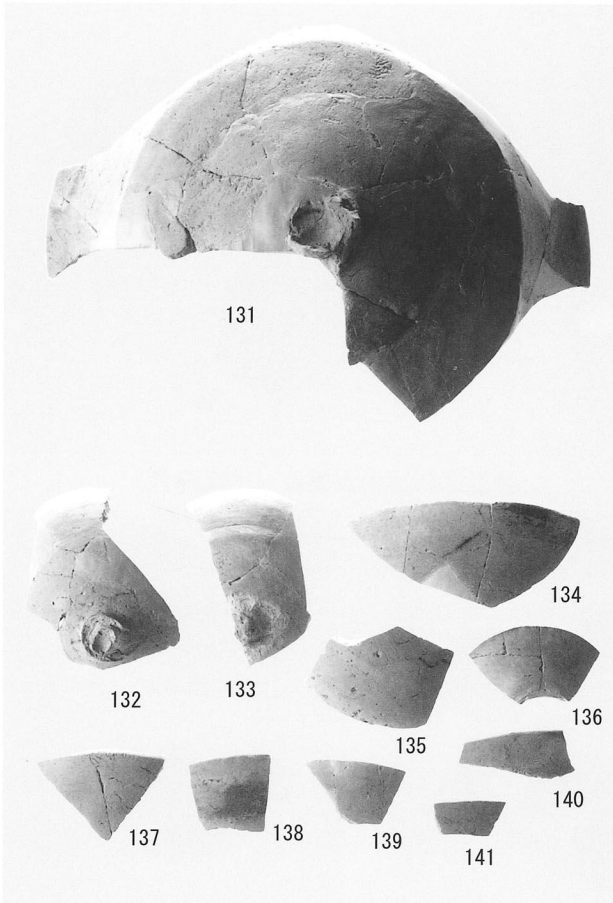
K 1 号竖穴住居跡出土土器(5)



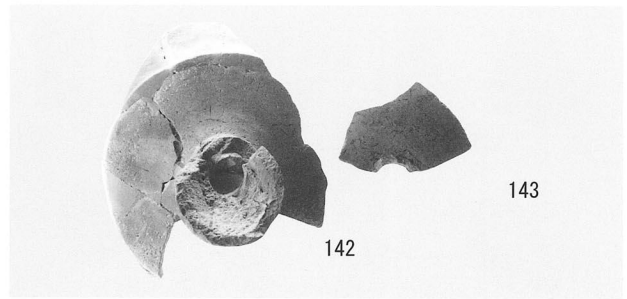
K 1 号竖穴住居跡出土土器(6)



K 1 号竖穴住居跡出土土器(7)



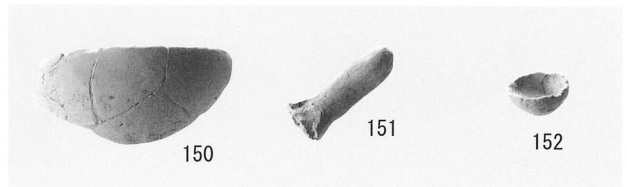
K 1号竖穴住居跡出土土器(8)



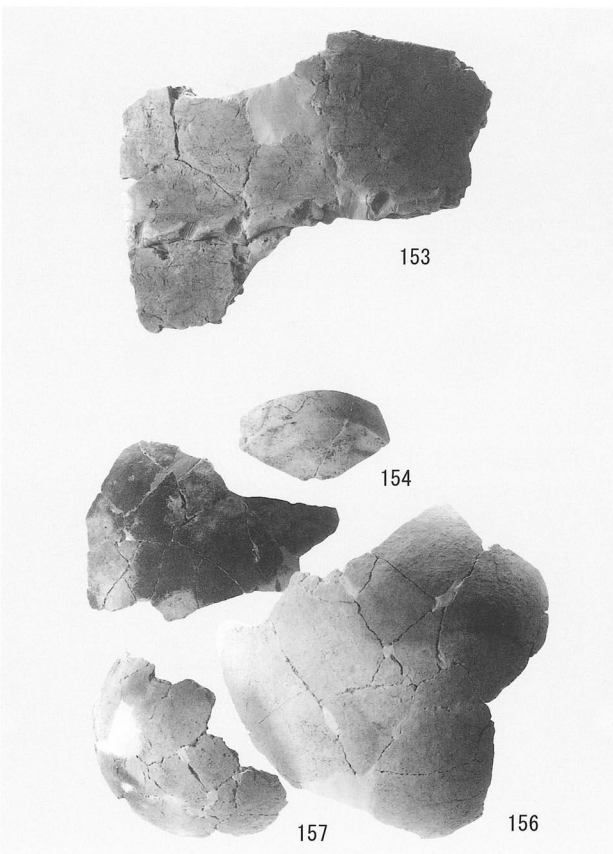
K 1号竖穴住居跡出土土器(9)



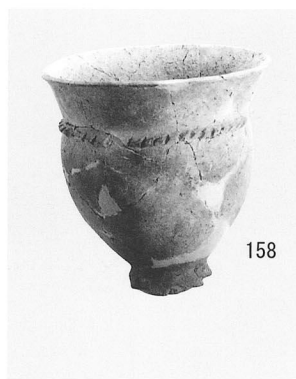
K 1号竖穴住居跡出土土器(10)



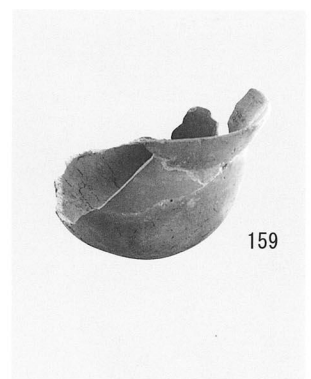
K 1号竖穴住居跡出土土器(11)



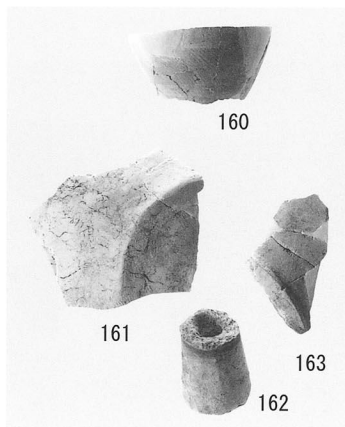
K 1号土壙墓出土遺物(1)



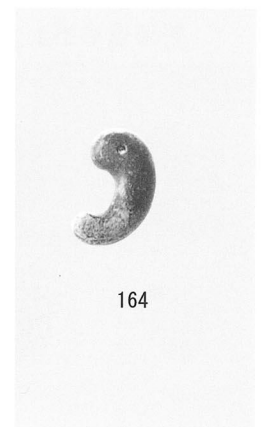
K 1号土壙墓出土遺物(2)



K 1号土壙墓出土遺物(3)

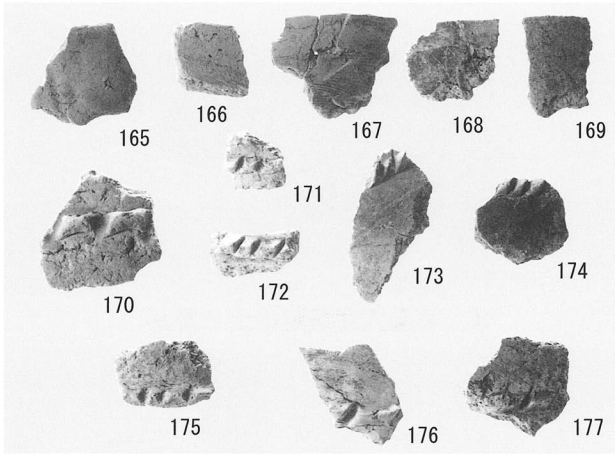


K 1号土壙墓出土遺物(4)

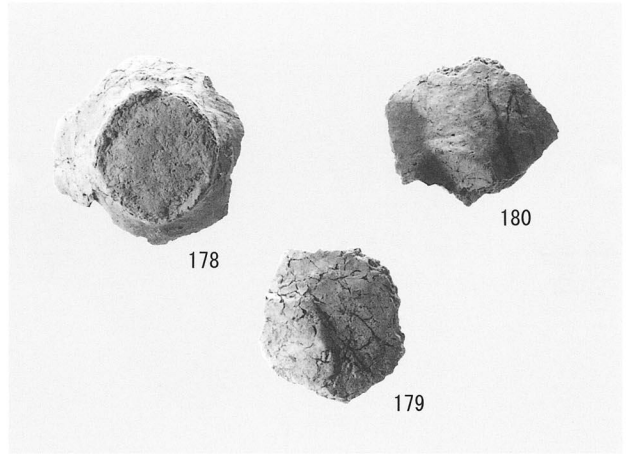


K 1号土壙墓出土遺物(5)

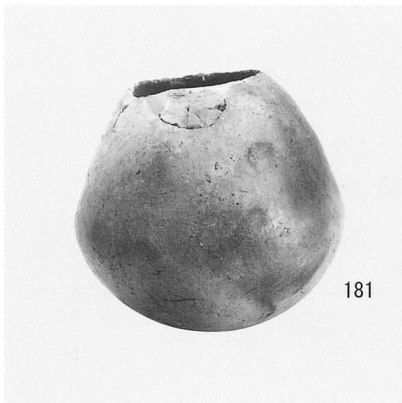
野添遺跡 図版10



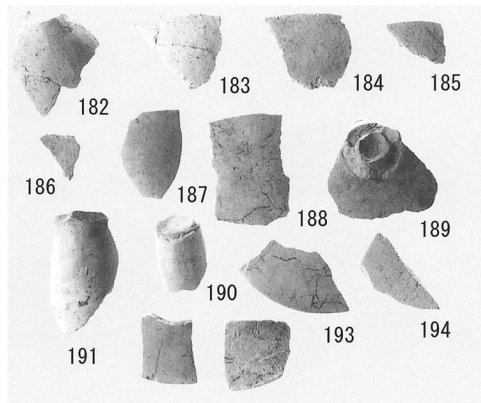
野添遺跡出土土器 1 (古墳時代)



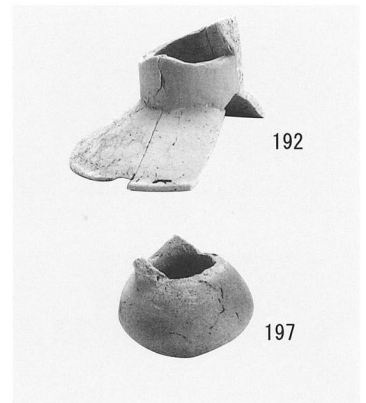
野添遺跡出土土器 2 (古墳時代)



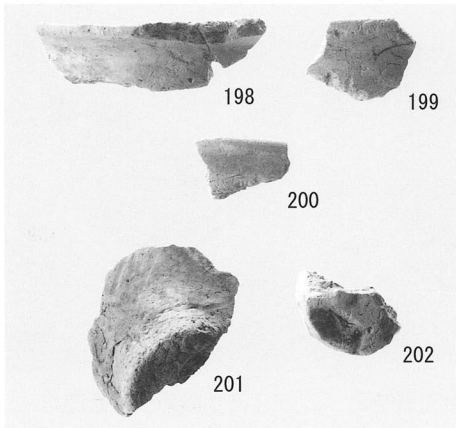
野添遺跡出土土器 3 (古墳時代)



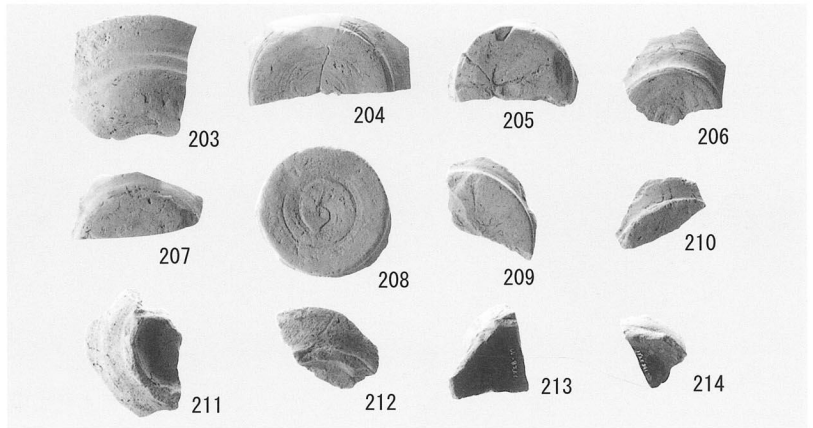
野添遺跡出土土器 4 (古墳時代)



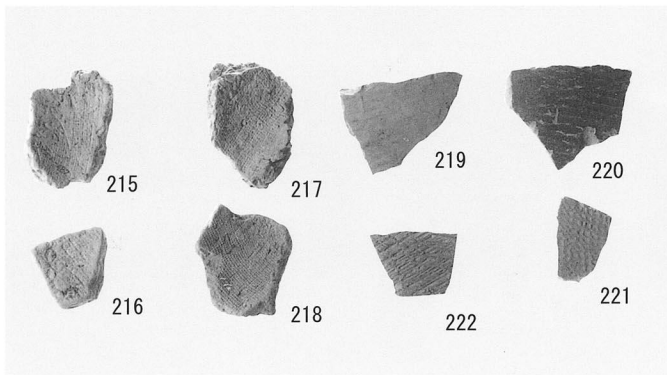
野添遺跡出土土器 5 (古墳時代)



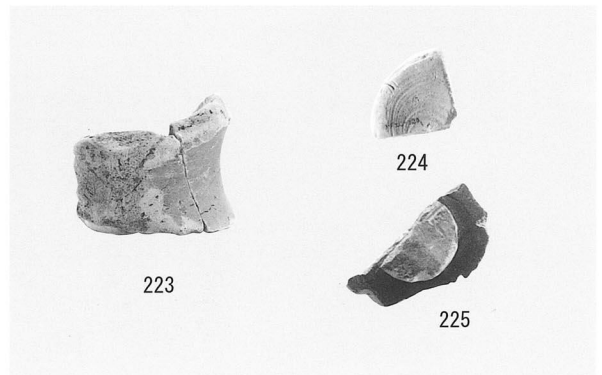
野添遺跡出土土器 1 (古代)



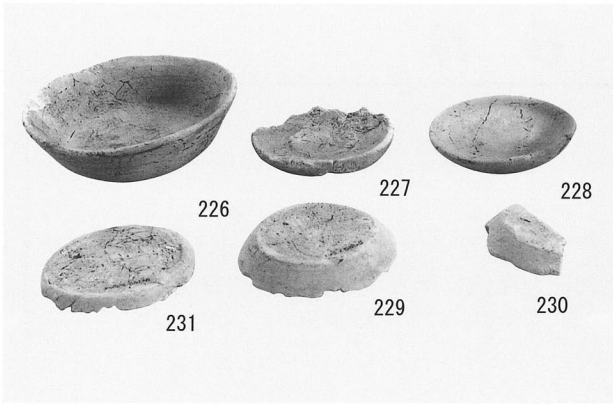
野添遺跡出土土器 2 (古代)



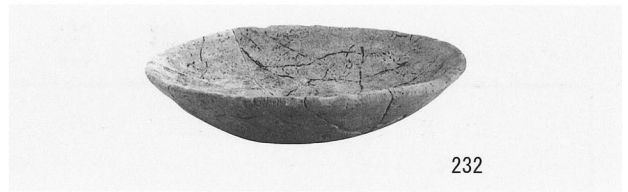
野添遺跡出土土器 3 (古代)



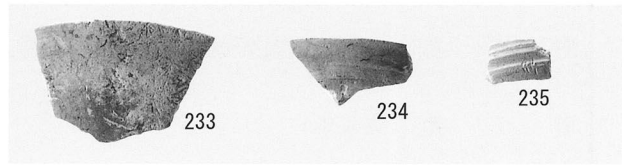
野添遺跡出土土器 4 (古代)



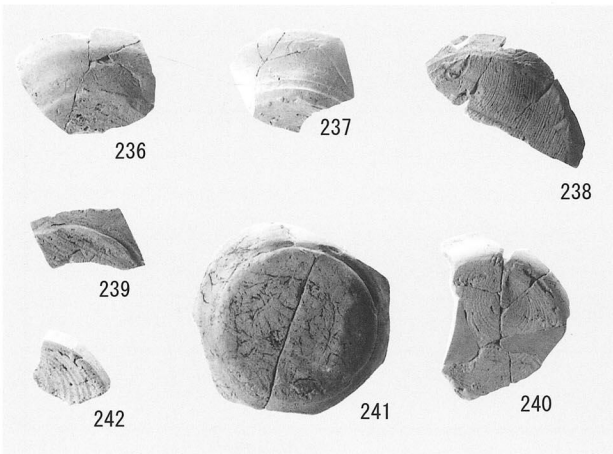
T 1号土壙墓出土土器



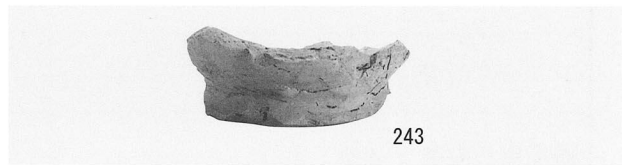
T 2号土壙墓出土土器



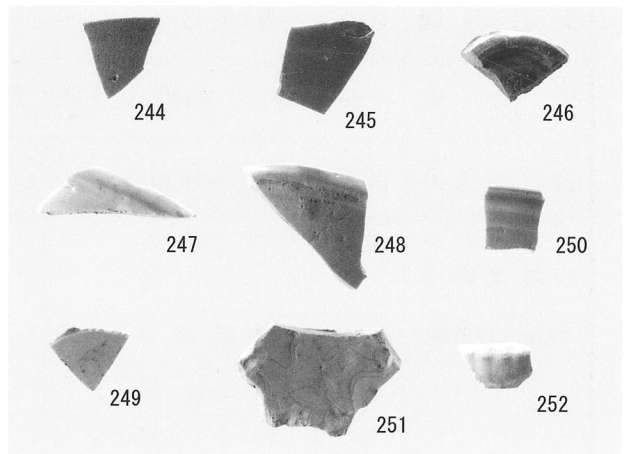
T 1号土坑出土土器



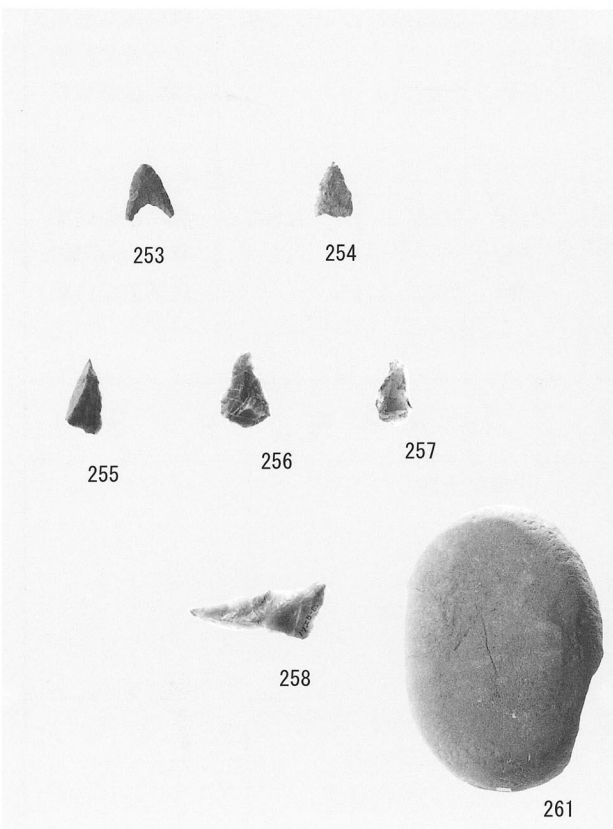
野添遺跡出土土器 1 (中世~近世)



野添遺跡出土土器 2 (中世~近世)



野添遺跡出土土器 3 (中世~近世)



野添遺跡出土石器

報 告 書 抄 録

ふりがな	とよみつおおたに のぞえ					
書名	豊満大谷遺跡 野添遺跡					
副書名	農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次	第4集					
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	第83集					
編集担当者名	玉利 勇二					
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター					
所在地	〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地 Tel. 0985-36-1171					
発行年月日	西暦 2004年1月30日					
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
とよみつおおたに いせき 豊満大谷遺跡	みやぢょうし とよみつちょう あぎ おおたに 都城市豊満町字大谷	31度 41分 25秒	131度 5分 59秒	2001. 9. 17 } 2002. 10. 9	1,100	農用地整備事業「都城区域」 農業道路建設
	コ ー ド					
	市 町 村 遺跡番号					
	45202 -					
のぞえ いせき 野添遺跡	みやぢょうし やすひさちよう あぎ まえ はた 都城市安久町字前畑	31度 41分 42秒	131度 5分 42秒	2001. 11. 13 } 2002. 2. 15	1,500	農用地整備事業「都城区域」 農業道路建設
	コ ー ド					
	市 町 村 遺跡番号					
	45202 -					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
豊満大谷遺跡	散布地	縄文時代 弥生時代～ 中世 近世～近代	竪穴住居跡 1 掘立柱建物跡 1 土杭7・石囲い炉 1 集石状遺構 1 溝状1・畝状遺構 8 道路状遺構 3	縄文土器 石器 土師器 須恵器 布痕土器		
野添遺跡	散布地 集落	縄文時代 古墳時代 古代 中世 近世	竪穴住居跡 9 土壇墓 3 土杭 3 溝状遺構 1 道路状遺構 2	縄文土器(後・晩期) 土師器・須恵器 布痕土器・陶磁器 石器・勾玉・玉		

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第83集

豊満大谷遺跡 野添遺跡

農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

2004年1月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印刷 合資会社 愛文社印刷所
〒880-0852 宮崎県宮崎市高洲町222番地
TEL 0985-28-8111
